

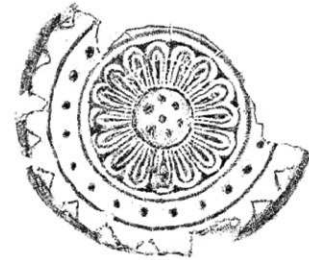
(財)大阪府文化財センター調査報告書 第180集

吹田操車場遺跡Ⅲ

吹田市所在

# 吹田操車場遺跡Ⅲ

吹田信号場駅基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



二〇〇八年七月

2008年7月

財団法人 大阪府文化財センター

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第180集

吹田市所在

# 吹田操車場遺跡Ⅲ

吹田信号場駅基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター





C 1・C 2 地区群集土坑



## 序 文

吹田操車場遺跡は、千里丘陵南東部からなだらかに傾斜してきた低地部に立地し、大正時代には東洋一と言われた「吹田操車場」跡に所在する遺跡です。この地は、山城と難波を結ぶ幹線道路「三嶋路」に接し、南には西国と都を結ぶ津泊があり、古くから交通の要衝として栄えてきました。

特に北に臨む千里丘陵には、千里古窯跡群として知られる古墳時代から奈良時代にかけて須恵器を焼くための登窯が多くつくられ、豊中市域にある桜井谷窯跡群とともに我が国でも屈指の須恵器生産地帯でした。また須恵器生産が終息した後も、難波宮や平安宮に瓦を供給した七尾瓦窯・吉志部瓦窯といった官営瓦窯が次々と操業され、日本の古代窯業史において重要な役割を担ってきた地域でもあります。

さて、今回報告いたします内容は、吹田信号場駅基盤整備工事に先立って実施した調査成果です。ここでは、以前の試掘調査でその存在が指摘されていました古墳時代から奈良時代頃にかけての群集土坑をはじめ、弥生時代以降の谷地形や自然流路とその地形を利用した中近世の耕地開発の様子などが、徐々に明らかになってきています。今回報告する土坑出土の軒瓦は、聖武天皇の後期難波宮に葺いた瓦であり、それは調査地の北東にある七尾瓦窯で生産されたことが判明しています。当遺跡と瓦窯の関係を推察させる成果と考えます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 国鉄精算事業 西日本支社、日本貨物鉄道株式会社、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会をはじめとする関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2008年7月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

1. 本書は、大阪府吹田市芝田町他地内に所在する吹田操車場遺跡06-1の発掘調査報告書である。
2. 調査は吹田信号場基盤整備事業に伴い2006年3月1日～2008年7月31日の間、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は2006年8月8日～2007年6月29日まで行った。遺物整理作業は2007年8月1日より開始し、2008年7月31日本書の刊行を以って終了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。  
〔調査〕2006年度・2007年度  
調査部長 赤木克規、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 小野久隆、調査第一係長 松岡良憲、主任技師 駒井正明、技師 中岡 勝、専門調査員 長嶺 睦  
〔整理〕2007年度  
調査部長 赤木克規、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 小野久隆、調査係長 松岡良憲、主査 中岡 勝、副主査 駒井正明、専門調査員 向井 妙
4. 遺物の撮影は中部調査事務所主査 片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理と樹種の同定については同主査 山口誠治が行った。墨書土器の判読については奈良大学教授 東野治之氏、大阪府教育委員会 久米雅雄氏に有益なご教示をいただいた。
5. 発掘調査および整理作業の過程で当センター理事長水野正好はじめ職員・非常勤職員に協力を得、以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。  
石田成年、井原 稔、伊部貴雄、梅本康広、大関逸子、大村敏行、大矢祐司、尾上 実、金淵正司、賀納章雄、上林史郎、鐵 英記、近藤康司、下大迫幹洋、白石耕治、鈴木陽一、積山 洋、田中充徳、富田博之、友岡英男、西本安秀、橋本高明、橋本久和、東原直明、平尾政幸、廣田浩治、福田英人、藤田 淳、藤田道子、藤原 学、堀口健二、増田真木、水之江和同、三宅正浩、宮野淳一、三好 玄、森岡秀人、森屋直樹、文殊省三、山上弘、山崎敏昭、渡邊昌宏
6. 調査の実施に当たり、自然科学分析として花粉・珪藻分析を圃古環境研究所へ、土壌X線分析をバリノ・サーヴェイ爾へ委託した。その報告は第IV章「自然科学的分析」に掲載した。
7. 本書の作成にあたっては各担当者がそれぞれ寄稿し、執筆分担を下記に記した。また編集は中岡が行った。  
第I章 中岡・駒井 第II章 長嶺・駒井 第III章 中岡・向井・駒井  
第V章 中岡・向井・駒井 第VI章 中岡
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は東京湾平均海面 (T.P. +) を使用している。
2. 座標値の単位はすべてkmである。座標は世界測地系 (測地成果 2000) で表示した。
3. 全体図および遺構実測図の方位は座標北である。ちなみに真北は北より東へ0°15'、磁北は真北より西へ7°04'振れる。
4. 現地調査や遺物整理は当センター『遺跡調査基本マニュアル』2003に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
6. 遺構番号は基本的に調査区ごとに発見順に付した連番と遺構名で表現する。ただし同一番号・同一種類の遺構が複数存在するので、C3・C4地区は1000番代、C5・C6地区は2000番代で表現し、第2位以下の数字で遺構番号を表した。なお挿図のピットに限り、遺構番号のみで表記した。  
例 C3・C4地区の50土坑→1050土坑 C5・C6地区の50溝→2050溝
7. 遺構面全体図は300分の1、遺構平・断面図は40分の1を原則として使用している。
8. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基調とするが、木製品・金属製品の一部を2分の1、打製石器・古銭を3分の2で掲載するなど、一部はこの限りではない。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9. 遺構図の断面の位置は、・ ・にて明記した。
10. 掲載した遺物は掲載順に通し番号を与えている。
11. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
12. 出土遺物のうち、須恵器・施釉陶器の断面は黒塗り、黒色土器内面・瓦質土器および瓦の断面はアミカケ、石器欠損部は黒塗りとし、それ以外はすべて白抜きとした。
13. 出土遺物の形態・調整および編年には下記の考え方を適用した。参考・引用文献や本文中の註については第二章・第六章末尾にまとめた。

**弥生土器・土師器** 弥生土器については、地域を考慮して森田(1990)を、土師器については米田(1991)、青木遺跡調査団(1976・1978)、森岡・西村(2006)を参考とした。7世紀以降については、須恵器と同じく飛鳥・平城宮編年を用いた。

**須恵器** 飛鳥・平城宮編年(西1976・1978)を主として使用した。千里古窯跡群、特に吹田窯跡群が直近にあるが、出土資料の大半が衰退・廃絶期にあたることから当地での詳細が明らかな資料は少ない。従って吹田編年(藤原1981・1996)や窯の号数(S T○)は補足的に用いた。ただし、千里産須恵器に指摘される地方色、あるいは都城との違いによる型式差は具体的に抽出・考慮できておらず、多少の差があると思われる。また、煩雑さを避けるために桜井谷編年(木下1982・2005)は使用しなかった。型式の同定や暦年代については佐藤(2003・2004・2007)を参考とした。

**中世土器・近世土器・瓦他** 各中世土器編年は百瀬(1995)、大川(1996)を使用し、近世土器他は江戸遺跡研究会(2001)、大橋(1989)を主として用いた。これら出典については第六章末尾に記した。



# 目 次

巻頭図版・序 文・例 言・凡 例

第1章 調査に至る経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(中岡) … 1
第2節 調査・整理の方法	(駒井) … 2
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的・歴史的環境	(長嶺) … 3
第2節 吹田操車場遺跡の既往調査	(長嶺) … 5
第3節 吹田操車場略史	(駒井) … 7
第III章 調査成果	11
第1節 基本層序	(中岡) … 11
第2節 C1・C2地区の調査	14
1. 第1面の遺構・遺物	(中岡) … 14
2. 第2面の遺構・遺物	(中岡) … 14
3. 第3面の遺構・遺物	(中岡・向井・駒井) … 17
4. 包含層出土遺物	(中岡・向井・駒井) … 38
第3節 C3・C4地区の調査	43
1. 第1面の遺構・遺物	(中岡) … 43
2. 第1-1面の遺構・遺物	(中岡) … 46
3. 第2面の遺構・遺物	(中岡・向井) … 46
4. 包含層出土遺物	(中岡・向井) … 54
第4節 C5・C6地区の調査	55
1. 第1面の遺構・遺物	(中岡) … 55
2. 第2面の遺構・遺物	(中岡) … 60
3. 第3面の遺構・遺物	(中岡) … 60
4. 盛土・包含層出土遺物	(中岡) … 69
第IV章 自然科学的分析	71
第1節 自然科学的分析の目的	(中岡) … 71
第2節 吹田操車場遺跡で検出された群集土坑の埋没過程	(パリノ・サーヴェイ(株) 辻康男) … 71
第3節 C3・C4地区の花粉・珪藻分析	((株)古環境研究所 松田隆二) … 76
第V章 遺構・遺物の検討	82
第1節 C1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区における土地利用の変遷	(中岡) … 82
第2節 C1・C2地区における群集土坑の検討	(中岡) … 85
第3節 古式土師器と須恵器の様相	(向井) … 93
第4節 瓦と施軸陶器	(駒井) … 98
第VI章 総括	(中岡) … 100
図版・報告書抄録	

## 挿図目次

- 図1 調査位置図  
図2 遺跡分布図  
図3 調査区配置図と既往調査  
図4 1961年当時の吹田操車場  
図5 基本層序柱状図(1)  
図6 基本層序柱状図(2)  
図7 第1面遺構出土遺物  
図8 第2面遺構出土遺物  
図9 C1・C2地区第1面(左)・第2面(右)平面図  
図10 C1・C2地区第2面検出遺構平・断面図  
図11 C1・C2地区第3面平面図  
図12 掘立柱建物1(上)・2(下)平・断面図  
図13 405土坑平・立・断面図  
図14 群集土坑北側の遺構番号  
図15 群集土坑南側の遺構番号  
図16 186・190・220・225・229・253土坑平・断面図  
図17 272・279・280・289土坑平・断面図  
図18 317・320・321・375・403・436土坑平・断面図  
図19 454・469・470・513・523・535土坑平・断面図  
図20 群集土坑断面図(1) a混合土  
図21 群集土坑断面図(2) d自然堆積土→混合土  
図22 群集土坑断面図(3)  
図23 群集土坑出土遺物(1)  
図24 群集土坑出土遺物(2)  
図25 群集土坑出土遺物(3)  
図26 405土坑出土遺物(1)  
図27 405土坑出土遺物(2)  
図28 第1層出土遺物  
図29 第2層出土遺物  
図30 第3層・第4層出土遺物  
図31 墨書土器  
図32 緑釉陶器・灰釉陶器・瓦  
図33 石器  
図34 C3・C4地区第1面平面図  
図35 1007井戸平・断面図  
図36 C3・C4地区第1-1面平面図  
図37 C3・C4地区第2面平面図  
図38 C3・C4地区谷・自然流路断面図  
図39 1042自然流路遺物出土状況図  
図40 1043自然流路遺物出土状況図  
図41 1042自然流路出土遺物  
図42 1041・1042自然流路出土遺物  
図43 落ち込み群・1042・1043自然流路出土遺物  
図44 包含層出土遺物  
図45 2005井戸平・立面図  
図46 2005井戸・2006溝出土遺物  
図47 C5地区北壁断面図  
図48 C5・C6地区第1面平面図  
図49 2001土坑・2005井戸出土遺物  
図50 C6地区西壁断面模式図  
図51 ビット出土遺物  
図52 C6地区第2面平・断面図  
図53 C5・C6地区第3面平面図  
図54 2085井戸(左)・2158井戸(右)平・断面図  
図55 2060土坑平・断面図  
図56 2159落ち込み・2155土坑出土遺物  
図57 第3面遺構出土遺物  
図58 2060土坑出土遺物  
図59 近世盛土出土遺物(1)  
図60 近世盛土出土遺物(2)  
図61 石製品  
図62 中世盛土・2006溝・2086土坑出土遺物  
図63 292・304・337・425土坑埋土の軟X線写真と堆積構造のトレース図  
図64 花粉ダイアグラム  
図65 花粉分析結果・珪藻分析結果  
図66 C1・C2地区遺構変遷図

図67	C3・C4地区・C5・C6地区遺構変遷図	図73	飛鳥時代～平安時代の土器分布と 群集土坑分布
図68	群集土坑埋土状況・遺物出土状況図	図74	北摂地域の群集土坑・窯跡・古代寺院・主要 遺跡
図69	土坑底面レベル散布図	図75	七尾瓦窯・吉志部瓦窯産の瓦出土分布
図70	群集土坑容積散布図	図76	吹田操車場埋設土管刻印（拓影）
図71	吹田周辺の山陰系糞を含む出土例（1）		
図72	吹田周辺の山陰系糞を含む出土例（2）		

## 表目次

表1	吹田操車場略年表	表4	群集土坑出土遺物一覧表
表2	群集土坑一覧表	表5	古式土師器計測値
表3	群集土坑検出遺跡一覧表		

## 巻頭図版目次

巻頭図版 C1・C2地区群集土坑

## 図版目次

図版1	C1・C2地区第1面全景	図版17	C1・C2地区405土坑出土遺物（1）
図版2	C1・C2地区第3面全景	図版18	C1・C2地区405土坑出土遺物（2）
図版3	C1・C2地区第3面掘立柱建物	図版19	緑釉陶器・灰釉陶器
図版4	C1・C2地区第3面405土坑	図版20	C1・C2地区包含層出土遺物（1）
図版5	C1・C2地区第3面群集土坑（1）	図版21	C1・C2地区包含層出土遺物（2）
図版6	C1・C2地区第3面群集土坑（2）	図版22	C1・C2地区群集土坑・包含層出土遺物
図版7	C4地区第1面	図版23	C3・C4地区自然流路出土遺物（1）
図版8	C3・C4地区第2面	図版24	C3・C4地区自然流路出土遺物（2）
図版9	C5・C6地区第1面全景	図版25	C3・C4地区自然流路出土遺物（3）
図版10	C6地区第2面	図版26	C3・C4地区・C5・C6地区出土遺物
図版11	C5・C6地区第3面	図版27	C5・C6地区第2面・第3面遺構出土遺物
図版12	吹田操車場全景	図版28	C5・C6地区第3面遺構出土遺物
図版13	吹田操車場跡	図版29	C5・C6地区第3面遺構・盛土・包含層出 土遺物
図版14	C1・C2地区群集土坑出土遺物（1）	図版30	C5・C6地区第1面遺構・第3面盛土・包 含層出土遺物
図版15	C1・C2地区群集土坑出土遺物（2）		
図版16	C1・C2地区群集土坑出土遺物（3）		

## 第1章 調査に至る経過と方法

### 第1節 調査に至る経緯と経過（図1）

吹田操車場遺跡は、1967（昭和42）年、水路等整備工事に伴い吹田市教育委員会によって初めて確認された。1988（昭和63）年には操車場跡地全域に試掘調査（61ヶ所）が実施され、旧石器時代から近世に至るまでの遺構と遺物が良好に保存されていることが判明した。

当遺跡の本格的な発掘調査は、2000（平成12）年の吹田信号場駅基盤整備工事によるJR貨物駅の倉庫（A地区）、駅舎（B地区）建替えに伴う調査である。その際、旧貨車庫3号の撤去建替えに先がけて試掘調査を行い、新たに吹田操車場遺跡B地点を新規発見した（C地区）。

今回の調査は、これら吹田信号場駅基盤整備工事に伴う継続的な調査の一環である。調査は、大阪府教育委員会の指導のもと調整池6ヶ所及びそれを結ぶ導水管部分を対象として実施した。6つの調整池はC1～C6と呼称されているため、3ヶ所の調査地はC1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区とした。現地調査は、2006（平成18）年8月より2007（平成19）年6月まで行い、引き続き2008（平成20）年7月まで整理作業・報告書作成作業を行った。

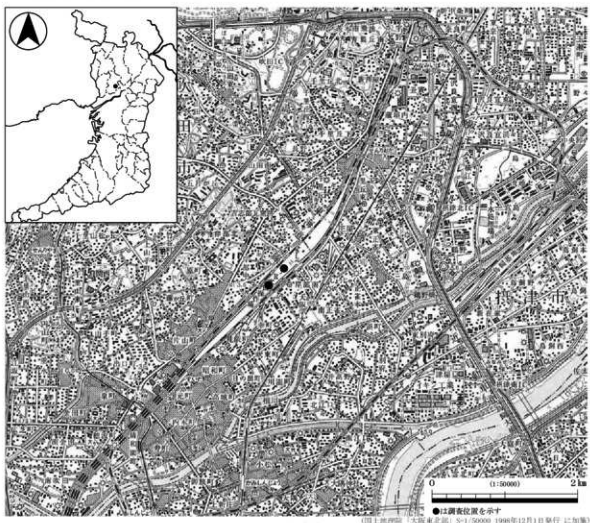


図1 調査位置図

## 第2節 調査・整理の方法

**地区名** 2003(平成15)年当センターは、発掘調査および遺物整理に関して一定の指標をまとめた『遺跡調査基本マニュアル』の暫定的運用を始めた。それは調査を進める際、遺物取り上げのための地区割や遺構・遺物登録などを実施するよう定めたものである。地区割は世界測地系に基づく直角平面座標系の第Ⅵ系を用いて、府下全域を第Ⅰ区画から第Ⅳもしくは第Ⅴ区画に細分し、調査地を10mもしくは5m単位で表示する。これとは別に、調査地が導水管によって繋がった2基の調整池建設予定地で3ヶ所に分かれることから、便宜的にC1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区と呼称した。なおC1～C6地区個々の位置は図6に示した。

**遺構名** 『遺跡調査基本マニュアル』によれば、遺構名は調査名もしくは調査区単位で通し番号を付け、「遺構番号—遺構種類」で表記し(例:34溝)、掘立柱建物などのような複数遺構の集合体は、個々の遺構表記と区別するために「遺構種類—遺構番号」で表わす(例:掘立柱建物1)。調査はC1・C2地区から着手したが、C3・C4地区とC5・C6地区を並行したので、C3・C4地区検出の遺構は1001から、C5・C6地区は2001から遺構番号を付与し、混乱を避けた。

**掘削方法** 掘削は、吹田操車場造営時の盛土及びその直前の耕作土までを、バックホーによる機械掘削の対象とした。それ以下は堆積層ごとに人力による掘削を行い、遺構面および遺構の確認や遺物の回収に努めた。またC3・C4地区西端において、下層確認調査を実施した。

**遺構面と層** 遺構面は人力による調査対象となる面を上から第1面・第2面とした。層の呼称は、第三章第1節にて詳述する。

**遺構図** 調査の過程で検出した遺構面は、ヘリコプターによる空中写真測量により、50分の1・100分の1平面図を作成するとともに、必要に応じて別途平面図・断面図・立面図を10分の1・20分の1・100分の1で実測した。報告書に掲載した遺構図は、これらをもとに編集し作成したものである。

**写真撮影** 全景写真撮影は、調査地がJR貨物吹田信号場駅構内であることから高所作業車を用いた。写真は35mm(モノクロ・リバーサル)にて撮影し、報告書掲載用写真など特に重要な対象物については6×7カメラによった。

**資料分析** C1・C2地区検出の群集土坑に対しては、埋土を自然科学的に分析するため土壌軟X線写真撮影を行い、C3・C4地区検出の谷の水域復原を行うために珪藻分析を、古植生を復原するために花粉分析を実施した。その成果は本書第IV章に掲載する。

**整理作業** 整理作業は、遺構・遺物それぞれ以下の手順で行った。遺構は、作製した遺構実測図を編集し、報告書掲載予定の全体図あるいは個別遺構図の版下を作成し、トレースを行った。遺物は、現場事務所にて出土遺物の洗濯・注記を済ませたのち、分類・集計を実施した。その過程で図化するべき遺物の選別を行い、復原作業を経て実測し、瓦については拓本を採った。これらの遺物の多くは写真撮影した。実測図は出土遺構・同一包含層ごとにまとめて版下を作製し、トレースを行った。

**その他** 今回検出した群集土坑の性格は不明瞭な部分が多いため、別途類型調査を実施して個々の属性を整理するよう努めた。また難波宮式軒瓦や墨土器といった特徴的な遺物や、地元千里古窯跡産と思しき須恵器、中近世土器など出土遺物全般については、外部有識者に資料を実見してもらい、有益なご教示を得て本書に反映することができた。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境（図2）

吹田操車場遺跡は大阪府北部、吹田市芝田町所在の遺跡である。

遺跡の所在する吹田市は淀川・安威川・神崎川の右岸に位置し、南は大阪市、東は摂津市、西は豊中市に接し、北は茨木市・箕面市に接する。

吹田市及び周辺の地形を概観すると、市域の大半は大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵で占められ、南部は淀川や安威川によって運ばれた土砂の堆積による沖積平野からなる。南部の沖積平野は吹田駅南の吹田砂堆を中心に東に安威川低地、西に神崎川低地が広がる。吹田砂堆は約6000～7000年前の縄文海進の潮流によって運ばれた砂の堆積で形成されたものである。

市内には、千里丘陵に源を発する大正川・山田川・正雀川・高川・糸田川が流れており、それぞれ安威川・神崎川に流入する。これらの河川は短流で水量もあまり豊富ではないため、水を確保するため古くから地形を利用した溜池が多くつくられている。

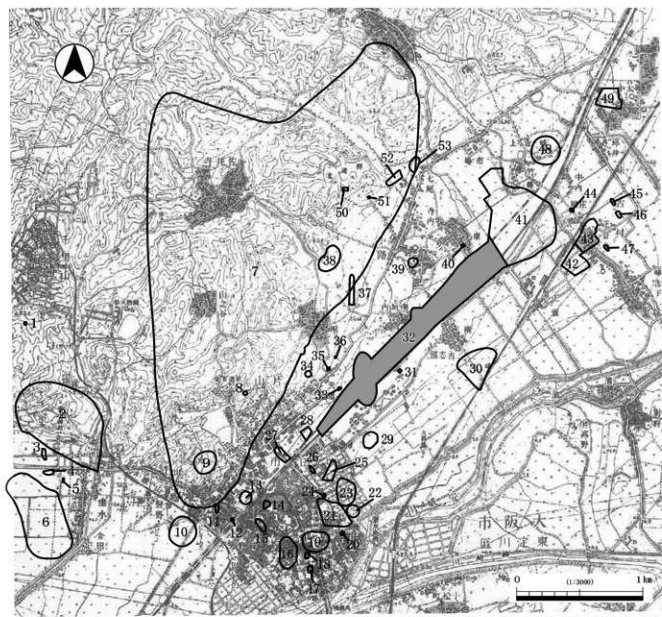
吹田市内の多くの遺跡から、僅少ながら旧石器時代の遺物が出土する。吉志部遺跡周辺では1930（昭和5）年頃から土地の所有者によって石器の収集が行われ、1980（昭和55）年には本格的な調査が始まった。現在まで7次にわたる調査を実施し、礫群をはじめナイフ形石器や削器、さらに近畿地方では珍しいメノウ製の錐状石器が出土しているなど石器が多く出土する。そのほか高城遺跡・目依遺跡・垂水遺跡では、ナイフ形石器や錐状石器が見つかった。

縄文時代の遺構・遺物の発見も前代と同じく僅少である。中ノ坪遺跡では、草創期のものとみられるチャート製の有舌尖頭器が出土している。高浜遺跡では中期前半の船元式土器が、七尾瓦窯下層遺構では晩期の船橋式土器が、目依遺跡では長原式土器が見つかった。縄文時代の遺構・遺物の発見例が他の時代と比べて少ないが、今後の調査で集落跡などの発見が期待される。

弥生時代に入ると遺構や遺物の検出は増加する。五反島遺跡では前期の壺・甕・鉢・高環などが出土した。垂水遺跡では、第1次～5次調査で後期の竪穴建物や高床式建物の遺構が検出されたほか、第26次調査までに中期から後期にかけての高環・壺・手埴り形土器・蛸壺など多彩な土器が見つかった。垂水遺跡では、このほかにも近江・東海・四国・山陰といった外来の土器も多く出土しており、この一帯で他の地方との交流が盛んであったことがうかがえる。七尾東遺跡では竪穴建物から高環・無頸壺・広口壺・石庖丁などが、垂水南遺跡・目依遺跡・榎坂遺跡などでも弥生時代の遺物が多く出土しており、弥生時代においてこの一帯で人々の活動が盛んであったと考える。

弥生時代に引続き古墳時代に入ってから垂水遺跡では、溶解途中の仿製鏡や朝鮮半島との交流を示す韓式系土器が見つかった。このほかにも同遺跡では、初期須恵器とみられる高環脚部や小型丸底壺・土師器高環などが、五反島遺跡では小型丸底壺・土師器甕、初期須恵器とみられる高環・鉢・鉄製の剣が出土する。垂水南遺跡では、古墳時代前期の竪穴建物・掘立柱建物・矢板のある水田を、榎坂遺跡では第6次調査で竪穴建物を2棟検出する。弥生時代中期から古墳時代にかけて千里丘陵一帯では定住型集落が形成され、地域間の交流が盛んに行われ人口が次第に増加していったのだろう。

吹田市域では古墳時代の遺構や遺物は多く発見されているが、完存する古墳は少ない。その要因とし



(地理院数表「吹田」S=1/25000 大正12年調査図 1929年修正図図に加筆)

- |                   |              |                |             |            |
|-------------------|--------------|----------------|-------------|------------|
| 1. 垂水西原遺跡         | 13. 吹田城遺跡    | 25. 高畑遺跡       | 37. 原東遺跡    | 49. 新戸屋古墳  |
| 2. 垂水遺跡           | 14. 本町遺跡     | 26. 昭和町遺跡B地点   | 38. 吉志部古墳   | 50. 吉志部瓦窯跡 |
| 3. 垂水中遺跡B地点       | 15. 兵の安遺跡    | 27. 片山遺跡       | 39. 岸辺中遺跡   | 51. 吉志部古墳  |
| 4. 垂水中遺跡          | 16. 都呂須遺跡    | 28. 片山荒池遺跡     | 40. 岸辺東遺跡   | 52. 七尾瓦窯跡  |
| 5. 垂水中遺跡C地点       | 17. 宮之前遺跡B地点 | 29. 目伏遺跡       | 41. 明和池遺跡   | 53. 七尾東遺跡  |
| 6. 垂水南遺跡          | 18. 宮之前遺跡    | 30. 中ノ坪遺跡      | 42. 東正1丁目遺跡 |            |
| 7. 吹田須恵野宗跡群       | 19. 高浜遺跡     | 31. 吹田操車場遺跡B地点 | 43. 東正遺跡    |            |
| 8. 吹田32号宗跡        | 20. 神樂町遺跡    | 32. 吹田操車場遺跡    | 44. 庄屋第1地点  |            |
| 9. 片山公園遺跡         | 21. 高城B遺跡    | 33. 天道遺跡       | 45. 庄屋第2地点  |            |
| 10. 大阪城鉄砲奉行支配脇砲蔵跡 | 22. 吹田城推定地   | 34. 円塚古墳       | 46. 東正第1地点  |            |
| 11. 西の庄遺跡         | 23. 高城遺跡     | 35. 片山芝田遺跡     | 47. 東正第2地点  |            |
| 12. 西の庄遺跡B地点      | 24. 昭和町遺跡    | 36. 片山芝田遺跡B地点  | 48. 峰前寺跡    |            |

図2 遺跡分布図

て、高度経済成長期における千里丘陵一帯の大規模な開発が大きいと言われていたが、千里丘陵一帯の田畑の開墾なども要因に挙げられるだろう。吉志部神社境内の吉志部古墳は現存する石室としては市内唯一のもので、7世紀前半に築造された横穴式石室を検出した。石室内からは、須恵器の蓋環・長頸壺・ガラス玉・刀子・鎌などが出土した。新芦屋古墳は宅地造成工事中に発見されたため、古墳の外形は工事によってすでに失われていたが、組合式石棺を納めてあった木芯粘土室内からは須恵器の高環・環・器台や土師器・鉄地金銅張りの馬具一式が、石棺内部からは人骨とともに玉・耳環・直刀が出土した。

千里丘陵一帯では、須恵器窯跡が多く発見されている。その中で最古のものは吹田32号窯跡（ST32）で、窯内部から鋸歯文や斜格子文などの文様が施された須恵器が出土し、5世紀前半の初期段階の須恵器であることが判明した。しかし、吹田32号窯跡の窯の構造は初期段階の須恵器窯には類例がなく、今後の研究に期待がかかる。

吹田32号窯の操業はわずか数十年で終了し、丘陵一帯では6世紀初頭まで小規模な操業が継続する。6世紀中頃に須恵器の生産は最盛期を迎え、8世紀前半には完全に生産を停止する。千里丘陵での燃料の確保や須恵器生産のための粘土の採取が困難になったため、須恵器の生産が停止したのだろう。

8世紀初頭に千里丘陵では瓦窯の操業が始まる。七尾瓦窯跡より出土した瓦が、726（神亀3）年に聖武天皇の命により再建された難波宮の瓦と同範であると判明した。8世紀末に吉志部瓦窯跡では、平安京へ供給する瓦の生産が行われた。吉志部瓦窯跡での瓦の生産は短期間で終了し、操業の場は西賀茂瓦窯跡・角社瓦窯跡へと移された。これらの窯跡では吉志部瓦窯跡と同範瓦が出土したことから、工人も窯場の移転に伴って移動したと考えられている一方で、範のみの移動もあったと考える。千里丘陵一帯は、良質の粘土が採取できることや地理的な利便性から造瓦工房を造営したと言われるが、平安宮の瓦の供給が急増したため、補足的に吉志部瓦窯を設置したとも言われる。

平安時代前期に成立した荘園は、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて一層進展する。吹田市域でも、春日領や東寺領の荘園が存在したことが文献からうかがえる。垂水南遺跡では東寺領垂水庄との関係が指摘される「垂庄」「中庄」の墨書土器が出土する。垂水庄蔵人村との関連が指摘される蔵人遺跡では、掘立柱建物や鍛冶関連遺構・井戸・瓦を伴う石組溝を検出した。

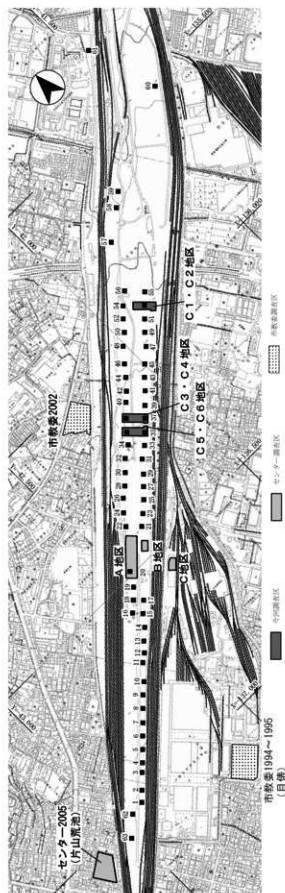
近世の遺構・遺物の報告例は少ない。垂水遺跡では、明石焼陶器土鍋・堺焼または明石焼とみられる播鉢・土製玩具・土人形・軟質陶器玩具南瓜の出土が報告されている。

千里山の通称「三本松」はかつて見通しのよい場所で、旗振り通信の中継地の一つであった。旗振り通信は飛脚よりも通信速度が速く、大阪堂島の米相場をいち早く伝達するものであった。堂島から千里山→茨木阿武山→柳谷西山→京都の順で京都の業者に伝えられた。明治以降大阪市内に高層建物が増加したことや、電話が普及したことで旗振り通信はその役目を終えた。考古学的な調査は行われていないが、近世から近代にかけての吹田を知る貴重な史跡である。

## 第2節 吹田操車場遺跡の既往調査（図3）

吹田操車場遺跡は、1967（昭和42）年に土木工事に際して瓦器碗・土師質羽釜・土師器小皿などの中世遺物が出土したことから遺跡の存在が明らかとなった。その後、長期間にわたって本格的な調査が行われることはなかったが、1998（平成10）年10月から遺跡範囲確認のため（財）大阪府文化財調査研究センターが、吹田操車場全域に61ヶ所の試掘トレンチを設けた。今回の調査と重複するトレン





大阪府建設都市部総合計画課「大阪府デジタル地図版(北版大阪、東版大阪)」2002年2月版

図3 調査区配置図と既往調査

子はNo.35～38・51・53があり、トレンチごとの遺構・遺物は次の通りである。No.35では土坑を検出。No.36は旧石器時代のサヌカイト剥片・弥生土器・黒色土器・染付陶磁器が出土。同トレンチで検出した井戸の埋土からは鎌倉時代の瓦器椀や瓦質三足釜・青磁碗が見つかった。No.37で古墳時代後期の須恵器杯蓋片、鎌倉時代の瓦器椀片が出土。No.38は、古墳時代前期の土師器甕と鎌倉時代の瓦器椀片が出土。No.43で鎌倉時代の東播練鉢・常滑焼の甕、瀬戸・美濃系の皿、青磁碗など中・近世を中心とした遺物が出土。No.51から、古墳時代後期の円筒埴輪、奈良時代の須恵器・土師器、黒色土器が出土。同トレンチで土坑群・ビット群を検出し、その埋土から鎌倉時代の瓦器・土師器が出土。No.53では、奈良時代～平安時代前期の須恵器や土師器が出土し、土坑を9基検出。その土坑の埋土から飛鳥時代の須恵器杯・甕が出土。

1998年の調査に次いで、同センターが2000(平成12)年1月からA・B・C地区の3トレンチを設け調査を行った。A地区では、弥生時代の石鏃・石剣や平安時代の水田畦畔・掘立柱建物を検出した。平安時代の掘立柱建物からは須恵器蓋・土師器羽釜などが、中世・近世では青磁鉢、瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系の染付碗などが出土する。また、包含層からは弥生土器や古式土師器、平安時代の須恵器・土師器・瓦、近世の染付陶磁器など幅広い時代の遺物が見つかった。B地区では弥生時代のサヌカイト製石鏃のほか、包含層からは須恵器杯や土師器・開元通寶・染付陶磁器・青磁碗が出土する。C地区では、須恵器杯・蓋・羽釜・瓦器椀・染付陶磁器・ミニチュア製品・青銅製品が見つかった。

これらの調査により吹田操車場遺跡は、旧石器時代から近世までの遺構・遺物を検出し、多様性に富んだ遺跡であることが判明した。

### 第3節 吹田操車場略史（図4、表1）

**略史** 最後に、遺跡名となっていないながら既刊の報告書でほとんど触られることのなかった吹田操車場について、簡単に紹介しておこう。

関西の鉄道網は1874（明治7）年の大阪・神戸間に始まり、1889（明治22）年までに大阪・敦賀間が官営鉄道として順次開通したが、現在の大阪環状線・大和路線（関西本線）・宝塚線（福知山線）など、アーバンネットワークを形成する路線の多くは私設鉄道として開業した。そのため1906（明治39）年鉄道国有化以降昭和初期にかけて、官鉄・私鉄それぞれの都合で設けた施設の改良や線路の増設を行い、一貫した輸送に主力を注いだ。明治年間の貨物輸送は個別分散だったため、品川をはじめとする貨物操車場は旅客駅に併設していたが、1915（大正4）年京都駅から貨物駅設備と貨車操車場を独立した梅小路操車場が竣工した。

ところが梅小路操車場は大阪から遠く、大阪駅に負担がかかってきたので、1923（大正12）年吹田に2000車/日の操車能力をもつハンブ（坂阜）式操車場を建設（第1期工事）、1925（大正14）年に北方貨物線複線が開通、1923（大正12）年には吹田機関庫を設置し、貨物輸送の向上に努めた。

1929（昭和4）年6月吹田操車場第2期工事が始まり、貨物列車発着線の整備、駅別ハンブ（東ハンブ、西ハンブ＝後の小ハンブ）を新設、1934（昭和9）年に竣工して、操車能力は3000車/日へと向上した。またこれと相前後して1928（昭和3）年10月操車場内に仮客車操車施設を設けたが、1933（昭和8）年宮原操車場開設に伴い廃止された。

一方客貨飽和状態の大阪駅を改善するため、1928（昭和3）年梅田貨物駅が一部開業（1934年全面移転）し、梅田貨物線や城東貨物線を新設した。さらに関西本線今宮駅から大阪港臨港線が分岐し、吹田操車場の城東貨物線関連作業を転嫁させるために、1938（昭和13）年竜華操車場が開業した。

1939（昭和14）年吹田操車場第3期工事が始まり、下り方向別ハンブと上下仕訳線の設置、貨物列車到着・押上出発線に改良を加え、1943（昭和18）年に竣工した。その結果操車能力は8000車/日となり、構内総面積76万㎡、構内線路総延長125km、東西5.6km、南北400mの規模を有する日本一の大操車場となった。

旧来ハンブ式操車場では、連結手による貨車制御だったため傷害事故や車両破損が多発した。1937（昭和12）年、操車能力向上のため新鶴見操車場で日本初のカーリターダ（軌道貨車制動装置）を導入したが、吹田操車場では1953（昭和28）年に上りハンブに、1957（昭和32）年に下りハンブにカーリターダを設置した。その結果事故などは激減し、作業効率も上昇した。

1950～1970年代前半梅田駅の増強工事、1963（昭和38）年百済駅開設、新幹線烏飼車両基地に併設して大阪貨物ターミナル駅が計画、吹田操車場間8.7kmの貨物線を敷設して1982（昭和57）年開業に至る。

1966（昭和41）年吹田操車場第4期工事に着手し、部分的な改良工事は完成した。しかし1970年代以降モータリゼーションの進展に伴い、国鉄貨物の近代化・合理化が急がれ、貨物駅や操車場の統廃合を進めた。その結果1984（昭和59）年、ついに国鉄は貨車集結輸送方式から拠点間直行輸送方式に全面的転換し、吹田操車場は吹田信号場となった。

現在吹田信号場は、東海道・山陽・北陸各本線、城東貨物・梅田貨物・大阪貨物ターミナルの各線、吹田機関区に関する信号取扱と、貨物列車の分割・併合や機関車の付替えを主担する。さらにJR西日

本吹田工場の車両入出場にかかわる誘導を行い、JR西日本特急のアクセスルートとしての役割を担う。**吹田操車場の様子** かつての吹田操車場は、西日本一帯の貨車を中継する中心的操車場で、東海道・山陽・北陸方面ならびに近接貨物線を往来する貨物列車の組成・分解を行う施設であった。第3期工事が竣工した1943（昭和18）年には一日平均7500両近くの貨車を、1945（昭和20）年以降1983（昭和58）年までの38年間は、一日平均5000両もの貨車を取り扱った日本一の操車場だった。

操車場に到着した下り列車は下り到着線（1～5番線）に入り編成の確認を終えると、押上機が貨車をハンブと呼ばれる貨車を仕訳けるための丘状の設備に押し上げる。一回の作業で最大60両ほどの貨車を取り扱ったという。1965（昭和40）年当時、全国約40ヶ所あった貨車操車場のうちハンブ式操車場は10ヶ所ほどにすぎず、多くは突放によって仕訳を行う平面操車場であった。

目的地別に切り離されてハンブを下った貨車は、山陽以遠・福知山行・九州行などの下り方向別線（1～13番線、21～33番線）に分かれる。2基のカーリターダを通過した貨車の速度は5～8km/hに制御され、連結手が飛び乗って足踏みブレーキで速度調節して所定の位置に貨車を止める。連結手は貨車が下ってくるたびにこの作業を繰り返す。カーリターダや連結手による速度調節は、長年の経験と勘がものをいう作業だ。方向別に分解された貨車は、必要に応じて小ハンブ（1～9番線）や下り駅別線（1～6番線）を利用して、到着駅順に再整理される。こうして組成完了した列車は下り出発線（3～16番線）に待機し、吹田機関区から機走線を経由してきた発機に牽引されて出発する。上り列車の場合も下り同様、上り到着線から上りハンブを下って目的地別に上り方向別線に入り、上り駅別線を経て上り出発線から出発する。

操車場ではこのような作業が昼夜を問わず頻繁に行われており、構内各所に設置した信号扱所やてこ扱所が重要な役割を果たしていた。

ここで作業に従事する職員は24時間勤務であるため、構内には係員詰所や倉庫などのほかに、売店・食堂・理髪店・浴場など日常生活に必要な施設もあった。また連結手は、平素から詰所前などに設置された懸垂用鉄棒にて、腕力の鍛錬を怠ることはなかったという。

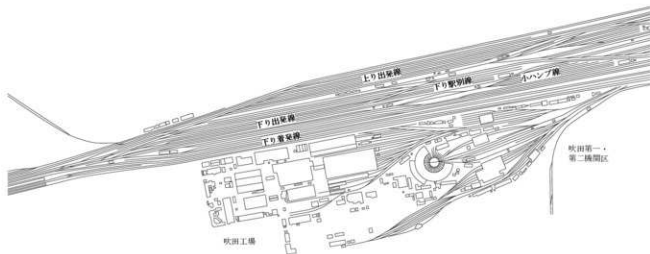
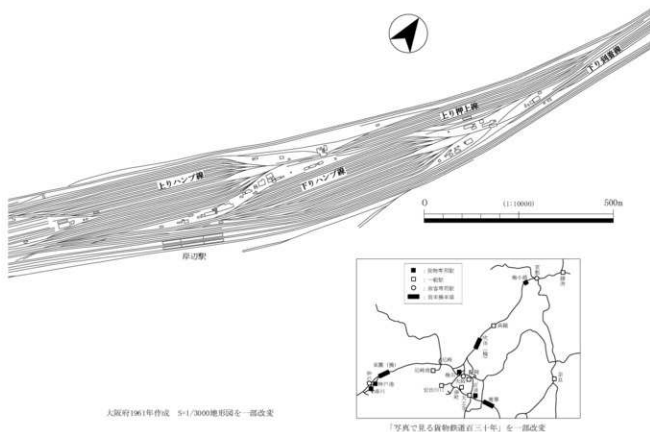


表1 吹田操車場略年表

西暦	吹田操車場関連記事	西暦	吹田操車場関連記事
1873.9.15	(新橋・横浜間で貨物営業開始。)	1947.6.6	昭和天皇、吹田操車場行幸。
1913.6	(日本最初の貨物操車場京都梅小路駅開設。)	1949.6.1	(日本国有鉄道発足。)
1915.12	(ハンブ式操車場の東京田端操車場開設。)	1953.1.1	上りハンブカーリターダ使用開始。
1919.2	吹田操車場第1期工事着手(目標2000両)。	1957.10.8	下りハンブカーリターダ使用開始。
1920.5	(鉄道省に昇格。)	1959.11	(コンテナ輸送、汐留～梅田間本格化。)
1921.7	(貨車集結輸送方式の本格的導入。)	1968.9	(郡山操車場、国鉄初の自動化操車場。)
1921.10	吹田工場設置。	1969.4.25	(フレートライナー、東京・大阪間開業。)
1923.7	吹田操車場使用開始。	1969.10	吹田操車場～梅田間電化完成。
1925.3.10	北方貨物線(吹田～宮原間)複線開通。	1971.3	岸辺地下道新設工事竣工。
1928.12.1	梅田駅開業。	1982.11.15	大阪貨物ターミナル営業開始。
1929.4	吹田操車場第2期工事着手(目標3500両)。	1983.1	(拠点間直行輸送方式への転換。)
1929.9.15	小ハンブ使用開始。	1984.2.1	吹田操車場廃止。吹田信号場へ
1933.9	宮原操車場を新設、吹田操車場仮客車操車場廃止。	1986.11	(東京・大阪などでビギーバック輸送開始。)
1934.6	大阪駅の貨物業務、梅田駅に全面移転。	1987.4.1	(日本貨物鉄道株式会社(JR貨物)発足。)
1934.9	室戸台風被害、駅本屋など被害。	1987.10	(高性能貨車の開発。)
1936.3	狗職碑建設。	1990～	(高性能機関車の開発。)
1937.9	(新鶴見操車場、日本初のカーリターダ設置)	1991	(政府によるモーダルシフト施策。)
1938.10	電車操車場使用開始。	1992.3	使用停止中のレールほとんど撤去。
1939.3	吹田操車場第3期工事着手(目標8000両)。	1994.9	関西新空港開港。吹田信号場経由の特急運転開始。
1940.12.1	下りハンブ使用開始。	2004.3	(東京～大阪間で世界初の貨物電車運転開始。)
1945.6.7	大阪空襲、吹田操車場構内など被害。		
1947.4.11	岸辺駅開業。		

※( )内はその他鉄道貨物に関する出来事



大阪府1961年作成 S-1/3000地形図を一部改変

『写真で見る貨物鉄道三十年』を一部改変

図4 1961年当時の吹田操車場

## 註

吹田操車場については、J R 貨物吹田信号場駅友岡英男氏教示。

## 参考・引用文献

- 網干善教 1973 『吉志部古墳発掘調査報告』 吹田市・吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室  
網干善教 1975 『垂水道跡第1次発掘調査概報』 吹田市史編さん室 関西大学考古学研究室  
賀納章雄 1998 『吉志部瓦窯跡（工房跡）』 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会  
賀納章雄 1999 『目依遺跡』 吹田市教育委員会  
賀納章雄 2001 『吹田の石器時代』 吹田市教育委員会  
賀納章雄 2004 『紫金山公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』 吹田市建設緑化部・吹田市教育委員会  
交通新聞社 2007 『貨物鉄道百三十年史』 交通新聞社  
交通新聞社 2007 『写真でみる貨物鉄道百三十年史』 交通新聞社  
近藤喬一 1978 『平安京調査報告 第4輯 西賀茂瓦窯跡』（財）古代学協会  
阪田育功 2001 『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』（財）大阪府文化財調査研究センター  
吹田市史編さん委員会 1990 『吹田市史 第1巻』 吹田市役所  
吹田市立博物館 2004 『吹田市文化財ニュース』 №24 吹田市立博物館  
吹田市立博物館 2005 『吹田市文化財ニュース』 №25 吹田市立博物館  
吹田操車場第2信号扱所（OB） 2006 『吹田操車場アルバム集成』  
田中充徳 2002 『七尾東遺跡発掘調査報告書』 吹田市教育委員会  
西口陽一 1999 『吹田操車場遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター  
西本安秀 1988 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—吉志部瓦窯跡ほか—』 吹田市教育委員会  
西本安秀 1998 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—蔵人遺跡—』 吹田市教育委員会  
西本安秀 1999 『七尾瓦窯（工房跡）』 吹田市都市整備部・吹田市教育委員会  
西本安秀 2003 『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1981 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—吉志部遺跡ほか—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1982 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—垂水道跡ほか—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1983 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—吉志部2・3号墳ほか—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1984 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—七尾瓦窯跡垂水道跡—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1985 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—垂水道跡ほか—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1986 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—蔵人遺跡ほか—』 吹田市教育委員会  
藤原 学 1987 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—吉志部瓦窯跡—』 吹田市教育委員会  
堀口健二 2005 『垂水道跡発掘調査報告書1』 吹田市教育委員会  
増田真木 1991 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—垂水道跡ほか—』 吹田市教育委員会

## 第III章 調査成果

### 第1節 基本層序 (図5・6)

今回の調査地は、C1・C2地区と約600m離れて位置するC3・C4地区、C5・C6地区が隣り合わせに位置する。よって層位自体は大きく2ヶ所に分かれるはずだが、C5・C6地区はC3・C4地区の層位と直接つながらない。中世～近世にかけての盛土造成や近世の耕地開発により、様相が一変しているためである。まず、地区間全体の層序関係をI～VIでまとめ、各地区の層序を記述したい。

#### 1. 共通層序

**第I層 表土。**操車場内の貨物線敷設時に造成されたバラス層。C1・C2地区では層厚0.6m、C3・C4地区、C5・C6地区では部分的にみられる程度である。各地区の第1層に該当。

**第II層 操車場造成時の盛土。**1923(大正12)年頃に吹田市片山町2丁目付近の千里丘陵を削って運ばれた大阪層群のシルト・砂礫である。C1・C2地区およびC3・C4地区南端では、灰色7.5Y5/1細砂混土と明黄褐色10YR6/6土、黒褐色10YR3/2土が互層状に堆積する。これはおそらく操車場造成が、土地の低い南側から北方向に向かって進められたことに起因するのだろう。層厚は平均0.8～0.9mを測る。C1・C2地区南端のように、盛土に石炭ガラを用いた箇所もある。各地区の第2層に相当。

**第III層 ほぼ水平堆積した耕作土。**C1・C2地区では旧耕作土および第1～4層、C3・C4地区では旧耕作土および第1～3層、C5・C6地区ではC6地区第1層がこれに該当する。C1・C2地区第3・4層以外は、近世の耕地開発に伴うと考えられる。

**第IV層 C6地区にのみ施された盛土。**赤褐色シルト系層が2層堆積する。たたくしまった赤褐色シルトの上に、灰黄褐色10YR6/2微砂混シルトが堆積する。中世～近世にかけて堤体状に整地されたもの。

**第V層 C3・C4地区にのみみられる、谷状に落ち込んだ地形に形成された自然流路の堆積層。**

基本層序・遺構面対照図

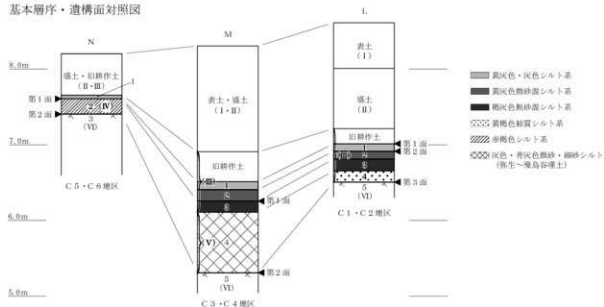
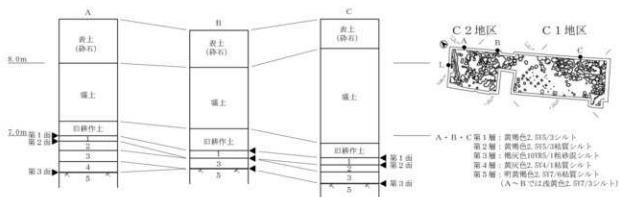
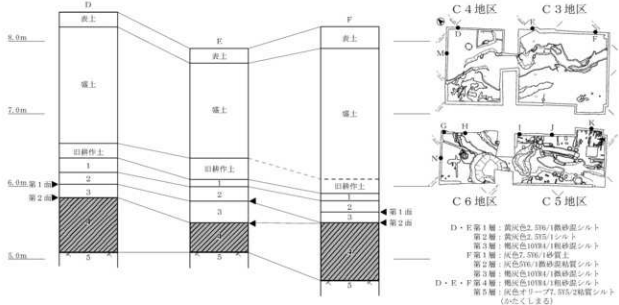


図5 基本層序柱状図(1)

C 1・C 2地区



C 3・C 4地区



C 5・C 6地区

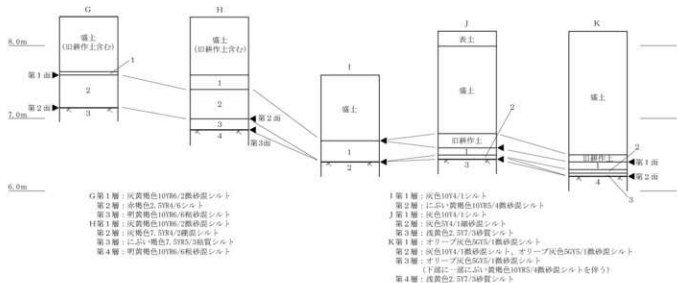


図6 基本層柱状図(2)

**第Ⅵ層** シルトないし粘質シルトの無遺物層(地山)。C1・C2地区では明黄褐色 2.5Y7/6 粘質シルト、C3・C4地区では浅黄色 7.5Y7/3 砂質シルト、浅黄色 5Y7/3 微砂混シルト、C5・C6地区では明黄褐色 10YR6/6 粗砂混粘質シルト(北側部)、浅黄色 2.5Y7/3 砂質シルト(南側部)となる。

以下の層序は、表土・盛土・旧耕作土以下、共通層序第Ⅲ～Ⅵ層である。

## 2. C1・C2地区の基本層序と遺構面

**第1層** 黄褐色 2.5Y5/3 シルトの近世耕作土で、近世遺物を含む。上面で近世～近代の耕作遺構を検出した(第1面)。標高6.60～7.00m。

**第2層** 第1層と同じ近世耕作土である。黄褐色 2.5Y5/3 粘質シルトで少し粘質が強い。上面(標高6.50～6.85m)で近世の溝・鋤溝・土坑・井戸を検出した(第2面)。

**第3層** 古墳時代後期から中世にかけて堆積した包含層で、C1・C2地区北半部分ではさらに2層に分かれる。上層は褐色 10YR5/1 粗砂混シルト、下層は黄灰色 2.5Y4/1 粘質シルトが低い部分に落ち込み状に堆積する(第4層)。両層とも土師器・須恵器(墨書土器含む)・施釉陶器・土師質土器・瓦器など、飛鳥時代から平安時代後期にかけての遺物が出土する。上面では遺構は確認できなかった。

**第5層** 無遺物の地山層。明黄褐色 2.5Y7/6 粘質シルト～浅黄色 2.5Y7/3 シルトを基調とする。上面検出遺構には群集土坑・掘立柱建物などがある。標高6.35～6.60m。古墳時代後期～平安時代(第3面)。

## 3. C3・C4地区の基本層序と遺構面

**第1層** 近世耕作土である。黄灰色 2.5Y6/1 微砂混シルト。

**第2層** 黄灰色 2.5Y5/1 シルトの近世耕作土である。

**第3層** 褐色 10YR4/1 微砂混シルトで、古代～中世の遺物包含層。上面で近世の溝・井戸、時期不明の落ち込みなどを検出した(第1面)。標高5.70～6.20m。

**第4層** 谷状地に埋積した層である。ラミナを形成しながら、数条の自然流路が複雑に切り合いながら堆積する。弥生時代から古墳時代前期、飛鳥時代の遺物を顕著に含む。

**第5層** 灰オリーブ色 7.5Y5/2 粘質シルトの無遺物層で最終面。谷・自然流路を検出した(第2面)。

## 4. C5・C6地区の基本層序と遺構面

北と南側で堆積状況は全く異なるため、分けて記述する。

**北側第1層** 明黄褐色 10YR6/2 微砂混シルトで非常に薄く堆積する。近世の磁器片などが含まれる。

**北側第2層(近世盛土)** 褐色 7.5YR4/2 礫混シルトによる整地土。遺存状態良好な瓦器や土師器をはじめ、近世後半の染付碗をも含む(第1面)。

**北側第3層(中世盛土)** にぶい褐色 7.5YR5/3 粘質シルトによる整地土(第2面)。

**南側第1層** 灰色 5Y5/1 細砂混シルトで旧耕作土。

**南側第2層** 灰色 5Y4/1 細砂混シルト、2008 畦畔の南側はオリーブ灰色 5GY5/1 微砂混シルト(第1面)。

**南側第3層** オリーブ灰色 5GY5/1 微砂混シルトで、第1・2層より続く耕作層。

**南側第4層** にぶい黄褐色 10YR5/4 微砂混シルト、第3層の床土で地形の低い範囲に堆積する。この上面より鋤溝を中心とした耕作痕を検出した(部分的に面を形成 第1-1面)。

**北側第4層・南側第5層** 明黄褐色 10YR6/6 粗砂混・浅黄色 2.5Y7/3 砂質シルトの無遺物層(第3面)。



## 第2節 C1・C2地区の調査

### 1. 第1面の遺構・遺物(図7・9)

旧耕作土を除去して検出される近世遺構面である。この面は北側で6.8～7.0m、南側で6.5mを測り、南側にゆるやかに傾斜する。主な検出遺構は、耕作関連の溝・鋤溝群・土坑・井戸である。

**2・70・71・102溝(図9)** 2溝は大半の部分が調査区外にのびるため詳細は不明であるが、下層は第2面に該当する。70・71溝は鋤溝群を区画する畦境の可能性はある。幅0.3mでほぼ東西にのびる。102溝は近代の攪乱により大きく乱されており、時期が明らかな遺物は出土していないが、規模や遺構の傾斜関係からみて2溝と関連があると考えられる。

**鋤溝群(図9)** 70・71溝により北側と南側に2分されるが、両者の方向はややずれる。前者は条里に影響されたものと考えられる。

**4・5・6井戸(図9)** 4・5井戸は2溝の埋没後つくられる。3基とも素掘り井戸である。

**1土坑出土遺物(図7)** 土師質皿(1)は褐色系で口縁部の立ち上がり短い。土師質土錘(2～4)は、すべて管状である。いずれも時期決定が難しいが、中世前期までさかのぼる可能性がある。

**5井戸出土遺物(図7)** 肥前系染付碗(5)で、口縁端部の外面に簡略化した雨降り文、船の文様があり、18世紀前半頃と思われる。

### 2. 第2面の遺構・遺物(図8～10)

第1層を除去して検出される遺構面で、この面も北から南に緩やかに落ち込む地形を有する。溝4条・土坑1基・井戸2基・ビット7基を検出した。

**103・114・138・141溝(図9)** 103溝は138溝に接する部分に落とし口状の窪みがつくため、一連の遺構と考えられる。また103溝北側および138溝には木杭の打設痕が残っており、護岸施設が存在が想定される。114溝は南北に主軸をもつもの、141溝は踏み込み状の埋土がみられる。

**鋤溝群(図9)** 第1面と主軸方向は全く変わらない。第1層を埋土とする。

**111・146井戸(図9・10)** 直径1.0～1.5m

の小型円形素掘り井戸を2基検出した。

**138溝出土遺物(図8)** 6は難波宮6303型式軒瓦の下半部片。肥前系染付碗(8)は、一重網目文で17世紀後半の時期があてられる。瓦質火鉢(10)は外面に花菱文をもつ。浅鉢か。

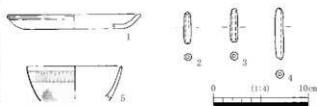


図7 第1面遺構出土遺物

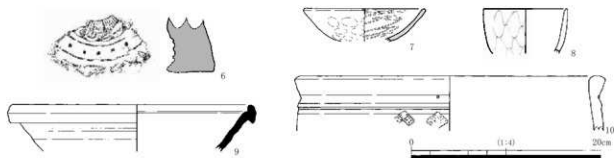


図8 第2面遺構出土遺物

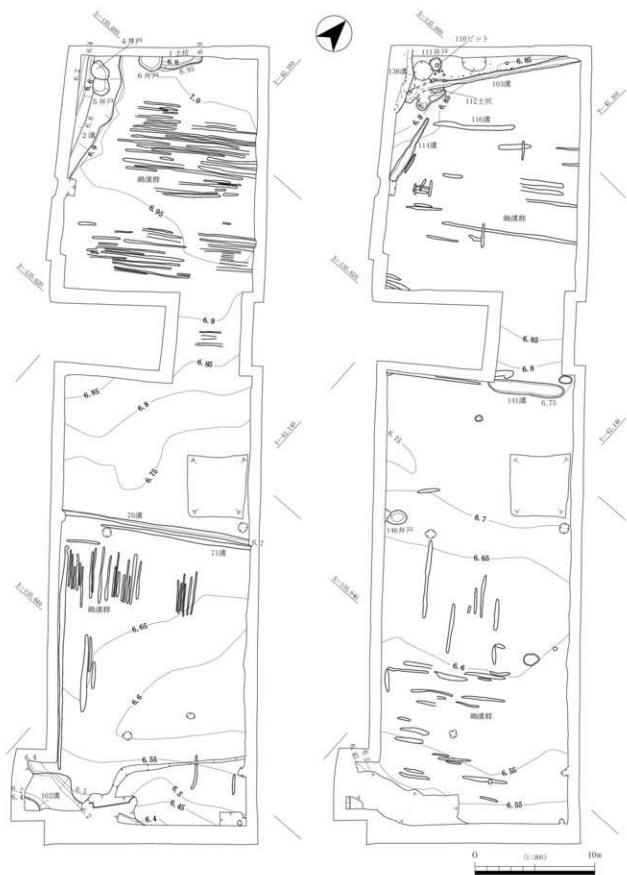


図9 C1・C2地区第1面(左)・第2面(右)平面図

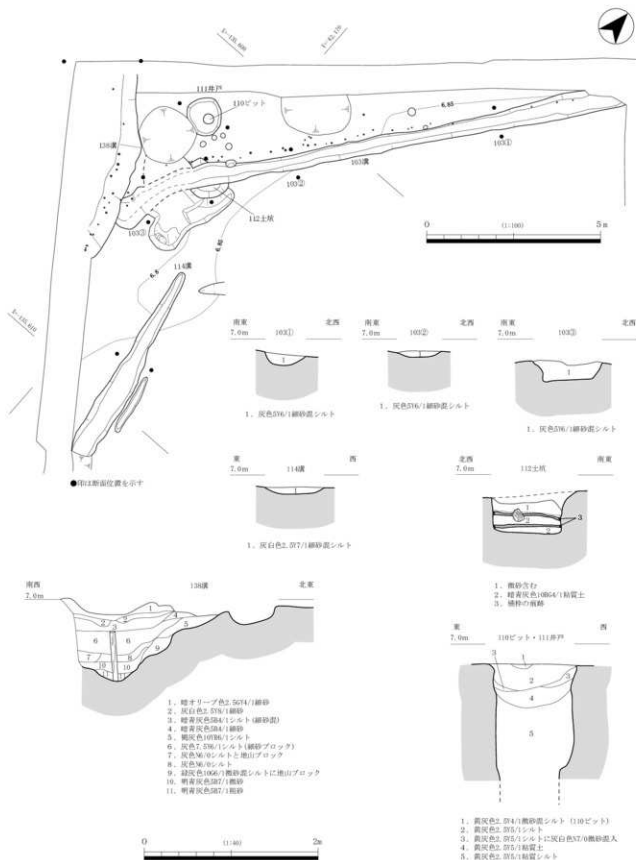


図10 C1・C2地区第2面検出遺構平・断面図

**116 溝出土遺物 (図8)** 7は瓦器で高台部は欠損。口縁部外面は指頭圧痕、内面はヘラミガキ、見込みには螺旋状暗文が残る。12世紀末～13世紀前半(尾上編年Ⅲ-1～2期、尾上1983)の所産。

**141 溝出土遺物 (図8)** 9は口縁端部が肥厚する東播系鉢で、14世紀前半(森田編年Ⅲ-2期、中世土器研究会1995)か。

### 3. 第3面の遺構・遺物 (図11～27・32、表2)

第3面は、古墳時代後期から中世までの遺物を含む第3層・第4層を除去した段階で検出した。北端部は約20cmの段差を有しており、段直下に第4層が広がる。検出遺構は、掘立柱建物2棟・土坑1基・群集土坑である。検出面高6.35～6.60mである。

**掘立柱建物1 (図11・12)** 桁行3間・梁間2間の側柱建物。平面積は23㎡、建物主軸はN3°W。検出した柱穴は全体的に方形を意識するようだが、一辺0.6～0.8m前後の方形、楕円形を呈するものなどさまざまである。すべての柱穴で径0.2～0.3mの柱痕跡を確認したが、柱通りはあまり良くない。深さは北辺側が0.2mと浅くなるが、他は概ね0.3～0.4mが平均である。建物を構成する362柱穴掘りかた、366柱穴掘りかたから時期不明の須恵器片が出土した。360柱穴では、柱痕の一部と考えられる木片がみつかり、樹種鑑定の結果コウヤマキと判明した。

**掘立柱建物2 (図11・12)** 掘立柱建物1のすぐ南側で検出した桁行2間・梁間1間の側柱建物で、平面積8㎡、建物主軸はE5°Nである。建物としては小規模である。柱穴は径0.2～0.3mの円形で、深さは0.1～0.15mと建物1に比べて非常に浅い。柱痕跡については確認できなかった。建物主軸や配置からみて、掘立柱建物1と関連する建物と考えられる。

**405 土坑 (図11・13)** 掘立柱建物2のすぐ南側に位置する土坑である。配置・形状からみて群集土坑とは別個に記述する。平面形は長辺2m、短辺1mのやや台形を呈する。検出面からの深さは約1.35mを測る。断面形状は上から0.5m付近でややテラス部分をつくり、そこに2本の棒状木材を設置していたと思われる。蓋もしくは足場の材として使用されたものであろう。樹種は水に強いカヤ製である。テラス以下は北西方向にやや傾くが、湧水層に達しておらず、底部は平坦である。埋土を観察すると、土坑は掘削されたのち灰色系のシルト・粘土層が互層状に自然堆積・グライ化した状態が長く続き、最終的に褐灰色10YR6/1シルトに地山、黒色10YR2/1微砂混シルトが混合する土で埋められて廃棄されたことがわかる。埋没状況や湧水層に達していないことから、井戸ではなく水溜あるいは<sup>ひら</sup>蓋的な保管施設の可能性を考慮すべきであろう。群集土坑・掘立柱建物と関連する施設の可能性が高い。

遺物は、最上層と中層である3層に集中投棄された状態でみつまっている。最上層では複弁八弁蓮華文軒丸瓦・蹄脚硯が、中層では須恵器甕・長頸壺・甕・環・蓋(転用硯)、土師器甕・環、不明木製品・火付け木片などが出土した。遺物から7世紀後半には掘削され、8世紀前半に廃棄されたと考えられる。この軒丸瓦は、当遺跡の北約1kmにある七尾瓦窯で焼かれたことが判明している。窯跡から出土した同型式の個体はいずれも焼成不良品という事実から考えて、窯跡で行われた製品の選別(1次選別)を経て難波宮への運搬途中、蹄脚硯とともに当地周辺で何らかの事故によって破損し405土坑に廃棄された可能性が想定できる。

**群集土坑 (図11・14～22、表2)** 調査区全体に展開するが、掘立柱建物1・2と405土坑を避けて分布する。全部で311基を数える土坑を検出した。やや環状に分布し、調査区外にも確実に広がる。また土坑とその周辺には埋戻しのブロック土が部分的に認められるため、土坑の輪郭を検出することは

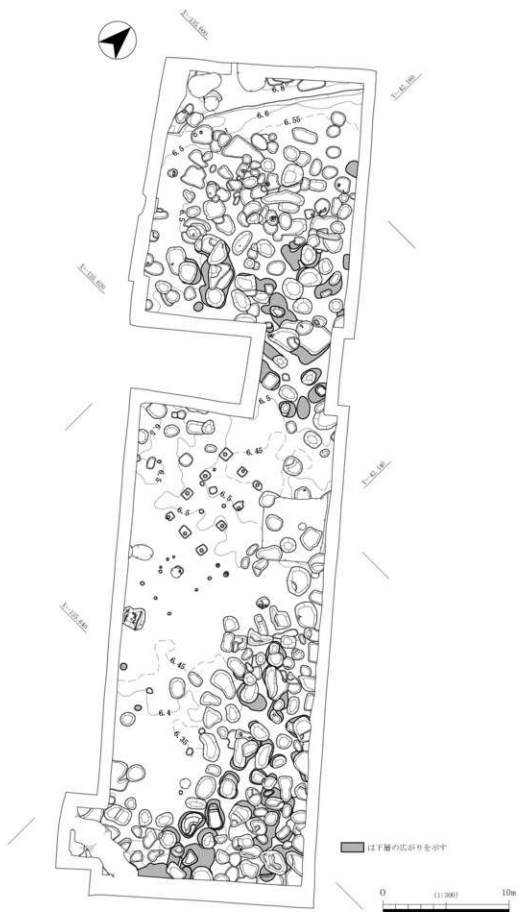


図11 C1・C2地区第3面平面図

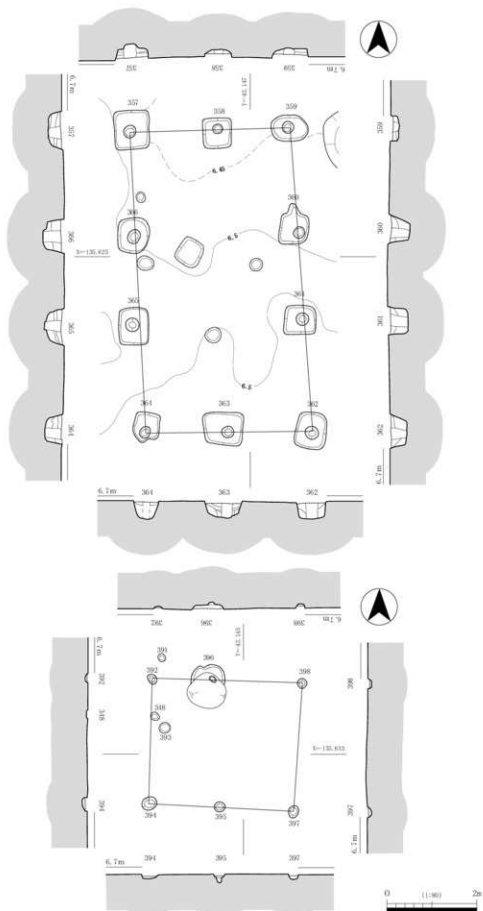
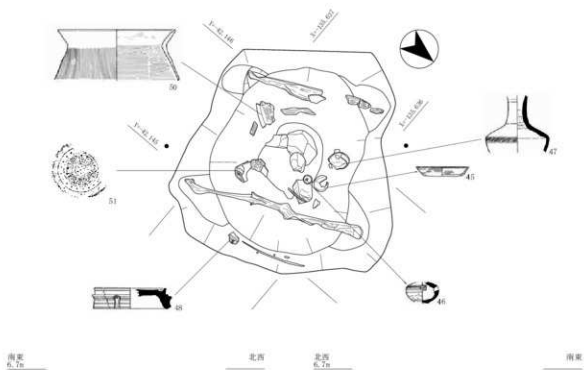


図12 掘立柱建物1 (上)・2 (下) 平・断面図

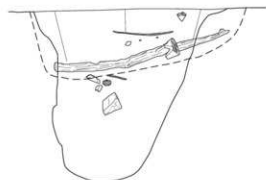
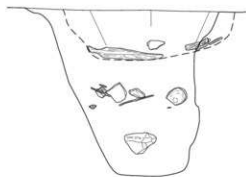


南東  
5.75

北西

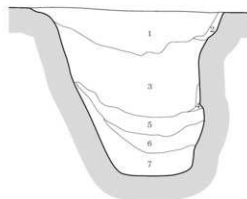
北東  
5.75

南東



南東  
5.75

北西



1. 褐色色10YR6/1シルト、中央付近に堆山土と黒色10YR2/1微砂質シルトがブロック状に含む
2. 褐色色10YR6/1微砂シルト
3. 灰色5Y5/1粘質シルト(微塵に炭・軽石混)
4. 灰色5Y5/1粘質シルトに堆山土混入
5. 灰色5Y4/1粘土に少量灰色2.5Y6/1微砂ブロック混入(炭化物含む)
6. 灰色5Y5/1粘土
7. 灰色5Y5/1細砂質粘質シルト



●印は断面位置を示す

図13 405土坑平・立・断面図

非常に困難であった。そのため第3面の遺構検出後、さらに0.1 m程度の掘削と精査を実施し、上面で確認できなかった下層の広がりを確認した。なお土坑間には切り合いがあり、重複するものも多い。今回検出した群集土坑を理解するために、便宜的に分類・整理を試みた。各土坑の分類は表2に記載しているので参照されたい。ここでは平面形・断面形・埋土を下記のように分類し、分析や考察などは別途第IV・V章に掲載した。

土坑は平面形・断面形・埋土によって、概ね次の通りに分類することができる。

〔平面形〕 I 円形：楕円形・長楕円形を含む。

II 方形：正方形・長方形・隅丸方形などを含む。

III 不定形：不整形のもの、連続して本来の形状が不明なもの。

〔断面形〕 1 皿形：緩やかな壁面から底部に至るもっとも一般的なもの。

2 U字形：皿形の深いもの。

3 方形：壁面が垂直で、底面の平坦なもの。

4 逆台形：壁面が法をもち、底面平坦なもの。

5 袋状：フラスコ形・長靴形とも呼ばれるもので、壁面が片方もしくは両方決めるもの。

6 逆三角形：いわゆるすり鉢状のもの。

7 凸状：底面にピットもしくは不定形の凹みを有するもの。

8 M字状：底面が凸凹になったもの。

〔埋土〕 a 混合土：土坑掘削後すぐにブロック状に混合した掘削土で完全に埋め戻したもの（図20）。

b 自然堆積土：土坑掘削後そのまま放置したもの（図22）。

c 混合土→自然堆積土：土坑掘削後すぐに掘削土を利用し、途中まで埋め戻したもの（図22）。

d 自然堆積土→混合土：土坑掘削後しばらく放置され、自然に埋積した凹みを人為的に埋め戻したもの（図21・22）。

そのほか切り合い関係、土坑底面レベルについても観察した結果を表2にまとめた。ここではまず全体の概要を整理しておく。平面形状はIが239基（83%）、IIが39基（14%）、IIIが9基（3%）となっており、平面は円形が圧倒的に多い。次に断面形状は皿形（1）の占める割合が高いが、逆台形（4）や袋状（5）も35基認められる。また土坑底面に小ピットや不定形の落ち込みがみられるものもあり、総じて規格性は認められない。埋土は観察結果から次の4つの堆積状況を想定した。掘削した土坑を埋め戻すもの（a）と埋め戻さないもの（b）に大きく2分し、さらに埋め戻すもの（a）は完全に埋め戻さないもの（c）と、bの状態のものを完全に埋め戻すもの（d）に分かれる。検出土坑で分類するとa：84%、b：5%、c：1%、d：10%となる。堆積する埋土は一部を除き、ほとんどが混合土（a）である。

出土遺物は須恵器が多く、土師器はほとんど含まれない。種類は甕・壺類が多く、坏・高坏類は極めて少量である。施軸陶器（224土坑）や瓦（190・310・319・405土坑）が含まれるものもみられた。また完形もしくはそれに近い土器が出土した土坑は図を掲載し詳述するが、他の土坑は出土しても細片が1～2点程度であった。なお、211土坑と220土坑出土の須恵器片は接合した。特殊な遺物はみられないが、須恵器は186土坑を除いて完形に復原できるものはなく、焼成不良品が多い。穿孔状の痕跡をもつものもある。



186 土坑 (図 14・16) 188 土坑を切る。楕円より方形に近い土坑である。断面皿状で埋土は3色のブロック土である。遺物は須恵器甕 (図 24-28)・壺 (図 24-24) の2点で、甕は埋土上面付近、壺は底に据えた状態で出土した。壺の胎土は白色系で、焼成不良品である。穿孔状の痕跡が残る。

190 土坑 (図 14・16) 191～193 土坑に切られる。落ち込み状で不定形である。中央付近で遊離した状態で礫と須恵器・土師器の細片、七尾瓦窯の軒平瓦片 (6664 B 型式) が出土した。

220 土坑 (図 14・16) 237 土坑を切る。隅丸長方形に近い形状で、その法面から須恵器甕 (図 25-31) の約 1/2 個体が外面を下にして出土。白色系の胎土で非常に軟質。焼成不良品。他に高坏と思われる破片が出土したが、211 土坑出土のものと同接合した。

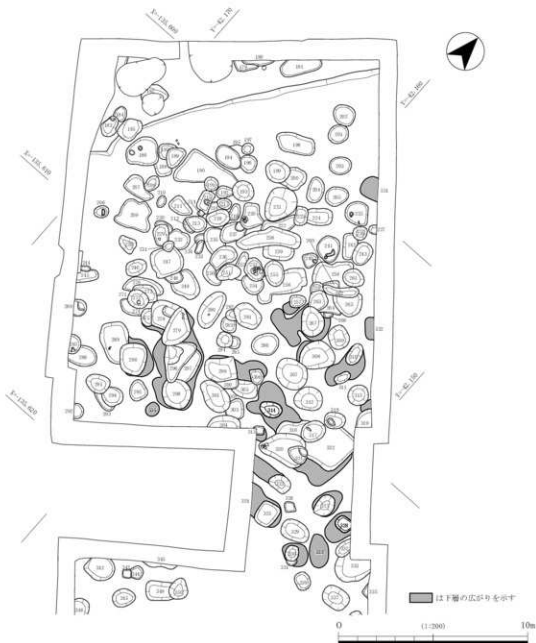


図 14 群集土坑北側の遺構番号

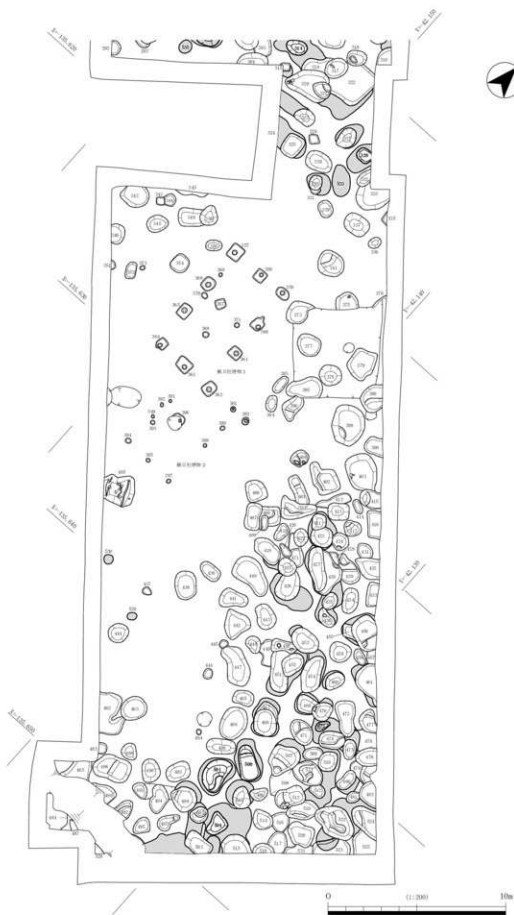


図15 群集土坑南側の遺構番号

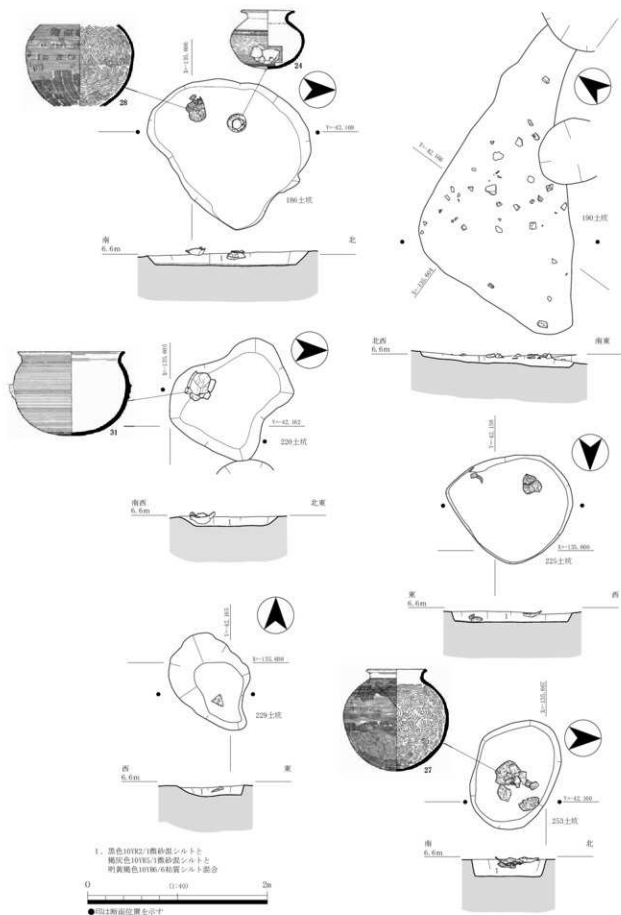


図 16 186・190・220・225・229・253 土坑平・断面図

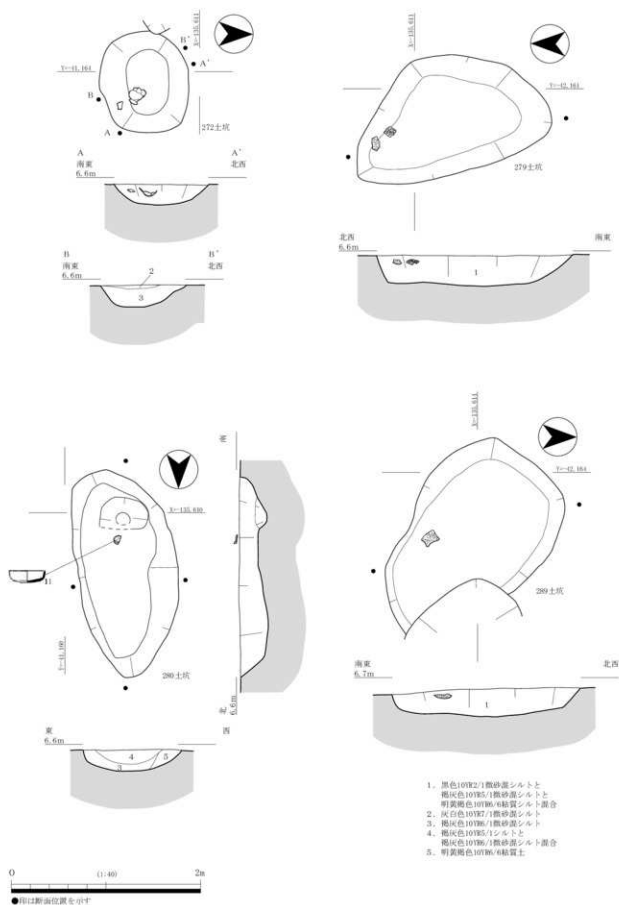


図17 272・279・280・289土坑平・断面図

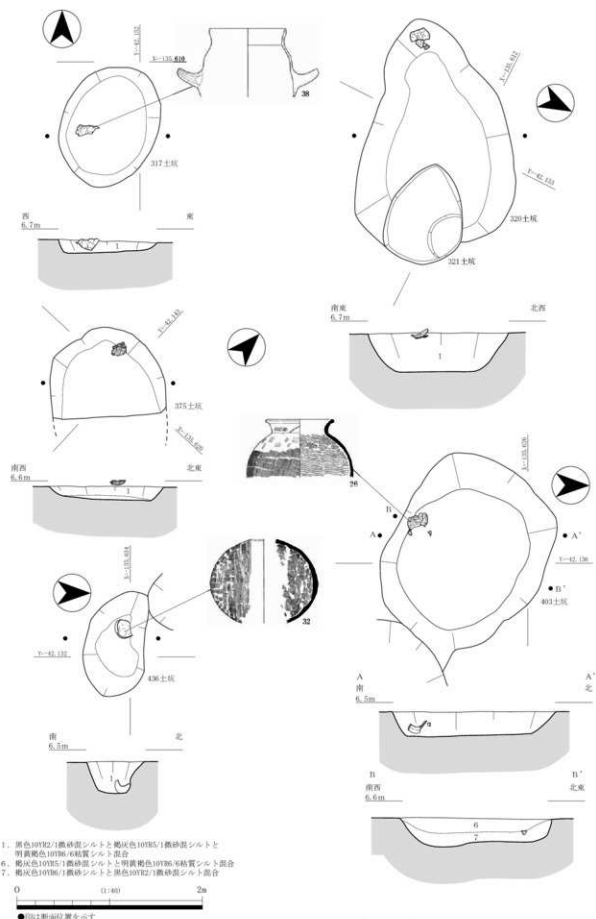


図18 317・320・321・375・403・436土坑平・断面図

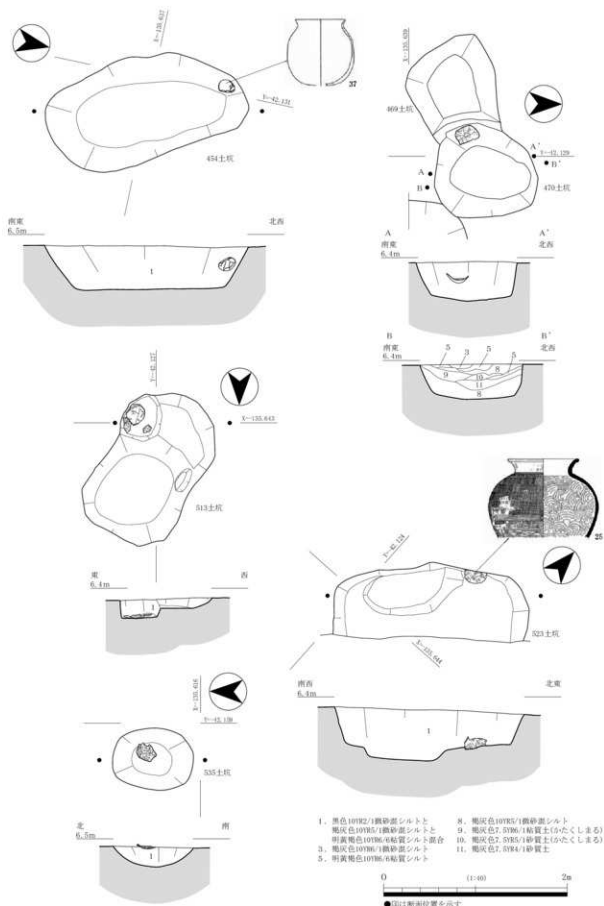


図19 454・469・470・513・523・535土坑平・断面図

- 225 土坑 (図 14・16) 形状は円形に近い。法面に須恵器裏片が2個体分出土した。
- 229 土坑 (図 14・16) 楕円形の変形を呈す。230・232 土坑を切り、231 土坑に切られる。須恵器裏の破片が上位より出土した。
- 253 土坑 (図 14・16) 楕円形を呈し、252・254 土坑を切る。法面から中央部分にかけての埋土上位から、少なくとも須恵器裏2個体分 (図 24 - 27) が出土。
- 272 土坑 (図 14・17) 270 ~ 274 土坑を切る楕円形の土坑である。埋土中位から焼成不良の須恵器片が出土した。埋土上層は、凹みに自然に堆積した様子がうかがわれる。
- 279 土坑 (図 14・17) 278・296 土坑を切る。三角形に近い不定形。法面上位に須恵器裏片が出土した。
- 280 土坑 (図 14・17) 長楕円形を呈す大型のもので、南側底部にピット状の窪みを有する。埋土直上で須恵器環 (図 23 - 11) が正位で出土した。7世紀半ばから後半のものか。
- 289 土坑 (図 14・17) 長楕円形を呈し、290 土坑に切られる。上位で須恵器片が出土。
- 317 土坑 (図 14・18) 316・322 土坑を切る。焼成不良の須恵器裏、土師器裏 (図 25 - 38) が出土。
- 320 土坑 (図 14・18) 316 土坑を切り、321 土坑に切られる深い土坑である。長楕円の先端が突出した法面に須恵器裏 (図 24 - 30) が出土した。これも焼成不良品である。
- 375 土坑 (図 15・18) 楕円形土坑の一部を検出した。埋土直上で須恵器裏などが出土した。
- 403 土坑 (図 15・18) 大型の楕円形土坑である。415 土坑に切られる。遺物の出土は法面で下層の上面辺りで焼成不良の須恵器裏 (図 24 - 26) が出土した。
- 436 土坑 (図 15・18) 切り合い関係のない非常に小型で深い土坑で、北側を若干抉ったような断面形をもつ。土坑底部付近で須恵器横瓶 (図 25 - 32) が出土した。
- 454 土坑 (図 15・19) 大型の長楕円形土坑で切り合い関係はない。北側法面中位で土師器裏 (図 25 - 37) が出土した。
- 470 土坑 (図 15・19) 469 土坑を切る。楕円形で断面逆台形。法面中位で焼成不良の須恵器裏が出土した。
- 513 土坑 (図 15・19) 508・519 土坑を切る。横瓶 (図 25 - 33) の破片を裏にして、ピット状の窪みに敷き詰めたような状態で出土した。
- 523 土坑 (図 15・19) 土坑約半分が調査区外に広がるため、全体形状は不明。底部西壁側で不定形の落ち込みを有する。焼成不良の須恵器裏 (図 24 - 25) が出土した。
- 535 土坑 (図 14・19) 小型楕円形の土坑である。埋土最上層から須恵器裏片が出土した。
- 以上検出した群集土坑のうち、土器を伴うものを中心に報告した。平面形はあまり規格性が意識されない。出土した土器のうち完形に近いものは極めて少なく、土坑底部より中位、上位の順で破片が出土する。また底部にみられるピット状もしくは小さな凹みにも注意する必要がある。
- 土坑の埋没状況には、上述したように4段階が存在する。それぞれ代表的な断面図を図 20 ~ 22 に掲載した。数的には混合土 (a) が84%と圧倒的に占めるが、自然堆積のみ (b) と自然堆積したのち埋め戻される d との数もあまり無視できない。つまり、掘削は行いが埋め戻さないまま放置された土坑が混在しているのが特徴である。これは群集土坑の性格を考える上で非常に重要な問題と考えるが、それは第V章第2節で述べることにする。

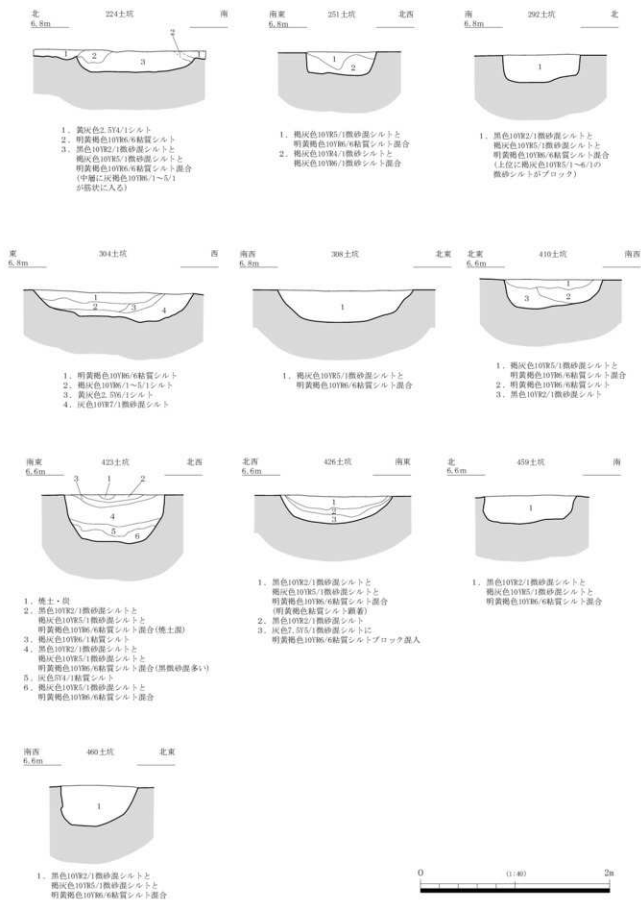


図20 群集土坑断面図(1) a 混合土



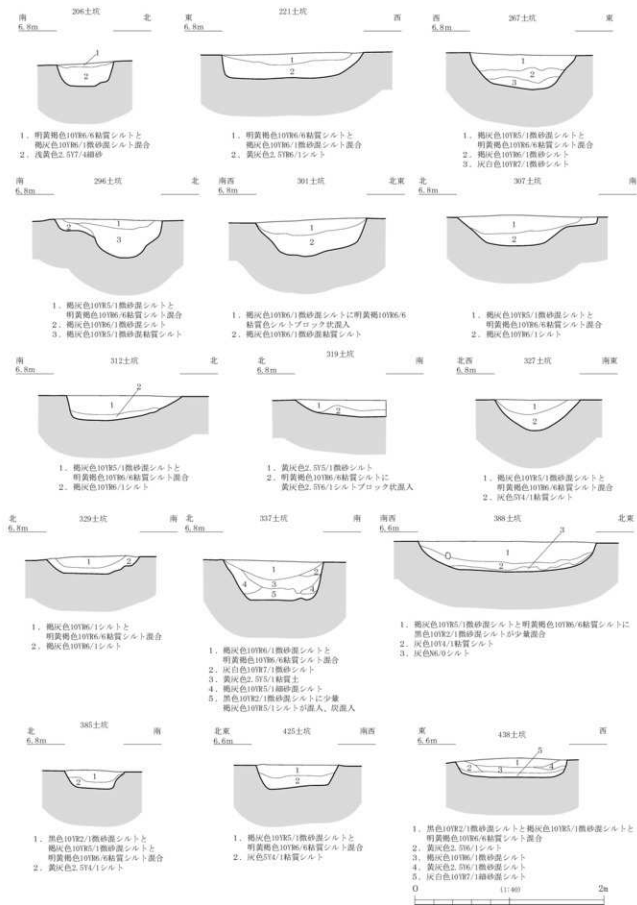


図 21 群集土坑断面図(2) d 自然堆積土→混合土

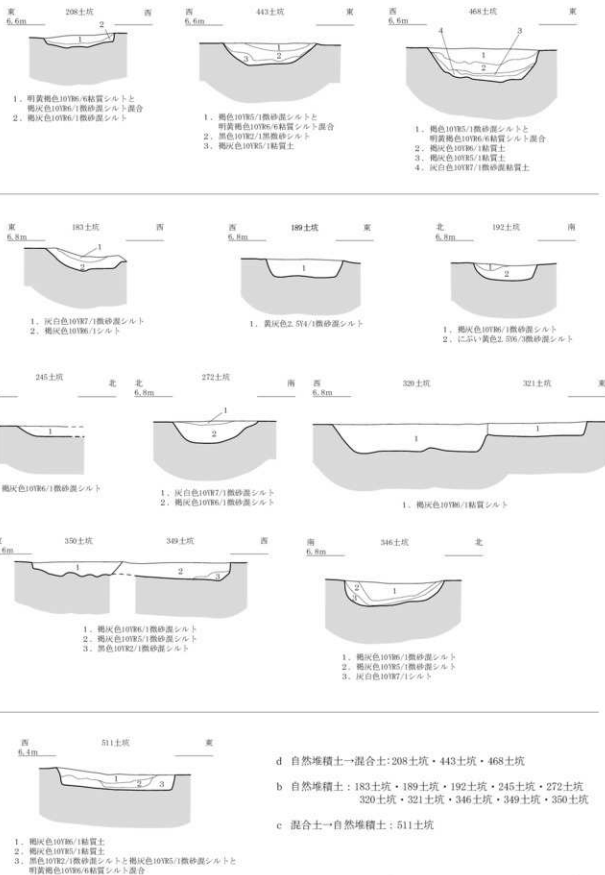


図22 群集土坑断面図(3)





群集土坑出土遺物(図23~25) 土師器・須恵器・瓦などが出土した。須恵器には、坏(11~13・20~22)・高坏? (18)・壺(14~16・19・24)・甕(17・25~31)・横瓶(32・33)がある。

坏G(11)は復原口径9.4cm、器高3.1cm。底部は切り離し後不調整。胎土に砂粒が目立つ。坏B(12)の高台は中央寄りに貼り付けられ、「ハ」字状に長く引き出される。復原口径10.1cm。同(13)は底部下面までナデ調整が及び、壺の可能性もある。焼成不良で灰白色。

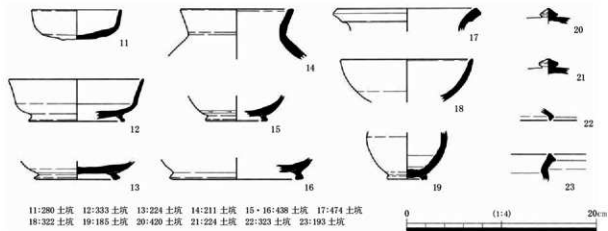
短頸壺(14)は内湾・外傾するやや長めの頸部をもち、口縁端部はわずかに凹面をなす。肩部はなだらかに落ちる。タタキ後ナデ仕上げ。15・16は壺とした。高台はいずれも端部に面をもち、内側で接地する。15は体部が上方へ立ち上がり、内面のナデは粗い。16は径に比して厚みをもち、体部外面にカキメが残る。焼成不良で灰白~黄白色、胎土に砂粒が目立つ。

甕(17)は、口縁部が断面方形を成す古い様相をもち。焼成不良で白色に近い。18は高坏か。器壁は薄く、体部下半はケズリ。胎土には黒色粒が目立つ。小型の長頸壺(19)は短い「ハ」字状の高台をもち、端部は凹面をなす。内面はナデ調整によって段状となり、焼き膨れがみられる。

蓋のつまみ(20・21)のうち、21はやや焼成不良。坏B蓋(22)は内面にかえりをもたず、鋭い端部を内側へ屈曲させる。鉢(23)の口縁端部は肥厚して凹面をもち。内外面ともにカキメ後ナデ。焼成やや不良で黒色粒を含む。

壺(24)は口径14.3cm、器高16.3cm、最大径20.7cmのほぼ完形。肥厚して断面長方形となる口縁端部と、なだらかな肩部をもち。肩部には2条一對の凹線によって文様帯を構成し、斜格子文を施す。体部下半はケズリ後カキメ、底部はナデ調整。口縁形態が不定で、内面に接合痕が残り、肩部の凹線が一部重なるなど複雑な作り。体部下半の孔は外面が剥離して穿孔を思わせるが、焼成の悪さと磨耗のため、判別し難い。類例をみないが、文様構成や形態、焼成は甕類との同時期性を示唆する。

甕(25~31)は灰~灰白色で27を除いて焼成不良、25と28は特に悪い。口縁部はタタキ出し成形で、頸部を外反させ、端部を折り曲げて肥厚させている。当て具痕は同心円文で、明瞭に残る。25は口径18.8cmでやや肩の張る器形。壺(24)と似て焼成が悪く、口縁端部はややいびつである。26は口縁部上端をわずかにつまみあげ、断面三角形になる。26と27にはヘラ記号を刻む。27・28は外面の擬格子目文タタキを特徴とする。27は口径16.0cm、器高28.3cm、最大径29.2cm。28は外面のタタキ目が浅く細かい。タタキの後ヨコナデが施されるのは、内面接合部のみ。29の頸部は直立気味で、口縁は上端に面をもって肥厚する。30は胴下部。細いタタキ調整の後、器壁が薄い底部付近では、カキメ



11:280 土坑 12:333 土坑 13:224 土坑 14:211 土坑 15・16:438 土坑 17:474 土坑  
18:322 土坑 19:185 土坑 20:420 土坑 21:224 土坑 22:323 土坑 23:193 土坑

図23 群集土坑出土遺物(1)

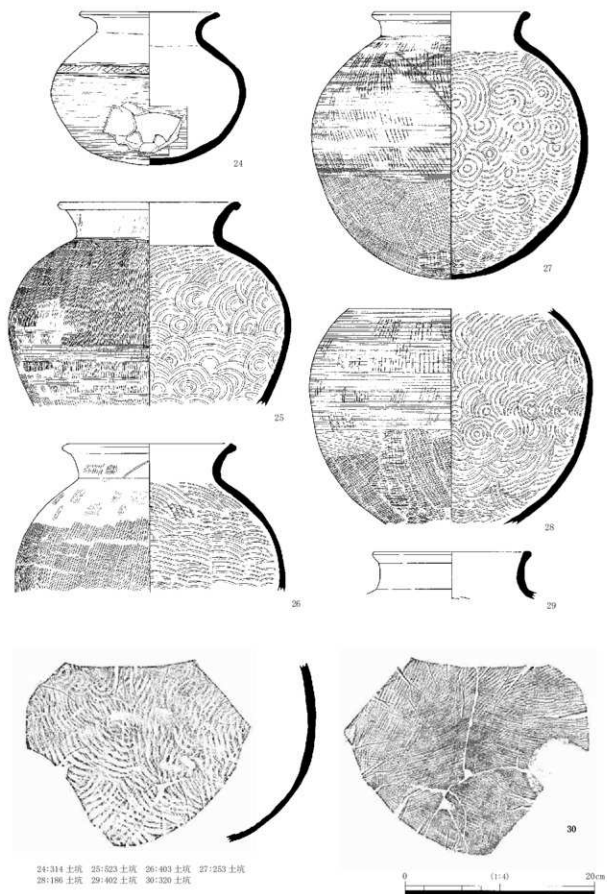


図 24 群集土坑出土遺物 (2)

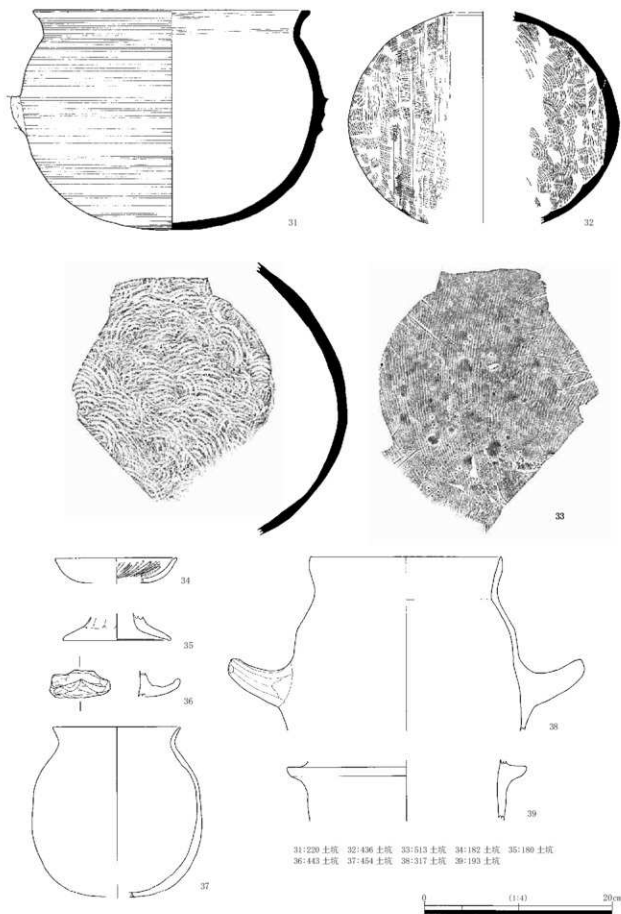


图 25 群集土坑出土遗物 (3)

が多方向に施される。内面には粘土帯が観察できる。31は復原口径29.4cm、器高23.5cm。扁平な胴部中央には、破損するものの上向きの把手をつける。口縁端部は肥厚して上端に面をもつ。灰白色で焼成やや不良。

横瓶の胴部(32・33)が2点出土している。32は、頸部をめぐるヨコナデを基準に最大径29cmに復原したが、大きくなる可能性もある。不均等で崩れたカキメとやや薄めの器壁が特徴である。内面には被蓋部の継ぎ目が明瞭に残り、外面からも確認できる。33はタタキ調整後、外面に繊細に施されたカキメが同心円状にめぐり、破損の形態からも被蓋部と考えられる。焼成は非常に良好で堅緻、一部自然釉が付着するが、焼き膨れも多く、胎土には黒色粒を多く含む。

土師器は環(34)・高坏(35)・甕(36～38)・羽釜(39)があり、器面が剥離・磨耗して調整はほぼ不明である。

環(34)は復原口径13.0cm。内面に放射状暗文をもち、胎土には黒色の砂粒や赤色粒が目立つ。高坏脚部(35)は多角形の面取りが施される。

36は甕・甔の把手部。下面は器表剥離する。37は小型の甕で、復原口径13.6cm、器高18.2cm。口縁部は短く外反し、端部は尖り気味におさめる。やや下膨れの器形で、体下部は分厚く、器表剥離する。甕(38)の口縁は斜め上方に直線的にのび、端部へ薄くなる。肩部はあまり張らず、やや長胴になるものか。復原口径20.4cm。胎土には長石・石英が目立つ。羽釜(39)は口縁部が短く直口するいわゆる「摂津C型」(菅原1983)と思われ、鐔は短く水平に付く。

14・17・24～30・32・33の須恵器壺・甕類は器形や焼成の悪さから、6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられるが、特に甕類は古い様相をもつ。須恵器甕(31)と土師器甕(36～38)はやや時期が下り、7世紀代の所産であろう。須恵器環・壺類を主とする11～13・15・16・22・23、土師器環類(34・35)は7世紀末～8世紀初頭(飛鳥IV～V、ST9段階)、うち12は7世紀第3四半期(ST9段階直前)のやや古い様相をもつ。19や21は8世紀末～9世紀初頭(平城V・VI)。土師器羽釜(39)は10世紀後半～11世紀前半と、群集土坑の下限を示すものと思われる。

405 土坑出土遺物(図26・27) 須恵器環(41～44)・甕(46)・長頸壺(47)・蹄脚硯(48)、土師器環(45)・甕(49・50)、軒丸瓦(51)・不明木製品(52)がある。

環B蓋(40)は復原口径19.4cm、残存高2.4cm。内面の一部が黒変・磨滅し、転用硯と考えられる。41は環Aか。復原口径14.2cmで、ヘラケズリの痕跡と縦方向のヘラ記号がみられる。42は底部でごくわずかに屈曲し、高台をもつ可能性もある。復原口径14.8cmで薄手である。環B(43)の高台は短くひらき、端部は平坦。環A(44)は復原口径12.8cm。体部の屈曲が強く、厚手である。焼成不良で灰白色。

46・47は凹線で区画した文様帯に列点文を配する。高台付の甕(46)は、ヘラ痕が円孔の断面に溝状に残る。外面2ヶ所にも「ニ」「ノ」状のヘラ痕。長頸壺(47)の頸部には凹線状のくぼみが浅くめぐり、頸部内面に粘土の継ぎ目や、縦方向のヘラ痕が明瞭に残る。3段階成形であるが頸部の接合方法が特徴的である。頸部との境界部を上方へ曲げ、その上部に粘土帯を積み上げて頸部を成形したと思われる。

土師器環A(45)は口径13.5cm、器高2.6cmと浅く、口縁端部はかるく折り返す。器面が剥落するが、外面にミガキ、内面に放射状暗文と螺旋状暗文がかろうじて残存する。甕の口縁部(49)は強く外反して垂直に近い端面をもち、下端がわずかに肥厚する。50はハケ調整の甕。口縁端部を内側に屈曲させて内湾状の口縁を形成する。



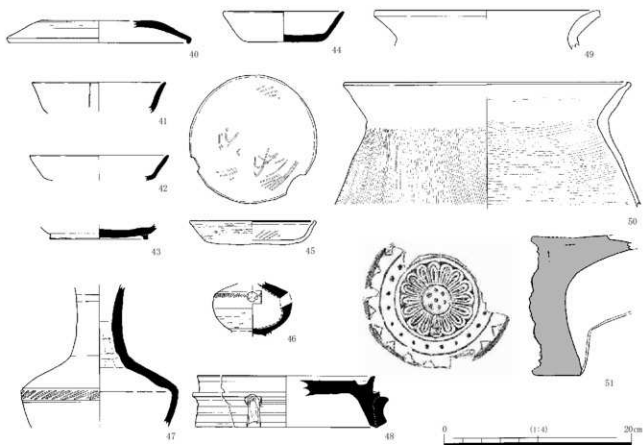


図 26 405 土坑出土遺物 (1)

踏脚礎 (48) は残存率 10% の破片で、最大径 19.4cm、器高 5.5cm に復原される。陸部は周堤より低く水平にのび、脚端部は外方で接地する。脚部外面に凹線がめぐり、突帯下に断面方形、無装飾の脚が付く。透かしの有無は不明である。陸部上面はざらざらで、焼膨れがみられるため、未使用で廃棄されたものと考えられる。軒丸瓦 (51) は、6303 型式と称される後期難波宮所用瓦で、瓦当部の一部と丸瓦部分を欠損するが、焼成は良好である。

木製品 (52) は、長軸 36.0cm、短軸 6.6cm、厚さ 2.6cm の板目材。端部を三角形状に成形するとともに、左面下半は平坦を志向する。図の下端はやや潰れるが、使用痕かどうかは不明である。材質はカヤである。

長頸壺と甌は古相、坏 (43) はやや新相を示すが、7 世紀末～8 世紀前半 (飛鳥 V・平城 I～平城 III) の年代を示すものとする。

#### 4. 包含層出土遺物

盛土攪乱及び第 1 層出土遺物 (図 28) 犬釘 (53) は、頭部が犬形を呈す。大きさから軽便軌道用レールに用いたもの

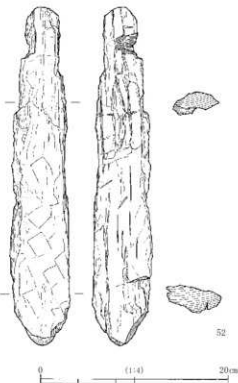


図 27 405 土坑出土遺物 (2)

か。土人形(54)は玩具である。第1層出土。煙管の吸口(55)も出土している。

**第2層出土遺物**(図29) 須恵器(63)・施釉陶器(56)・東播系須恵器(61)・備前焼(62)・輸入陶磁器(65)・肥前系陶磁器(57~59)・製塩土器(60)が出土した。緑釉陶器碗(56)の円盤状高台は、ほとんど施釉されず。京都産。57は筒形茶碗である。このタイプは18世紀後半~19世紀初頭に位置付けられる。59は染付の蓋付広東碗で、見込みに昆虫文様を施文する。18世紀後半~末の所産。58は唐津皿か。60は製塩土器である。口縁部のみで遺存で筒状タイプを呈し、2次比熱を受ける。8・9世紀代か。61は東播系捏鉢の口縁部である。62は備前播鉢で、口縁端部を上方につまみあげる。63は須恵器蓋の宝珠つまみである。径2.6cm、扁平な形状で焼成良好である。8世紀前半と考えられる。64は古瀬戸皿で底部に糸切痕がみえる。全体に灰白色の釉がかぶる。13世紀代か。65は蓮弁文青磁碗である。14世紀~15世紀後半に比定できる。

**第3層・第4層出土遺物**(図30) 須恵器坏(66~80)・黒色土器碗(86)・土師器羽釜(87)・瓦質三足釜(81)・不明土製品(82)・白磁碗・皿(83~85)を図示した。うち69・77・78は第4層、ほかは第3層出土。なお墨書土器・施釉陶器・瓦は後述する。

坏H(66)の口縁端部は鋭く、上方へのびる。外面は自然釉が付き、体部に焼き膨れがある。復原口径12.2cm。同(67)は復原口径8.0cm。立ち上がりは退化して、短く内傾する。

坏Aには口縁部が内湾気味の68と平底で外反する69があり、69は底部にヘラ切り痕を残す。坏B(70)は焼きが悪く、器面にヒビが入る。高台は「ハ」字状で内よりに付き、内側で接地する。口径14.2cm、器高4.0cm。71の高台は長く、70より外側に付く。

72は坏Cか。復原口径12.6cm。底部はヘラ切り後ナデで、体部との境に段差をつくる。74は同蓋であろう。79は復原口径5.7cmと小型。壺の蓋か。

坏B蓋は73・75~78・80。73のつまみの基部径は太く、天井部も平坦である。比べて75はつまみの径が2.5cmと小さく、天井部が丸みを帯びる。

口縁端部の形態はかえりを残す76、下方へ屈曲する77、「Z」字状に強く屈曲する78があり、77は胎土に石英が目立つ。



図28 第1層出土遺物

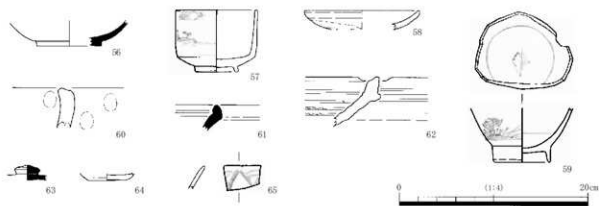


図29 第2層出土遺物

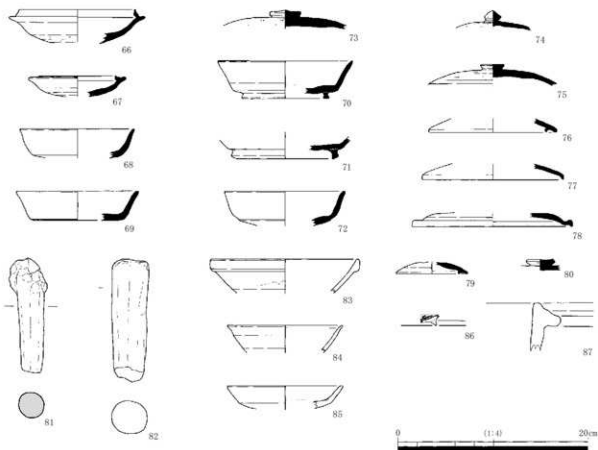


図30 第3層・第4層出土遺物

これら須恵器の年代は、7世紀前半（飛鳥Ⅰ、吹田Ⅲ・Ⅳ期）に位置づけられる66から、坏Gや坏H（67・72・74・79）のある7世紀第3四半期（飛鳥Ⅱ・吹田Ⅴ期）、坏の高台やかえりを残す（68・70・71・76・77）段階の7世紀末～8世紀初頭（飛鳥Ⅳ～飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ、吹田Ⅵ）、8世紀後半（平城Ⅳ～Ⅴ）であろう69・78まで、7世紀から8世紀代までを含む。

81は瓦質三足釜の脚部。円柱状の土製品(82)は下端を欠損。上部は平坦で黒斑をもち、側面には絞ったような痕跡がみられる。胎土は粗い。

白磁（83～85）は碗（83・84）と皿（85）の口縁部である。85は体部中位で「く」の字状に屈曲する皿。13世紀初頭か。

黒色土器（86）は、内黒のA類碗で、9世紀後半～10世紀の所産。土師器羽釜（87）は摂津C型と呼ばれるもので、口縁部が直立し、鈿部は水平よりやや下向く。10世紀後半～11世紀の所産。

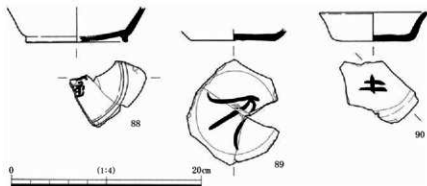


図31 墨書土器

墨書土器(図31) 今回の調査で出土した墨書土器は3点を数える。88・90はC1・C2地区第3層から出土したものである。88は須恵器環Bで、高台は底部の外側寄りにつく。底部外面に「福」または「酒」の右側(旁)と思われる墨書がみえる。90は平底で口縁部が外反する須恵器環Bで、底部外面に「土」を記す。89はC1・C2地区第4層から出土したもので、底部外面に大きく墨書されている。当初則天文字の「天」という可能性を考えたが、鑑定により漢字体が確立されるまでの古字の一つ「万」とした。すべて8世紀後半(平城Ⅳ～Ⅴ)の所産。

緑釉陶器・灰釉陶器(図32) 緑釉陶器は猿投産(91・92)と京都産(93～97)に分かれ、後者は釉調と胎土から概ね洛西産であろう。91はC2地区第4層から出土した段皿の口縁部片、92は同じくC2地区第3面直上出土の碗・皿類の底部片で、ともに灰白色7.5Y8/2を呈し、釉層が厚く細かな貫入が入る。9世紀中頃の所産。

93はC2地区第4層出土、輪花碗の体部片。オリーブ灰色10Y5/2の釉が残る。94はC1地区第4層出土の碗・皿類の底部片で、糸切り痕が残る底部の中央付近を軽く抉り取り、蛇の目風の高台に仕上げたもの。内面には粗いヘラミガキが残り、灰白色7.5Y7/2の釉が底部外面にも残る。95はC2地区第3面224土坑出土の無釉の皿。96はC2地区4層出土の中央部がやや凹んだ円盤状高台片で、底部内面には胎目がある。全面に灰白色7.5Y7/2～オリーブ灰色10Y4/2の釉が残る。97もC2地区第4層出土の中央部がやや凹んだ鉢の底部片で、全面に灰オリーブ色7.5Y5/2の釉が薄く残る。以上京都産の緑釉陶器は9世紀後半の所産。

灰釉陶器はいずれも猿投産。98はC2地区第4層出土の碗・皿類の底部片だが、施釉の痕跡がない。99はC2地区第3面直上出土の壺底部片。これらも概ね9世紀後半。

瓦(図32) 100はC2地区第4層出土の難波宮6664B型式軒平瓦の中心飾り付近の破片。焼成は須恵質で堅緻。

101・102は凸面に斜格子叩きを、凹面は縦方向のヘラケズリを施し、凹面の布目をほとんど残さない。焼成はいずれも須恵質で堅緻、磨耗なし。C2地区第4層から出土した。七尾2号窯の所産。

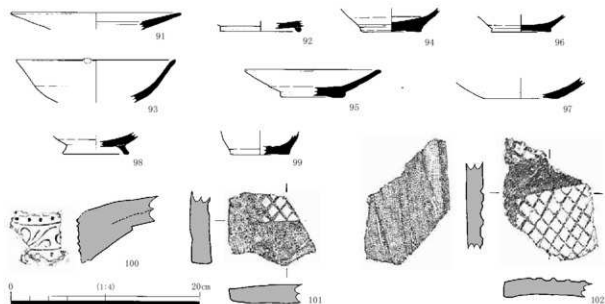


図32 緑釉陶器・灰釉陶器・瓦

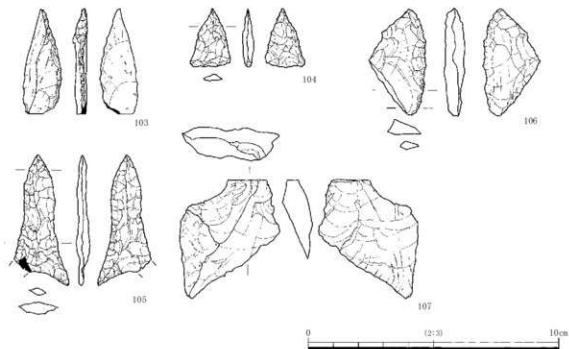


図 33 石器

打製石器（図 33） サヌカイト製の打製石器が出土したのは、第 3 面精査時（103・107）、342 土坑（104）、322 土坑（105）、側溝（106）。他遺物と時期がかけ離れるため、流れ込みや下層からの巻き上げによるものと考えられる。

ナイフ形石器（103）は、小型・薄手の縦長剥片を素材とする。右側縁の連続的な調整によって背潰しを行っており、基部は折り取る。長軸 4.15cm、短軸 1.46cm、重さ 2.8 g。

石鏃（104）は、平基式と考えられるが、左右の側縁にわずかに角をもち、五角形鏃とも捉えられる。長軸 2.28cm、短軸 1.56cm、重さ 0.9 g。105 は凹基式の石鏃で、長軸 5.16cm、残存幅 2.14cm、重さ 3.1 g と大型化したもの。剥離は丁寧で側縁は鋭い。基部の一端を欠く。

106 は鏃か。上下端は折り取られ、端部はわずかに摩擦して丸みを帯びる。下端左側にはわずかに敲打痕を認める。右側縁には両面から浅い剥離調整が行われているため、右側縁を刃部としたスクレイパーの可能性もあろう。長軸 4.21cm、短軸 2.20cm、重さ 7.2 g。

107 は剥片である。打面調整による上面の平坦面に、打撃痕を認める。腹面側には自然面を残し、縦位の剥離によって、下端の尖る形態。表面はやや風化し、16.6 g を量る。

103 は風化が著しく、旧石器時代の所産かと思われる。風化の程度や形態から 104・107 は縄文時代、105・106 は弥生時代の資料であろう。層位や資料数に不安定さはあるものの、以前の出土資料（西口 1999）とあわせて、周辺での旧石器時代から弥生時代の活動を示すものと考えられる。

### 第3節 C3・C4地区の調査

#### 1. 第1面の遺構・遺物(図34・35)

調査区の西半部は近世以降の削平のためか、近世耕作土以前の堆積層はほとんど遺存していなかったため、すぐに最終遺構面を検出することができた。逆に東半部は、褐灰色系のシルト層が薄くほぼ全面に広がっており、有機質を豊富に含んだ湿地や沼地のような谷状低地を想定する。地形的には西から東方向に緩やかに傾斜し、さらにC4地区中央付近から南へ下がる。したがって、調査では時期が分からないので、面を重視して遺構を捉えた。検出した遺構は、そういった上面より掘削された近世溝・井戸・杭列などである。

**1011・1012・1015・1030 溝(図34)** これらは調査区の西隅において検出した東西方向の溝である。1011 溝は幅0.8 m、深さ約0.1 mで、少し屈曲しながら1012 溝とつながると考える。1015 溝は不定形の南北方向の溝で、西側に杭をもつ。南はC6地区、北は調査区外に広がる。C6地区側で検出した2006 溝の延長部分ではないか。すべて単一層で暗灰黄色2.5Y5/2 砂質シルトの埋土をもつ。1030 溝は幅0.6 m、深さ約0.1 mを測り、断面皿状を呈す。埋土は黄灰色2.5Y5/1シルト。出土遺物はなかった。

**1032・1034・1035・1036・1037・1038 溝(図34)** 上述の溝とは異なり、整然と並んだ6条の溝を検出した。幅1.0～1.2 m、深さ0.05 mを測る浅い溝である。埋土は暗灰黄色2.5Y5/2 砂質シルトの1層のみである。出土遺物はなかった。耕作に伴うものか。

**杭列(図34)** C3地区の中央、地形が南側に落ち始める段差付近と、そこから1032 溝の横を平行に1004 井戸に向かって直交するように丸杭が打設されている。耕作に伴う土留めであろう。

**1007 井戸(図34・35)** C3地区の北東近くに位置する素掘り円形井戸で、最大径約2.0 mを測る。最終的な深さは不明、面の掘り下げとともに検出面より4.5 mまで掘削を行ったが、それ以下は崩落の危険があったため掘削を中止したためである。埋土は黄灰色2.5Y5/1シルト層と、灰色7.5Y4/1シルトにオリブ黒色5Y3/1粘土やオリブ灰色2.5GY5/1シルトがブロック状に混入する層に分かれる。上層の黄灰色シルトは、最終埋土であろう。検出面より約2.5 mで、桶を転用した井戸枠の最下部を確認したが、上部は抜き取られたためか存在しなかった。井戸枠は結桶組型に属するが、少し特殊な積み上げ方をする。本例は、桶を上下2段に組み合わせていたのだろう。上段は検出できなかったが、水溜の上に桶を逆さにし、その上にジョイントの役割をする角材の組型と、桶の底板を切ってつくった円形板材(カガミか?)が置かれていたであろう。これらは上段の桶を設置する際、台の役割を果たしたのではなかろうか。この組型は、幅約0.1 mの角材を相欠きによって組む方法がとられ、互いに組み合わせる部分には、「|」「|」「|」の3種類の打刻印を施す。他所で作成し、現地を組み合わせる際、目印としたのであろう。材質は鑑定により桶がスギ、その他がアカマツと判明した。遺物は、最上層付近から近世の染付や瓦の小片が出土した。

**落ち込み群(図34)** 調査区西隅には、いくつかの落ち込みが集中する。その中の1019 落ち込みはほとんどが既設水路により攪乱を受けており、全容は不明である。7世紀代の宝珠つまみを有する須恵器坏蓋(図43-126)が1点出土した。埋土は暗灰黄色2.5Y5/2 砂質シルトで、他の落ち込みも同様である。出土遺物からみて、第1面の検出遺構として取り扱うが、後述する第2面検出の自然流路の氾濫で形成された可能性もある。

**落ち込み群出土遺物(図43)** 坏G蓋(126)は口径10.2cm。かえりは一部途切れる。飛鳥Ⅱに下るか。

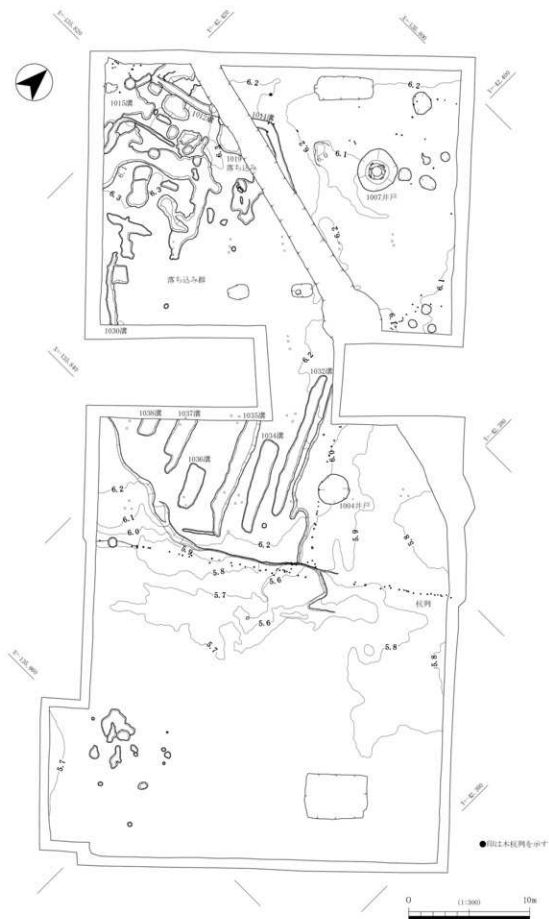


图34 C3·C4地区第1面平面图

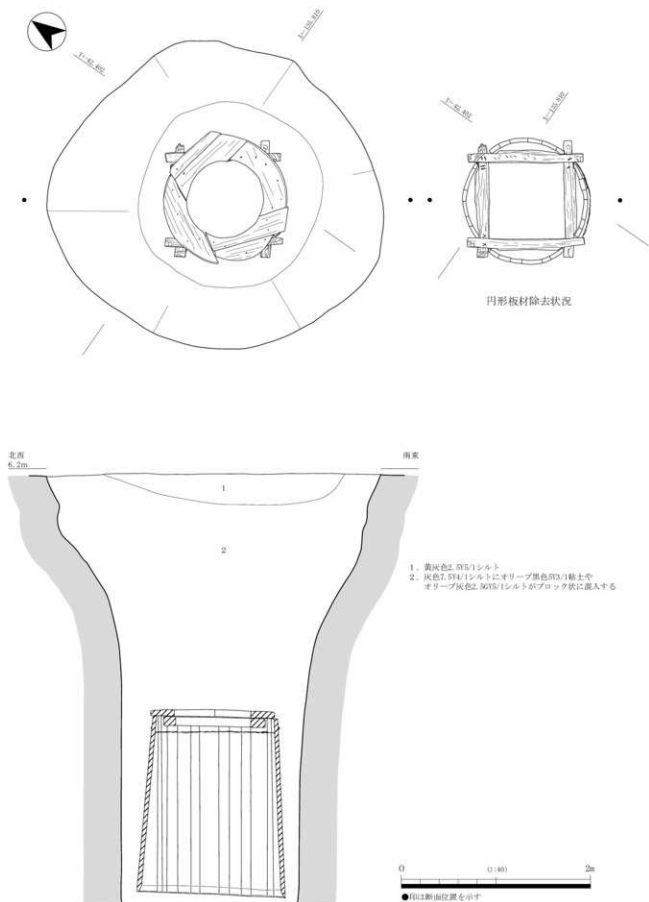


図 35 1007 井戸平・断面図



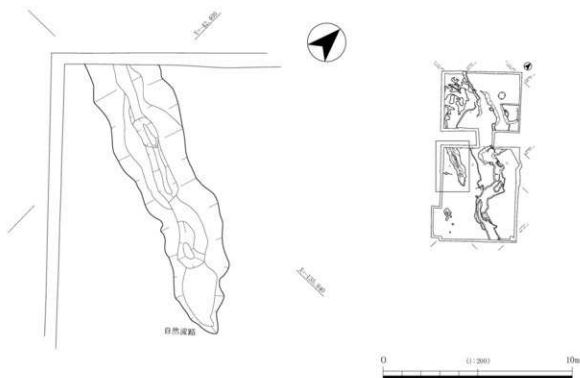


図36 C3・C4地区第1 - 1面平面図

## 2. 第1 - 1面の遺構・遺物 (図36)

**自然流路** 第1面 1036・1037・1038 溝の直下で検出した流路である。これも第1面の溝や落ち込みと同一面の可能性が高い。最終幅幅約5～8m、最深部で約0.8mを測る。埋土は肩部の一部に流水性を示す灰色7.5Y6/1粗砂をもつが、全体的には黄灰色2.5Y6/1微砂混シルトである。出土遺物はない。

## 3. 第2面の遺構・遺物 (図37～43)

調査区東半部に堆積する第3層の褐灰色10YR4/1微砂混シルトを掘削すると、最終遺構面が現れる。当初は1条の自然流路と判断して掘削を進めたが、掘削を進めるうちに浅い谷の中で数条の流路が複雑に切り合った自然地形と判明した。微地形的にみても、北西の千里丘陵からの谷筋上に位置することは明らかで、2004(平成16)年に吹田市教育委員会が実施した市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査では、弥生時代から中世にかけての谷や流路群が検出されており、今回の遺構は内容と位置関係からみてその下流域に該当する。その際、弥生時代中期後半から鎌倉時代頃の蛇行する自然流路群が、谷の埋没直前につまかっているが、それほど流水性の高いものではなかったようである。注目すべき成果は、出土した弥生土器のうち東海系(遠江地域)の土器が多く含まれることである。遺物は流路内に限定され、周辺に同時期の集落は確認されていないが、物的交流を物語っている。以上のことから、非常に古い段階から形成された谷と考えられる。今回検出された1045・1046谷、1042・1043自然流路は、同下流域と同じ様相を示しており、非常に興味深い。谷と自然流路の堆積状況は複雑で、数回にわたる切り合い関係を確認した。以下簡単に整理しておく。

谷および自然流路の変遷は、図38に粒度をもとにした土層断面図を掲載した。最上段(最北端)の堆積をみると、調査区北東側は丘陵から派生した開析谷(1045谷)を侵食しながら形成された2条の流路(1042自然流路)が途中でつながり、また同地点でさらに東側から新しいもう1条の流路(1044

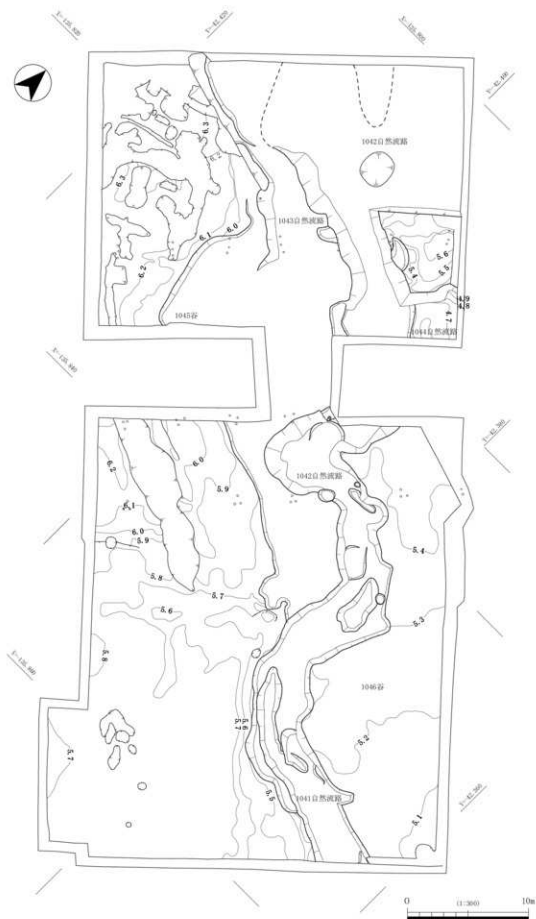


图37 C3・C4地区第2面平面图

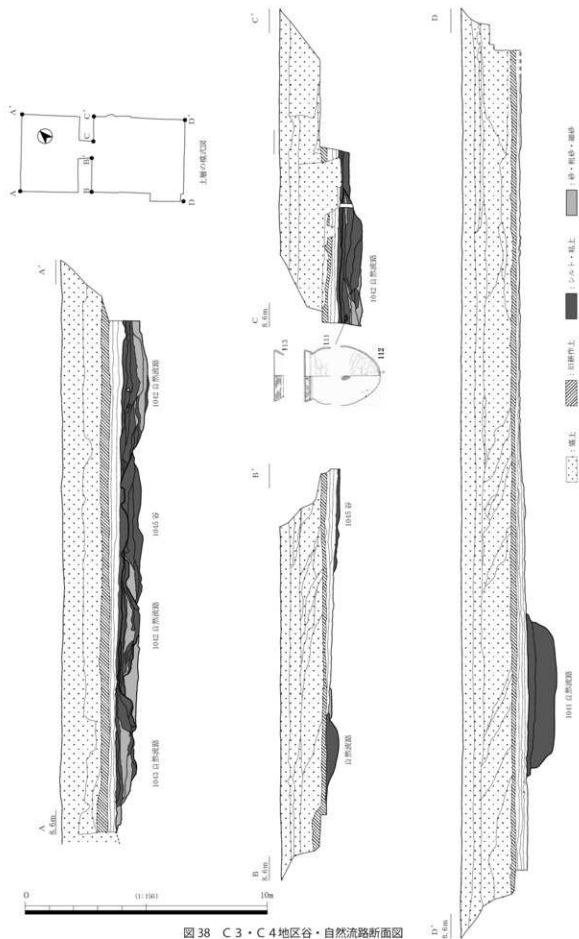


図 38 C3・C4地区谷・自然流路断面図

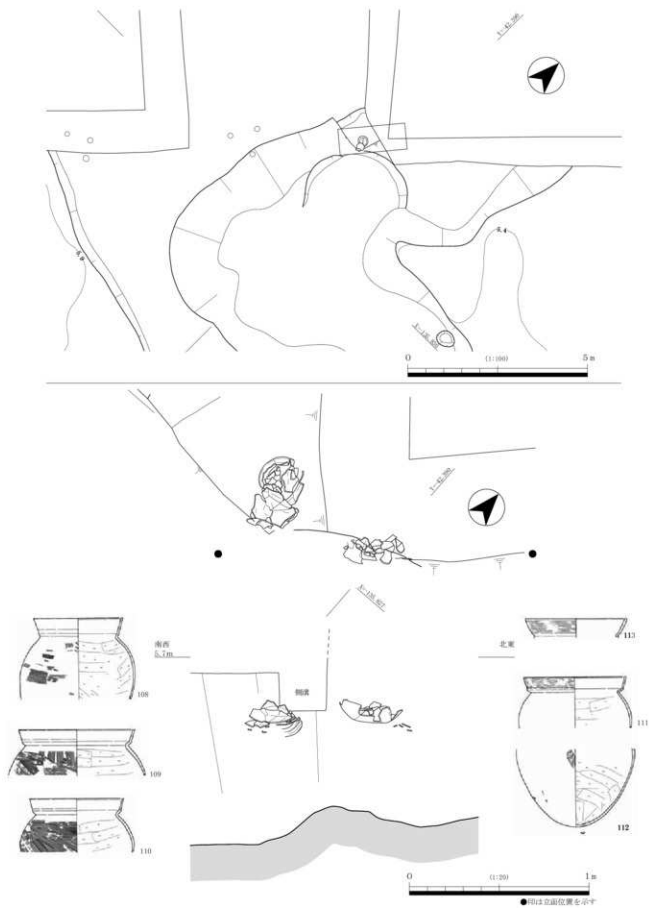


図 39 1042 自然流路遺物出土状況図

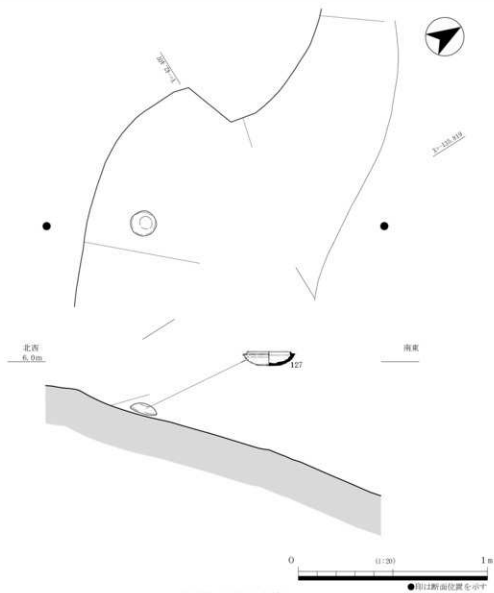
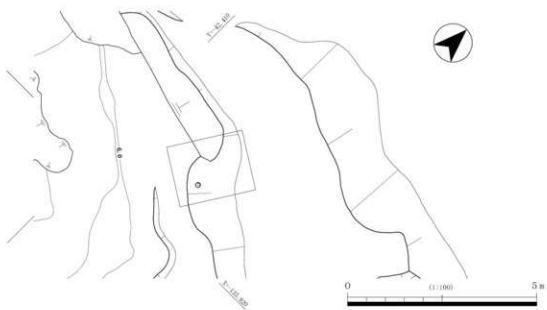


图 40 1043 自然流路遺物出土状況図

自然流路)が比較的流水性を保持しながら埋積した状況がうかがわれる。一方調査区中央から南東側にかけては、谷の西縁辺部に沿って流路幅を狭めながら蛇行する。こちらは滞水性を帯びたシルト・粘土層が埋土となるため、緩やかに埋積していったと推察される。1043自然流路はもっとも後出するものである。1042自然流路がほぼ埋積した段階で形成され、調査区中央付近までは非常に流水性が高いが、そこから南東側にかけては谷の最上層を浅く流れるような状況になり、全体的に広がるようになる。

**1045・1046 谷**(図37・38) 調査区東半部に広がる浅い開析谷の一部で、北東部で20m以上、南西部で5~8m以上の範囲に存在する。谷の埋土から遺物は出土しなかった。

**1042 自然流路**(図37~39) 上述の谷を侵食する流路である。北東側で2筋の流路が合流し、調査区中央辺りで急に失速し、平均5mの幅で蛇行しながら南東方向へ流れ、緩やかな堆積に変化する。土質などから大まかな堆積状況を示すと、次の3層に分けることができる。上層は薄い灰色7.5Y6/1粗砂混シルト(一部のみ)、中層はオリブ黒色7.5Y3/1シルト、青灰色5B5/1粘質シルト、下層は灰色5Y6/1細砂~粗砂である。なお調査区中央より南東部では砂層がなくなり、中層・下層ともに粘質系になる。流路という性格上その堆積層は攪拌を受けるが、出土土器から概ね次のような時期が位置付けられる。上層からは古墳時代後期から飛鳥期の須恵器・土師器が、中層からは布留式土器の甕、最下層の砂層からは弥生土器中期後半~後期の甕などがみつまっている。木製品は出土しなかった。特に布留式土器は、調査区中央の蛇行部分で比較的まとまって出土し(図39)、一括投棄された可能性が高い。器形や技法的な特徴から、山陰系土器と考えられる。以前に、市教委の調査で東海系の弥生土器が確認されていることと合わせて、注目すべきであろう。

**1043 自然流路**(図37・38・40) 調査区北西部で検出した流路で、西側は谷谷面と共有する。幅2~6m、深さ0.5mを測り、埋土中層は粗砂・細砂である。6世紀後半から7世紀代の須恵器・土師器が出土。**自然流路出土遺物**(図41~43) 土師器甕(108~114)・弥生土器壺(115・116)・弥生土器甕(117~119)・同底部(120~124)が出土した。いずれも器面が磨耗する。1041自然流路から116、1042自然流路の黒色粘土層から108~114、下層砂層から115・121~123、最下層から118・120、下流下層から117が出土している。

108~113は外傾する複合口縁をもち、口径が24.6~31.8cmを測るやや大型の甕である。肩部に米粒形列点文をもつ個体(108)もある。いずれも内傾して内側へ肥厚する口縁端部、ごくゆるく屈曲して明確な稜をもたない複合口縁下部を有する。頸部のしまりが強い109~111と、弱い108・113がある。後者の口縁部は比較長く、113では内湾気味である。口縁部外面に浅いハケ状の痕跡が残るのは111・113で、111は特に明瞭である。体部調整はナメハケが優越し、頸部直下はハケを横方向にナゲ消している。内面のヘラケズリは、頸部やや下までで、ヨコ(右)方向を基本とする。

体下部(112)は111と同一個体か。倒卵形で丸底、やや長胴。底部外面には圧痕があり、内面には「指頭圧痕」(拳の痕)が認められる。単純口縁の甕?(114)の口縁部は長く外傾し、端部は面をもって両側に肥厚する。頸部内面は、屈曲部までケズリが施され、稜をもつ。

胎土は長石・石英・金雲母・チャート・黒色粒・赤色粒を含む。黄灰色~黄灰褐色を基本とし、長石が目立つ108・111・112・113と、やや砂粒の少ない109・110、暗灰黄色を呈し、緻密であり砂粒が目立たない114の3種に分けられる。口縁端部の形態は布留式土器の特徴と類似しており、古墳時代前期(布留式期I~II)に位置づけられる(第V章第3節参照)。

壺(115)は口縁部内面に粘土帯の継目が明らかで、成形技法がよく分かる。口縁部の右穴は焼成前

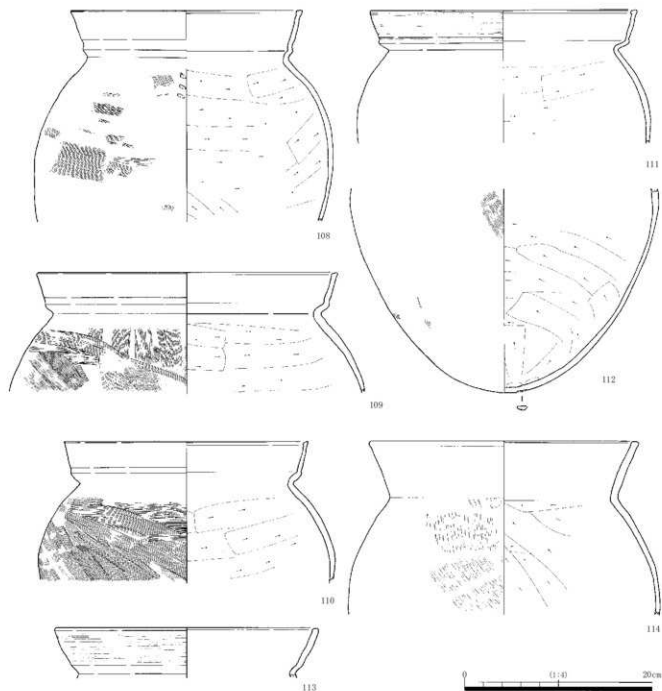


図41 1042自然流路出土遺物

に穿孔後、外面側を広げる。左穴も焼成前につくられるが、非貫通。口縁部の欠けのごく一部が磨耗しており、再利用を示唆する。116は頸部内面に指頭王痕がめぐり、直下に横方向のケズリが入る。

117～124は甕あるいは壺。117は復原口径15.6cm、器高23.2cmの小型品でつくりや胎土が粗い。口縁は短く底部は大きめだが、体部が横に張る。多段成形で、外面下半はケズリ、上半と内面下半はハケで調整される。118は内面の屈曲が強い。119はタタキ後ハケ調整。120はミガキが底部下面におよび、摂津Ⅲ様式末～Ⅳ様式か。121は壺か。外面にタタキ痕が残り、大きく横に広がる。122・123はタタキ甕。122の内面はヨコハケ後ナデ消し。123の体部は横に広がり、内面のハケは蜘蛛の巣状に広がる。124は分厚く胎土が粗い。摂津Ⅰ～Ⅱ様式か。

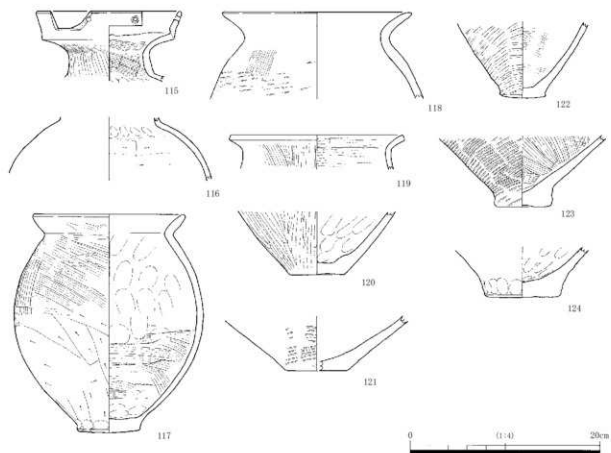


図42 1041・1042 自然流路出土遺物

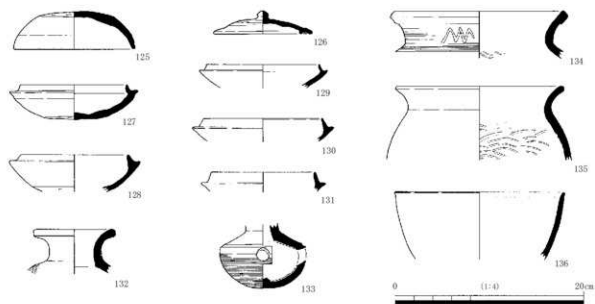


図43 落ち込み群・1042・1043 自然流路出土遺物



120・124 以外はV様式後半～庄内式期に位置づけられる資料であろう。117は形態や調整技法が独特で、V様式から庄内式期にかけての過渡期の資料と考えられる。

自然流路上層や1046 谷から出土した須恵器には、坏（125・127・129～131）・提瓶（132）・甕（133）・甕（134・135）・椀（136）がある。

坏Hのうち、立ち上がりが短い127・129は内面の屈曲が明瞭であるが、128は不明瞭である。131の立ち上がりは長く上方へ伸びており、やや古相を示す。同蓋（125）は、口径12.0cmで丸みを帯び、天井部は不調整の部分を残す。132は提瓶とした。体部の器壁の一方方向が薄く（約4mm）、体部へわずかに屈曲すること、加えて外面のカキメが屈曲に沿うように施されることを根拠とする。器面には自然軸がやや厚めに付着する。甕（133）の肩部には凹線がめぐり、下半はケズリ後カキメ調整。甕（134）はタタキの後、外面カキメ、内面ナデ調整。頸部にはへら記号を有し、焼成は非常に良好である。同135は胎土が粗く、チャートや長石が目立つ。椀（136）は復原口径17.9cmと大型で、深い。

125・127・130・132は黒色粒が目立ち、131は長石の多い粗い胎土。坏はおおよそ6世紀末～7世紀前半（飛鳥I、吹田Ⅲ～Ⅳ期）の様相を示し、甕（134）のへら記号は、吹田Ⅲ期に位置づけられているST38に類例がある。なお椀（136）は平安時代に下る。

#### 4. 包含層出土遺物

弥生土器（図44 - 137～139）・須恵器坏（140・142）・甕（143・144）・須恵質椀（141）・備前播鉢（145）・瓦器椀（146）・伊賀信楽土瓶（147）・煙管吸口（148）を図示した（第1層：139・142・148、第3層：137・138・140・141・143・144、第2面精査時：146・147）。

弥生土器底部（137～139）は胎土粗く、磨耗著しい。139はハケ調整が残る。須恵器坏G（140）は復原口径11.4cm、底部はへら切り後不調整。141は須恵質で、非常に薄い。断面は灰色、器面が浅黄～黄灰色に変色して製塩土器を思わせるが、器形を異にする。胎土に黒色粒を多く含む。甕（143・144）は焼成不良で灰白色。いずれも端部を折り返して丸く肥厚させ、144には擦り消し前の当て具痕が残る。

須恵器は7世紀前半に位置づけられるものと考えられる。他に備前播鉢（145）・瓦器椀（146）・伊賀信楽土瓶の蓋（147）・煙管吸口（148）が出土。145は室町時代か。147は19世紀後半の所産。

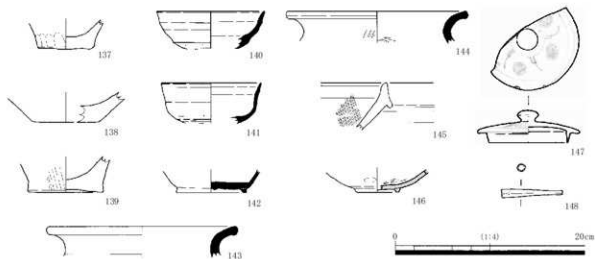


図44 包含層出土遺物

## 第4節 C5・C6地区の調査

### 1. 第1面の遺構・遺物(図45～49・62)

第II層近代耕作土を除去し検出した面である。この地区の堆積状況は、北と南で全く異なる。南側は近代耕作土が水平堆積していたが、北側は操車場建設時の盛土を除去した直後から池の堤体もしくは道路状高まりを思わせる古い人為的な堆積土を検出した。よって、北と南では約1mの比高差がある。大溝・暗渠・野井戸など近世期の耕作に伴う遺構を検出した。

**2006溝(図48)** C5地区側中央をやや西に振りながら南北方向に縦断する大溝で、北側はC4地区へのびる。幅3～4m、深さ約0.6mを測る。埋土は灰色7.5Y6/1中礫～細礫混シルト。C5地区北壁断面の観察と第2面の調査から、中世段階に浅い谷の中を掘削した人為的な溝を初源とし、以降操車場建設直前まで連綿と同じ位置で再掘削されて機能していたことが明らかとなった。溝法面には土を盛り上げ、木杭を打設し護岸を施す。溝の主軸方向から条里地割の影響を受けた耕作用の灌漑水路と考えられる。埋土から幕末～近代の陶磁器・肥前系染付・寛永通寶・櫛などが出土した(図46・62)。

**2003暗渠(図48)** 盛土状に整地された調査区北隅部を2006溝と平行に幅0.5mを掘削し、底に瓦質管を組み合わせて設置した暗渠。2002井戸から水を流す役割が想定される。

**2002井戸(図48)** 2003暗渠の端部に位置し、暗渠に水を供給するものと考えられる。井戸枠などは後世の開発により大きく乱されていたが、井戸瓦片が残っていたためおそらく瓦組の井戸枠が存在したと思われる。

**2005井戸(図45・48)** 2006溝を切る井戸で、上部は操車場時の盛土により破壊されていた。この井戸は径約1.2mの円形で、井戸枠は積み上げ式結構型と瓦組型の複合型である。桶を転用した井戸枠の上部に、完形の井戸瓦を立てて数段円形に積み上げて構築する。瓦組は一段当たり8枚使用していた。調査区際にあたるため、攪乱を受けた掘りかた周辺から多くの肥前系陶磁器・瓦・土製品などが出土した。

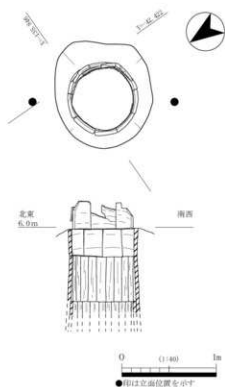


図45 2005井戸平・立面図

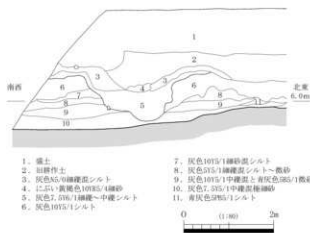


図47 C5地区北壁断面図

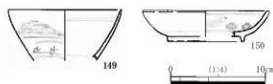


図46 2005井戸・2006溝出土遺物

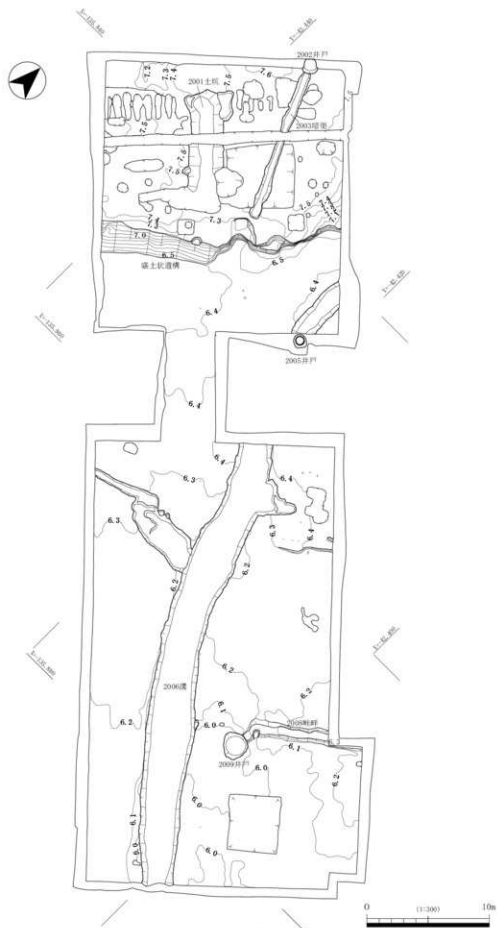


图48 C5·C6地区第1面平面图

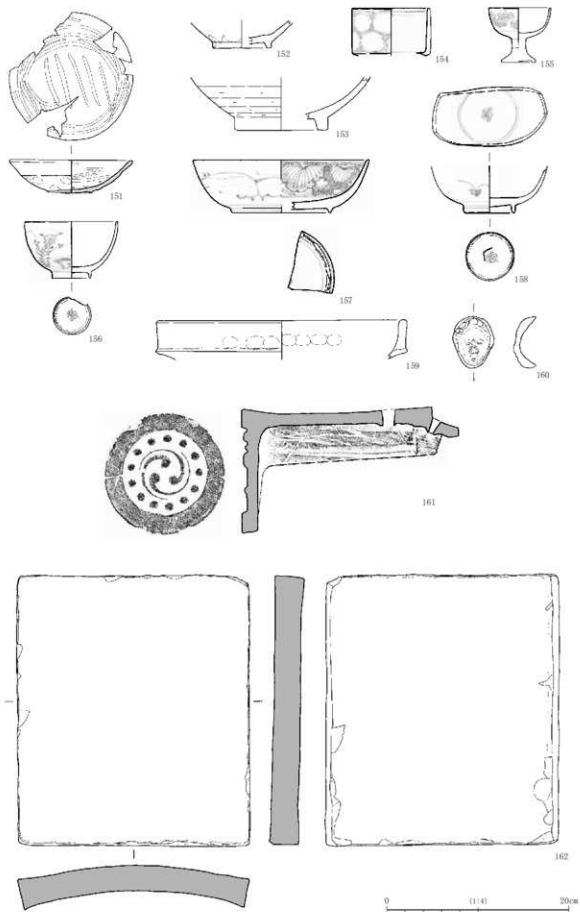


图49 2001土坑・2005井戸出土遺物

2009 井戸 (図 48) 2006 溝に接して構築された径 2 m の円形素掘り井戸である。遺物の出土はなかった。

2001 土坑 (図 48) 調査区北西部の盛土状遺構を深く掘り込んだ土坑状の落ち込みである。肥前系陶磁器 (図 49 - 153) や瓦片が出土した。近世の廃棄土坑と考えられる。

2008 畦畔 (図 48) 調査区南東側でわずかに畦畔状の高まりを検出したが、杭や水口施設は確認できなかった。

盛土状遺構 (図 48) 調査区北西側で、池の堤体状に盛られた特異な造成部分を検出した。上部は平坦なテラス面を呈し、南東側に向かって傾斜する。近世陶磁器・瓦器・土器を多く含んだ灰オリーブ色 7.5Y4/2 礫混シルト、灰黄褐色 10YR6/2 シルトの土で非常に堅固に整地されている。東壁断面のみでピット状の痕跡が認められることから、さらに北東側に遺構面が確認される可能性がある。中世～近世の良好な遺物を含む。

2006 溝出土遺物 (図 46・49・62) 近代染付碗 (149)・肥前系陶磁器・寛永通寶 (257・258)・真鍮製馨 (256) などが出土した。

2005 井戸出土遺物 (図 46・49) 掘りかたより瓦器碗 (151)・白磁碗 (152)・肥前系陶磁器 (154～158)・近代陶磁器 (150)・土師質土器 (159)・土製品 (160)・瓦 (161・162) が出土した。和泉型瓦器碗 (151) は口径 13.4cm、器高 3.8cm を測り、退化した高台をもつ。13 世紀末～14 世紀 (尾上編年Ⅲ-3 期) に比定できる。白磁碗 (152) は底部のみ残り、高台に軸はかからない。

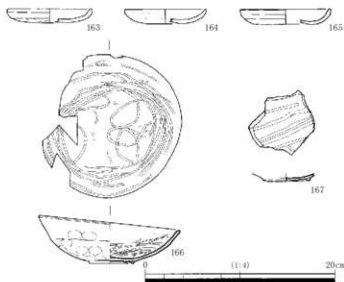


図 51 ピット出土遺物

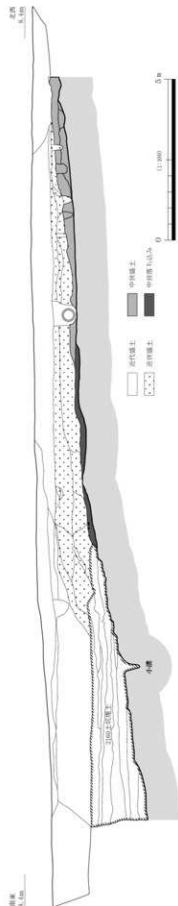


図 50 C6 地区西壁断面模式図

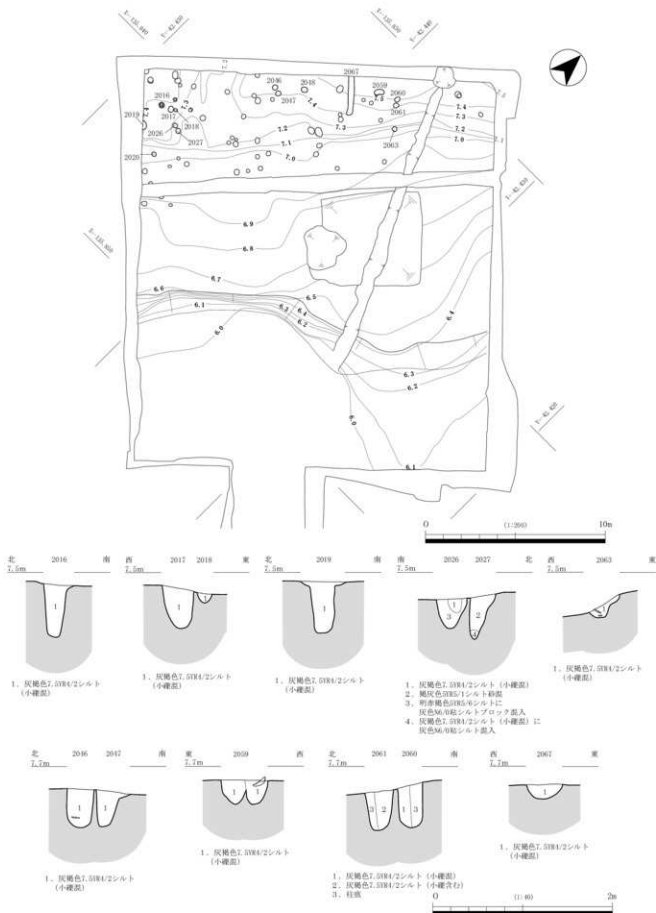


図52 C6地区第2面平・断面図

肥前系陶磁器(154～158)は5点ある。筒形湯飲み碗(154)には崩れた菊花文を配し、仏飯器(155)には草花文を描く。中皿(157)・碗(156・158)は、いずれも高台に「渦福」の銘、158は見込みにコンニャク印判による五弁花を施文する。17世紀末～18世紀中頃に比定できる。159は土師質炮烙である。泥めんこ(160)は、人顔で芥子面タイプ。型作りで、19世紀代と考えられる。左巻三巴文軒丸瓦(161)はほぼ完形で、外区に13個の珠文が巡る。162は井戸瓦である。150は幕末～近代の陶磁器皿である。

## 2. 第2面の遺構・遺物(図50～52)

この面は、調査区北側第1面において検出された堤状の盛土遺構の第1層を除去し検出した面であり、南側の第2層上面では全く遺構が確認できなかったため、同一面かどうか判断が難しい。非常に限定された範囲でピットを60基検出した。中世盛土面をベースとしたものである。

**中世盛土状遺構(図50)** 第1面近世盛土状遺構の基底部にあたる盛土である。地山および一部落ち込み直上に赤褐色2.5YR4/6シルトを整地した面で、もっとも標高が高い部分が7.0～7.5mでややテラス面を形成する。逆に南側は次第に傾斜し、もっとも低くなる部分が6.0mと下がり、約1m以上の比高差をもつ。出土遺物には、土師器・瓦器・土師質土器などがある。

**ピット(図52-2016～2019・2026・2046・2047・2059～2061・2063)** ここでは主要なピットの断面図を掲載した。平面形は円形で、平均径は0.2～0.3m、深さは0.2～0.5mである。明瞭な柱痕跡を確認したものは2060・2061ピットを除いてほとんどない。ピット群から建物配置の復原を試みたが、規則的に並ぶものではなく、柵列などの施設があったと思われる。ピットからは土師器皿・瓦器碗が出土した。

**ピット出土遺物(図51)** 土師器(163～165)と和泉型瓦器碗(166・167)が出土した。163～165はすべて小皿で、口径8.6～9.5cm、器高1.45～1.6cmを測る。166の底部調整は不調整である。163・165は2059ピット、164は2063ピットから出土。166は2059ピット出土で、完形に近い。口径15.0cm、器高4.7cmを測り、やや歪む。見込みに螺旋状暗文が残る。高台は荒い仕上げの貼り付けで、断面三角形を呈す。12世紀末～13世紀初頭(尾上編年Ⅲ-1期)に比定できる。167は底部が残るもので、見込みに簡略された平行線状の暗文がみられる。高台と合わせて考えると、13世紀前半～中頃(尾上編年Ⅲ-3期)としておきたい。

## 3. 第3面の遺構・遺物(図53～62)

この面はC5地区第4層、C6地区第3層を除去した時点で検出した最終面である。検出面の標高は、南東部で5.9m、北西部で7.0mを測り、地山面でも1mの比高差がみられる。近世の削平の結果、中世～近世の遺構が最終面で検出できた。主な遺構は、溝・自然流路・井戸・落ち込み・土坑などである。

**2156溝(図53)** 調査区北隅に位置する。幅0.7m、深さ平均0.3mを測る。調査区外から伸び、中央で径2mの円形に膨らむ。2158井戸を切る。埋土は明黄褐色10YR6/6細砂混粘質土。

**2098溝(図53)** 調査区中央北寄りにて検出した。長さ2.5m、幅0.4～0.6mを測る。埋土は明黄褐色10YR6/6細砂混粘質土である。白磁碗の玉縁状口縁部(図57-192)が出土した。

**2069自然流路(図53)** 調査区中央をほぼ縦断する。幅は最大部分で16m以上、平均7mを測る。埋土は上層が灰色10Y5/1中礫混と青灰色5B5/1微砂、下層が灰色7.5Y5/1中礫混極細砂である。こ

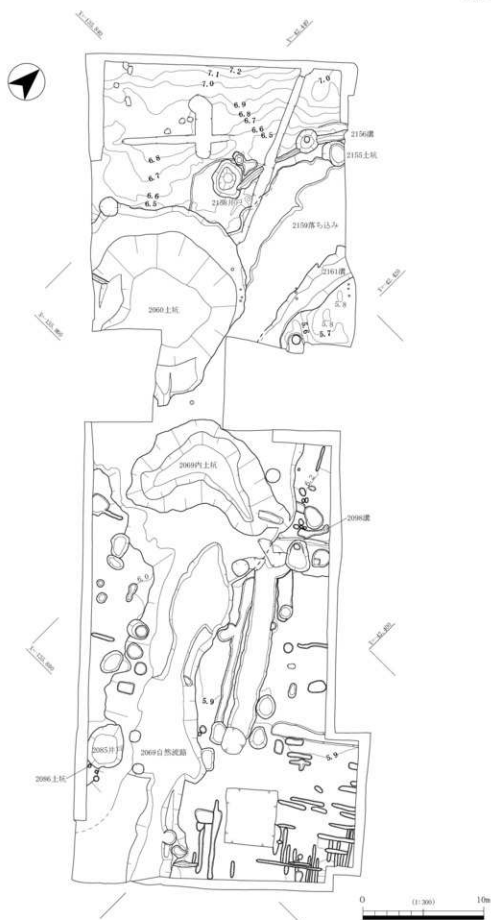


图 53 C5・C6地区第3面平面图



こから土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・貿易陶磁・国産陶磁器(図57)が多数出土しており、中世～近世にかけて機能していた。調査区中央付近で不定形の大型土坑が存在したことから、ある程度埋没し流路幅を狭くした段階で人的に掘り下げられた可能性が高い。また肩口には大小様々な近世井戸が掘られているが、これは自然流路が次第に埋没し流路幅を狭くした最終段階で、その水源を狙ったものと解される。

**2159 落ち込み**(図53) 2069 流路の北側延長部の可能性があり、緩やかに落ち込む。他の遺構よりやや古い時期の土師器や須恵器などを含む。

**2158 井戸**(図54) 1998(平成10)年の試掘調査時に検出、完掘した素掘り井戸である。長径3.2m、短径2.4m、深さ約2mを測る。断面形は楕円状に2段に落ち込み、底幅は0.4mとなる。遺物は試掘時に、瓦器碗・土師器皿・青磁碗・東播系捏鉢・瓦が出土した。12世紀代の井戸と考えられる。

**2085 井戸**(図54) 2069 自然流路の南西部を切って構築された素掘り井戸である。長径4m、短径3m、深さ1.8mを測る。この井戸も2段に狭くなり、最終的に径1.4mを測る。埋土をみると、上層は黄灰色・浅黄色系のシルト、下層は灰色N4/Oの粘土であった。下層より、15世紀～16世紀に比定できる瓦質羽釜・常滑甕などが出土した。

**2060 土坑**(図55) 調査区北側で2159 落ち込みを切って掘られた土坑である。検出した大きさは径15m以上、深さ約2mを測る。法面から約1mは1段テラス面を形成し、底部は平坦である。流れ込む小溝1条を検出しており、大型の水溜・排水施設であった可能性がある。下層は砂質が強い。多量の近世陶磁器(図58・59)のほか、動物骨片(イノシシ)も出土した。

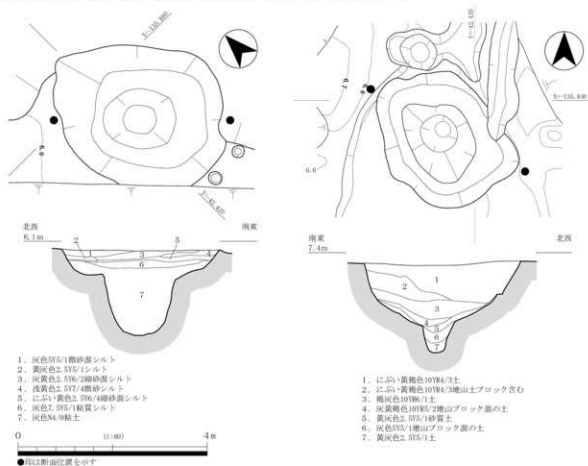


図54 2085井戸(左)・2158井戸(右) 平・断面図

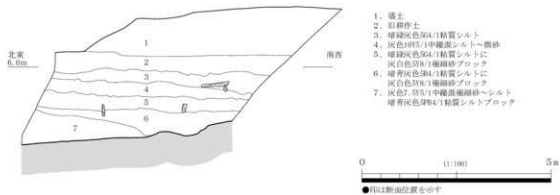


図55 2060土坑平・断面図

2069 内土坑 (図 53) 自然流路を切るように掘られた土坑である。長さ約 13 m、幅約 6 m を測り、形状はやや「く」字状に変形する。多くの近世陶磁器が出土した。18 世紀～19 世紀代に比定できる。

2155 土坑 (図 53) 調査区北隅で検出した井戸状の土坑である。2156 溝と埋土は同一。瓦器碗が出土。

2086 土坑 (図 53) 2085 井戸の横で検出した土坑で、近世の木製櫛出土。

2159 落ち込み出土遺物 (図 56・57) 土師器 (168・169)・瓦器 (171～173・175・176) が出土した。168・169 は 13 世紀代の褐色系大皿である。171～173・175・176 は和泉型瓦器碗である。171 は口径 15.8cm、内外面ミガキが施される。172・173 はそれぞれ口径 14.5cm、14.8cm を測り、外面はユビオサエ後ナデ調整。172 と 173 の底部は 175 に対応すると考えられる。これらは 13 世紀初頭～前半まで (尾上編年Ⅲ-2 期) の時期に比定できる。174 は土師質の壺底部でやや古相を示す。176 の底部もそれとほぼ同時期であろう。

2155 土坑出土遺物 (図 56-170) 瓦器碗の口縁部である。尾上編年Ⅲ-2 期か。

2069 自然流路出土遺物 (図 57) 自然流路からは瓦質土器 (177～184・201)・土師質土器 (186・191・199)・国産中世陶器 (188～190)・輸入陶磁器 (194)・肥前系陶磁器 (195～197)・瓦器 (193) が出土した。瓦質羽釜 (177～184・201) はいわゆる河内・和泉型羽釜で、口縁部の形態から大きく内傾し、外面に明確な段を有すもの (177・179～181・183・184・201) と直立し外面に弱い段を有すもの (182) に分類することができる。前者は 15 世紀代、後者は 15 世紀末～16 世紀頃に比定できる。搦鉢 (198) は、口縁端部の直立があまり明瞭ではない。15 世紀代に位置付けられよう。土師質土器には皿 (191)・羽釜 (186)・炮烙 (199) がある。羽釜は直立した口縁部をもち、鈿部は簡略化する。16 世紀に比定できる。炮烙は口縁部が直立し、外面を櫛状工具で掻き取った跡がみられることから、17 世紀後半 (難波・積山編年 C 類、積山 1999) に比定できよう。備前搦鉢 (188～190) は、口縁部が拡張気味のもの (188)、上方へのび器壁が厚くなるもの (189)、板状に伸びて外側に凹線をもつもの (190) の 3 タイプが一緒に出土する。13 世紀後半～16 世紀。土師質小皿 (191) は褐色系で、口縁断面が「S」字状をなす。15 世紀代。白磁碗 (194) は、明代福建省付近の産である可能性が高い。底部外面に「上 廿 内」と読める墨書がある。14 世紀末～15 世紀前半の所産。195・196 は唐津皿と碗、197 は京焼系碗で、全て肥前系で包括できる。17 世紀後半～末頃。高台が退化した 14 世紀後半 (尾上編年Ⅳ-2 期) の瓦器碗 (193) も出土した。

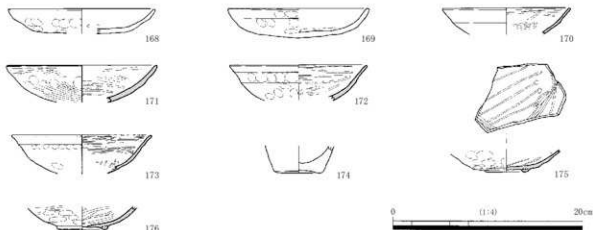


図 56 2159 落ち込み・2155 土坑出土遺物

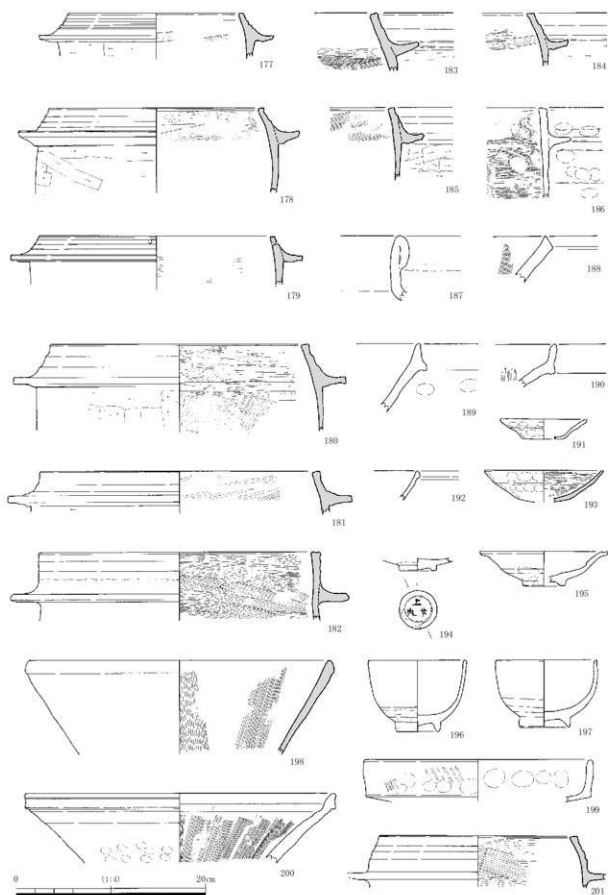


図57 第3面遺構出土遺物

2098 溝出土遺物 (図57-192) 玉縁タイプの口縁部をもつ白磁碗で、12世紀代(横田・森田編年B類、中世土器研究会 1995)。

2085 井戸出土遺物 (図57-185・187) 185は瓦質羽釜、187は常滑壺で直立した玉縁の口縁部をもつ。

2061 溝出土遺物 (図57-200) 口径16.0cmの丹波系播鉢で、口縁部は断面三角形を呈す。17世紀前半～18世紀前半(長谷川編年、長谷川1988)に比定できる。

2086 土坑出土遺物 (図62-255) ツゲ製の漆塗木櫛である。背と両面に赤漆の文様をもつ。

2060 土坑出土遺物 (図58) 瓦器(202)・肥前系陶磁器(204・206～210)・国産陶器(205・211)が出土した。202は口径12.2cmで、炭素吸着が不良である。204は外面青磁釉を施し、見込みにコンニャク印判の五弁花文を染付する。208は簡略された雨降り文を染付し、底裏に「大明年製」の銘をもつ小碗である。209も底部外面に「大明年製」の銘がある。コンニャク印判には、見込みの五弁花文(207)・丸文(206)・笹文(210)がある。見込み蛇の目軸刺ぎは210のみ。これらはいわゆる「くらわんか茶碗」と呼ばれ、18世紀代の所産。備前播鉢(205)は、口縁端部が上方に伸び始めるもので、15世紀代。203は青磁碗である。211は丹波系陶器裏である。

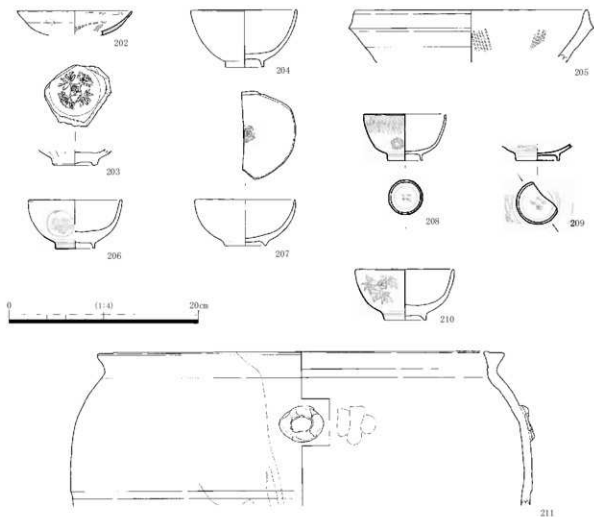


図58 2060土坑出土遺物

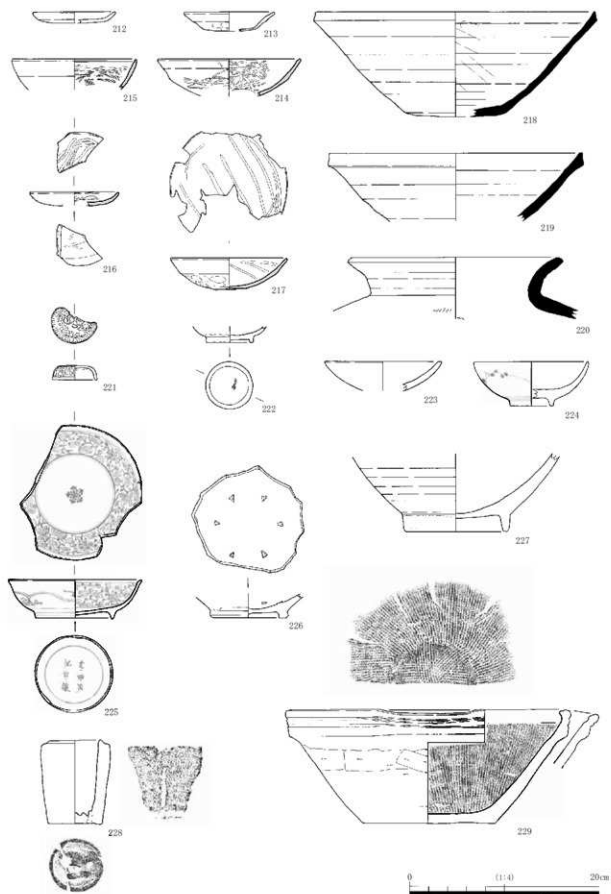


图 59 近世盛土出土遺物 (1)

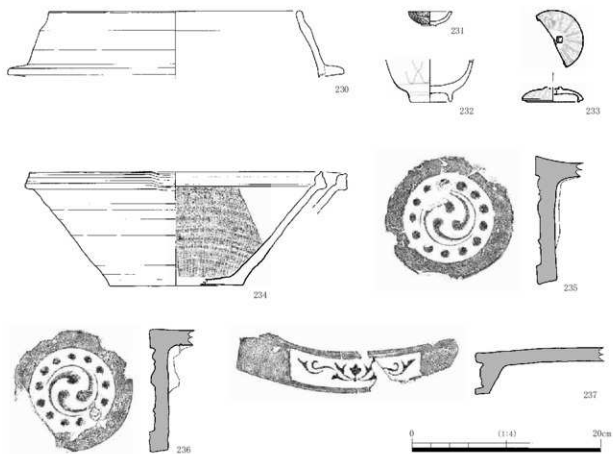


图 60 近世盛土出土遺物 (2)

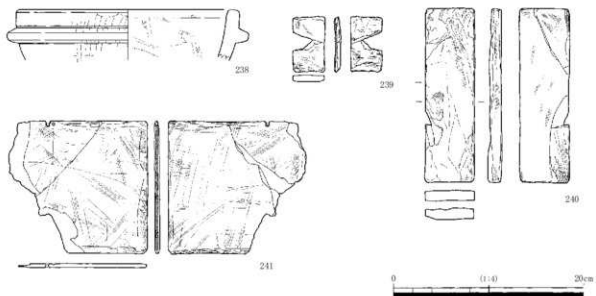


图 61 石製品

## 4. 盛土・包含層出土遺物

**近世盛土出土遺物** (図 59・60) 近世盛土からは土師質土器 (212・213・228・230)・瓦器 (214～217)・輸入陶磁器 (221・223)・東播系須恵器 (218～220)・国産陶器 (229)・肥前系陶磁器 (224～227) などが出土した。土師質土器には皿と焼塩壺がある。212・213 は皿で、213 は口縁部断面「S」字状を呈す。15 世紀か。228 は焼塩壺で、印籠型の身側で外面には刻印はみられない。布を巻いた芯に粘土板を巻きつけて、最後に底部に粘土を詰め込んだ跡がみえる。17 世紀後半～18 世紀中頃に比定できる。230 は羽釜で口縁直立気味のもの。13 世紀代か。瓦器 (214・215・217) は 3 点図化しているが、明確な時期差が認められる。214 は口径 15.0cm を測り、外面にも暗文が残るもので、13 世紀代 (尾上編年Ⅲ-2・3 期) に位置付けられるか。217 は口径 12.3cm、器高 3.4cm で、簡略化された高台を貼り付け、見込みに平行線状暗文を施す。215 は炭素吸着が不良で、口縁端部内側の沈線より桶型と考えられる。2 点とも 13 世紀中頃～後半 (尾上編年Ⅳ-2 期) に比定できる。216 は口径 10cm を測る小皿で、14 世紀前半以降 (尾上編年Ⅳ-4 期) の所産。218・219 は片口鉢と考えられ、口縁端部に垂直な面をもつ。220 は 12 世紀末～13 世紀初頭 (森田編年Ⅱ-2 段階) の甕。輸入陶磁器 (221・223) はともに青磁で、221 は合子の蓋、223 は皿か。222 は京焼系陶器碗で高台を除いて淡黄色の釉がかかる。底裏に「清水」の印を押捺する。17 世紀後半。肥前系陶磁器 (224～227・231～233) は、染付碗 (224・232・233) と唐津鉢 (226・227) の 2 種。224 は外面草花文を染付し、内面蛇の目軸刺ぎ。232 は一重網目文を外面に配す。17 世紀後半。225 は染付皿で、底裏に「大明成化年製」の銘がある。231 は外面貝殻状の紅皿、233 は蓋物の蓋で矢羽根文を染付。226 は見込みに積み重ね焼きの胎目が 6ヶ所残る。近世備前焼鉢 (229) は、斜め方向のスリメがなくなって放射状のものになり、スリメが完全に詰まる。17 世紀後半に比定できる。234 は丹波系播鉢か。口縁端部は三角形を呈し、口縁内面に凹線を配す。17 世紀代の所産。235～237 は瓦である。235・236 は左巻三巴文軒丸瓦で、瓦当径は 13.5～14.0cm。237 は均整唐草文軒平瓦である。

**中世盛土出土遺物** (図 62) 土師器皿 (242～244) は 3 点図化した。243 は底部調整に糸切り痕が残る。瓦器碗 (245～252) は整地層出土ということもあり、比較的状態の良い個体が多い。249 を除く 7 点は口径 14.0～15.0cm、器高 4.3cm 前後を測り、貼り付け高台は断面台形を呈す。見込みに平行線状の暗文が残る。13 世紀中頃 (尾上編年Ⅲ-3、Ⅳ-1 期) であろうか。249 は口径 14.5cm、器高 4.5cm を測る。高台は断面やや三角形を呈する。12 世紀末～13 世紀初頭 (尾上編年Ⅲ-1 期) の時期と考えられる。253・254 は土師質羽釜である。口縁部の形状からみて 13 世紀～14 世紀頃か。かなり時期差がある。

**石製品** (図 61) そのほか数点の石製品 (238～241) が出土した。238 は 2160 流路、239 は 2060 流路、240 は近世盛土、241 は側溝出土。

滑石製石鍋 (238) の外面には縦方向の工具痕、突帯の上下には、突帯を削り出した際の刻みが条線状となって確認できる。突帯以下に煤が付着し、破片の下端は平滑で再利用後の破片と考えられる。12 世紀後半 (木戸分類Ⅲ-a-2、中世土器研究会 1995) の資料であろう。241 は粘板岩製の石盤。厚さ 0.3～0.5cm で平滑。木枠をつけるため側縁を縁取るように厚みを減じ、上辺には破損した円孔と、穿孔途中の痕跡が認められる。明治期に筆記具(ノート)として用いられたものである。239 は本山砥石、240 はやや質は落ちるものの、緻密な石質で仕上げ用の砥石と考えられる。



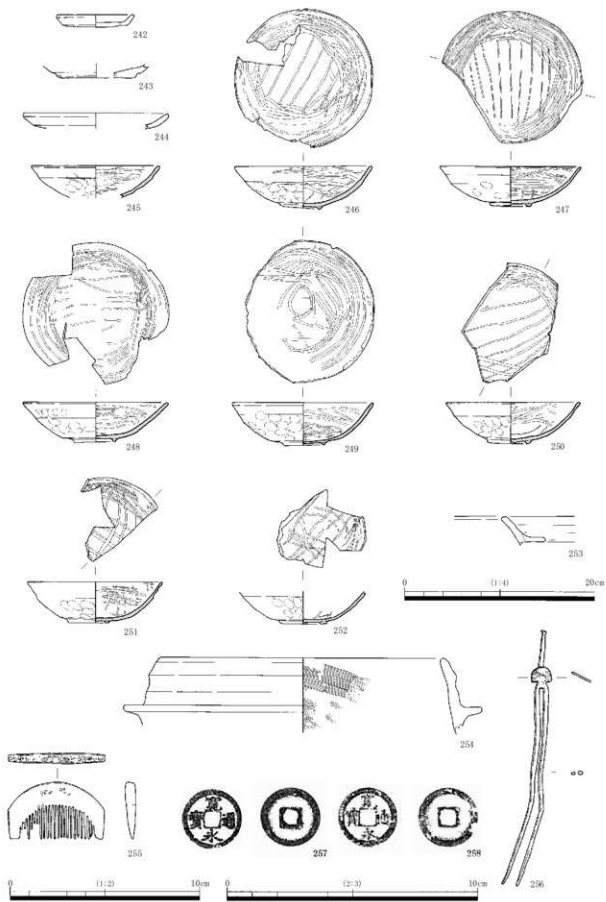


图 62 中世盛土・2006 溝・2086 土坑出土遺物

## 第IV章 自然科学的分析

### 第1節 自然科学的分析の目的

今回の分析は、C1・C2地区の群集土坑の埋土分析をバリノ・サーヴェイ株式会社、C3・C4地区の自然流路の花粉・珪藻分析を株式会社古環境研究所に委託して実施したものである。群集土坑については、考古学的に観察した埋土の埋没過程を自然科学的に分析し、第III章で報告した成果をもとに土坑埋土の堆積状況を科学的に明らかにしようとした。花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されるもので、もう一方の珪藻分析は、海水域や淡水域において、湿った土壌、岩石、コケの表面などに生息する珪藻の各分類群が、塩分濃度・酸性度・流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所や組成から当時の堆積環境を反映することから、古環境復元の指標として利用されている。

### 第2節 吹田操車場遺跡で検出された群集土坑の埋没過程（引用）

本分析では、C1・C2地区で検出された群集土坑の埋没過程について、土坑埋土の軟X線写真観察による層相観察から検討を行う。

#### 1. 試料

層相観察を実施した土坑は、第III章で混合土と判断した292土坑・304土坑、自然堆積土→混合土と判断した337土坑・425土坑の4基である。このうち、337土坑埋土サンプルについては、1カットで全試料が取りまきらず、上下2回に分けて撮影を実施した。その他の試料については、1カットで撮影を行った。撮影点数は、合計で5点である。

#### 2. 分析方法

不攪乱堆積物試料については、厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置し、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定する。試料調整および撮影は、齊藤1993、公文・立石編1998を参考とする。軟X線写真は、スキャナーでコンピューター上に取り込み、コントラストや明るさなどの画質の調整を行う。なお、上下2カット分撮影した337土坑埋土の軟X線写真については、コンピューター上に取り込んだ画像を1枚分に接合している。

#### 3. 結果

##### (1) 記載

軟X線写真の記載は、堆積物について宮田ほか1990、土壌について佐藤1990a・b、森ほか1992、成岡1993を参考とする。

試料写真とその軟X線写真および、堆積構造のトレース図を図63に示す。

試料の全体的な特徴としては、植物や土壌動物による生物擾乱の影響を大きく受けていることが指摘

される。生物擾乱については、植物の根に由来する幅 0.5～2mm 前後の細長く連続する暗色の直線状の構造や、土壌生物起源と推測される幅 3～6mm 前後の管状をなし緩やかに蛇行し連続する生痕が顕著に観察される。各試料に認められるジグザク状の黒い線として表現される亀裂のすべては、試料採取時ないし調整時に形成されたものである。

軟X線写真の層相と試料の肉眼観察から、土坑埋土については、層相A～Eまでに分類される。

## (2) 層相

**層相A：**明黄褐色～オリーブ灰色を呈し、極粗粒砂～細礫混じりの砂質シルト。軟X線写真では、相対的に密度が高い明色部と密度の低い暗色部が、直径 5～15mm 程度の亜角塊状にまだら状に入り交じった層相を示す。土坑埋土の上中部にかけて存在する。

**層相B：**オリーブ灰色を呈し、極細粒砂～粗粒砂を多く含むシルト質砂～砂質シルト。層内には斜交葉理が存在する。軟X線写真では比較的に明瞭に葉理が観察されるが、試料の肉眼観察では、全体的に不明瞭でその存在を確認することが難しい。

**層相C：**灰色を呈し、極細粒砂～細礫が混じる砂質粘土質シルト～砂質シルト。層内には不明瞭でかつ、連続性が不良な葉理が認められる。本相には、層厚 5mm 前後の層相Bの薄層が挟在する場合がある。軟X線写真では相対的に密度が低く、層相が壁状をなす。土坑埋土の底部に存在することが多い。

**層相D：**明黄褐色～オリーブ灰色を呈し、極粗粒砂～細礫混じりの砂質シルト。層相は軟X線写真、試料の肉眼観察ともに塊状を呈す。軟X線写真では、不明瞭ながら水平方向の葉理状の構造が認められる。本相は、全体的に均質な雰囲気を示す。土坑埋土の最上部に存在することが多い。

**層相E：**明黄褐色～オリーブ灰色を呈す砂質シルト。層内には不明瞭な平行葉理が観察される。軟X線写真では角塊状の構造が観察される。

## (3) 土坑埋土

以下に分析を実施した土坑埋土の堆積層累重の特徴について示す。

**292 土坑** I～IV層の単層に区分される。各層についてはI層が層相D、II層が層相A、III層が層相B、IV層が層相Eからなる。III層の最下部には、明瞭な葉理が観察される部分が存在する。III層最上部には、褐色を呈する土壌物質が挟在する領域が認められる。

**304 土坑** I～V層の単層に区分される。各層についてはI層が層相D、II～IV層が層相B、V層が層相Eからなる。層相BからなるII～III層では、斜交する葉理の傾斜が下部から上部へ向かって次第に緩やかとなる。IV層は、褐色を呈し相対的に土壌物質を多く含む。

**337 土坑** I～IX層の単層に区分される。各層についてはI層が層相D、II層が層相A、III層が層相B、IV層が層相A、V層が層相C、VI層が層相A、VII層が層相Bの薄層が挟在する層相C、VIII層が層相C、IX層が層相Eからなる。III層では、褐色を呈し土壌物質を多く含む。VI・VII層では、試料の肉眼観察において、直径 10～20mm 前後の偽礫（ブロック土）を多く含む。偽礫は、遺構基盤層および古土壌に由来する物質からなる。ただし、軟X線写真では、偽礫の存在がはっきりと認定されない。VIII層では、土壌物質を多く含む葉理が形成される。

**425 土坑** I～IV層の単層に区分される。各層についてはI層が層相B、II層が層相A、III層が層相Bの薄層が挟在する層相C、IV層が層相Eからなる。III層では、葉理の挟在が明瞭である。また、炭化

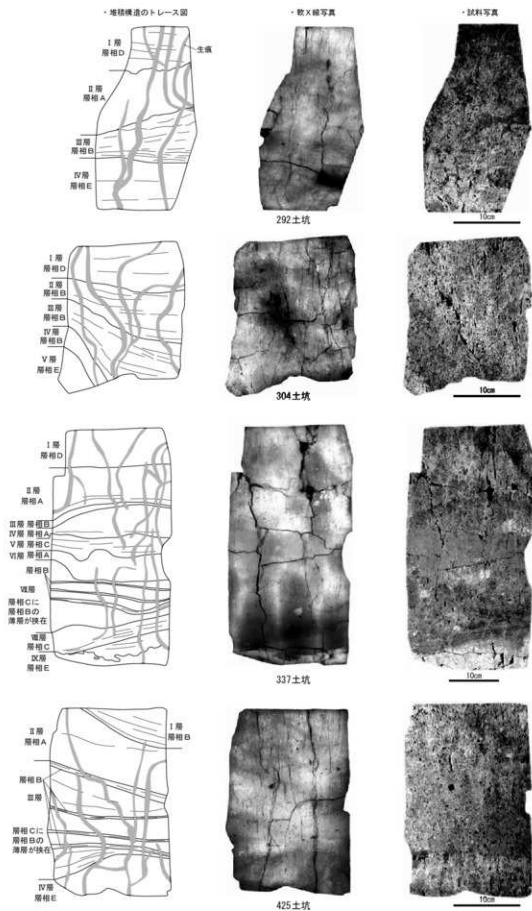


図63 292・304・337・425土坑埋土の軟X線写真と堆積構造のトレース図

物片の散在も確認される。

#### 4. 考察

##### (1) 層相の解釈

土坑埋土の層相については、層相A～Eの5つに区分される。観察を行った土坑は、遺構検出面において密集した分布を示す。土坑は、亜円、楕円、垂角状の平面形をもつ。これらの土坑の規模は、直径ないし長径が70～120cm、深さ20～40cm前後の規模を中心とする。

発掘調査結果から、層相Eについては遺構基盤層をなす地山層に相当することが判明している。遺構基盤層については、深掘および層序記載やそれに関する分析を実施していないために不明な点が多いが、調査区周囲の排水溝断面の観察によると、河川の氾濫原堆積物と判断される。従って、層相E内に認められる葉理は、基盤層の累重時に形成された初生の堆積構造と解釈される。また、軟X線写真で認められた角塊状の層相は、これまでの土壌物理学の成果をふまえると(石渡1999)、堆積後の土壌化作用によって生じたものと思われる。

層相Eの上位に累重する層相A～Dは、遺構埋土に相当する。上記した埋土の層相記載と累重過程から、層相Cは、土坑内の滞水に伴って形成されたと判断される。層相Bは、土坑周囲から内部への流れ込みによって形成されたと考えられる。層相Aについては、堆積層中に葉理の挟在が認められず、自然営力下で累重した層相B、Cと異なった堆積環境下で形成されたことが示唆される。試料写真との対応関係をみると、層相Aは偽礫を多く含むと推測される堆積層と対応していることが確認される。このことから、層相Aで認められた明色と暗色部からなるまだら状の層相は、偽礫の集合体を示すものと解釈される。ただし、軟X線写真では、埋土に含まれる偽礫の存在をはっきりと認定することが難しい。なお、層相Aに含まれる偽礫は、遺構基盤層で構成されており、土坑などの掘削時に生じた排土に由来すると判断される。全体的に均質な層相を示す層相Dは、埋土の最上部に存在することが多い。埋土最上部に位置すること、均質化されたその土壌構造から、本相については、土坑埋没後に土壌化を受けて形成された層相と推定される。

##### (2) 土坑の埋没環境

軟X線写真の観察から、埋土観察を試みた土坑埋土の底部には、周囲からの流れ込みによって形成された層相Bや、滞水を示唆する層相C、およびそれに挟在する層相Bが存在することが確認される。このような層相の累重状況から、観察を行ったすべての土坑では、掘削後直ちに排土によって埋め戻されることなく、自然営力によって底部が滞水したり、周囲から地表面物質が流入するような開放常態がある期間維持されたことが示唆される。これら土坑底部の堆積層では、偽礫も多く含まれている。このことから、土坑の周囲には、掘削土が存在していたことが推定される。

土坑埋土の中上部では、掘削土の再堆積に由来する層相Aが分布する。本相は、周囲からの流れ込みなどの自然の堆積営力を示唆するような堆積構造が認められない。層相Aは偽礫を主体する堆積物であることが肉眼および軟X線写真観察から示唆される。上記をふまえると、層相Aは人為的営力による埋め戻し行為によって形成されたものと解釈される。土坑埋土の最上部には、土壌化の影響が認められる層相Dが存在する。このことから、土坑埋没後には、調査区での土地利用が一定期間放棄され、土壌発達が行進する時期が存在したことがうかがえる。

以上のことから、観察を実施した土坑では、土坑掘削後直ちに埋め戻されることなく、ある程度の期間、開放常態が維持され、雨水や地下水による滞水や周囲からの流れ込みによって埋没が進行したことが確認される。土坑内の帯水層（層相C）や流れ込み層（層相B）では、土壌A層に由来する腐植に由来する褐色の物質の挟在が確認される。しかしながら、土坑埋土では、土壌A層に由来する物質の挟在が全体的に少なく、その下位の土壌B～C層の遺構基盤層に由来する堆積物が主体をなす。土坑が密集した分布を示すことと、土坑埋土における土壌A層物質の挟在の少なさから、当時の地表は、裸地が多く広がるような状況であったものと認識される。このことから、土坑底部に存在する滞水層や流れ込み層は、裸地となった地表面や周囲に散在する掘削土が降雨時などに洗い流され、局地的な凹地となる土坑へ集積した堆積物を主体としているものと考えられる。

土坑埋土の上中部については、人為的な埋め戻し行為の存在が認識される。このことから、土坑については、開放常態で放置された後に、人間によって埋め戻される段階があったことが認識される。今回分析を実施した土坑埋土では、偽礫を主体とする埋土がほとんど存在しない。しかし、調査区内の群集土坑では、土坑掘削の排土からなる遺構基盤層や古土壌の粗大な偽礫の集合体からなる埋土を主体とする土坑も確認されている。土坑埋土の層相については、土坑の掘削から埋没に至る人間活動の脈絡において、その累重過程や分布関係を検討していくことが課題と思われる。

### （3）遺構基盤層について

吹田操車場遺跡の遺構検出面基盤層については、層序やその年代を示す資料に乏しい状況である。遺構基盤層の地質を知る手がかりとしては、2000・2001年度調査のC地区において遺構基盤層を侵食する深さ1.3m前後の開析谷底部より、K-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）が検出された成果が目玉される（阪田・河端・黒須編2001；川崎地質2001）。このC地区の成果からは、吹田操車場遺跡の遺構基盤層がK-Ahの噴出年代である7300年前以前（町田・新井2003）であることが確認される。本遺跡の南西約1.5kmに位置する千里丘陵裾部に分布する周囲の氾濫原より一段高まった地形的平坦部に位置する片山荒池遺跡では、遺構検出面をなす古墳時代の包含層直下に存在し、調査区のほぼ全域に分布する有機質粘土において20380 ± 80 yrs BP (Cal BC22700-2210:2σ)の年代値が得られている（山元編2006；パレオ・ラボ2006）。片山荒池遺跡は、千里丘陵裾部に分布する周囲の氾濫原より一段高まった地形的平坦部に立地している。

なお、空中写真判読では、今回の調査区のC1～C6地区が、丘陵の裾から岸部の集落に向かって南東方向に伸びる舌状の微高地上に立地していることが読みとれる。また、この舌状の微高地の周囲には、開析谷が形成されていることも確認される。調査区が立地する本地形面については、その比高から、片山荒池遺跡が立地する地形面に対比される可能性がある。舌状の微高地上では、吹田操車場遺跡の試掘No.36（今回のC5地区に相当）において、旧石器時代のサヌカイトの石器や剥片が検出されていることにも注目される。

上記のような発掘調査結果とそれに伴う自然科学分析結果、空中写真判読をふまえると、今回の調査区が立地する舌状の微高地は、最終氷期末期に形成された低位段丘構成層からなることが推測される。空中写真判読からは、吹田操車場遺跡が、今回の調査区が立地する舌状微高地と、その周囲に広がる一段低い地形面が分布する領域に立地している状況が推測される。上述した2000・2001年度調査区などが立地する舌状微高地より一段低い地形面については、C地区のテフラ分析結果以外に地質学的情報

が得られておらず、その年代に関して現状で不明な点が多い。

以上の地形学的推測とこれまでの発掘結果から、群集土坑が検出された本調査区や片山荒池遺跡については、低位段丘上に立地する可能性が示唆される。今回の分析から得られた推測については、本遺跡や周囲の遺跡での調査区基盤層の詳細な層序記載や年代根拠を今後得ながらさらに検証を重ね、遺跡での人間活動や土地利用に関わる古地形や景観の復元に繋げていくことが課題と認識される。

#### 参考・引用文献

- 石渡輝夫 1999 「農地の造成・整備による土壌の物理性と微細構造の変化」『土壌の物理性』81 61-69p
- 川崎地質 2001 「火山灰分析」『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』（財）大阪府文化財調査研究センター 110-116p
- 公文富士夫・立石雅昭編 1998 「碎屑物の研究法」地学団体研究会 399p
- 斉藤文紀 1993 「軟X線写真観察法」『第四紀試料分析法』2 研究対象分析法 日本第四紀学会編 東京大学出版会 103-108p
- 阪田育功・河端 智・黒須重希子編 2001 「吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点」（財）大阪府文化財調査研究センター 144p
- 佐藤幸一 1990a 「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60 25-30p
- 佐藤幸一 1990b 「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60 287-292p
- 成岡 市 1993 「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壤肥料科学雑誌』64-1 90-97p
- パレオ・ラボ 2001 「放射性炭素年代測定」『片山荒池遺跡』（財）大阪府文化財センター 31-33p
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新版 火山灰アトラス』東京大学出版会 336p
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷 淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990 「淡水生デルタの形成過程—琵琶湖愛知川河口部を例として—」『地質学雑誌』96 839-858p
- 森也寸志・滋賀拱子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992 「土地利用による土壌間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として—」『土壌の物理性』66 19-27p
- 山元 建編 2006 『片山荒池遺跡』（財）大阪府文化財センター 48p

### 第3節 C3・C4地区の花粉・珪藻分析（引用）

#### 1. 試料

分析試料は、古墳時代後期から飛鳥時代のC3地区1046谷第1層から採取された試料A（オリーブ黒色細砂混シルト（ラミナあり））1点と、弥生時代から古墳時代前期のC4地区1042自然流路第4層から採取された試料B（暗青灰色粘質シルト）1点の計2点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

#### 2. 分析方法

（1）花粉分析 花粉の分離抽出は、中村1973の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、鳥倉1973および中村1980をアトラスとして、所有の現生標本の対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村1974、1977を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(2) 珪藻分析 以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行う。計数は珪藻被設が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行う。

### 3. 花粉分析結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉12、シダ植物孢子2形態の計34である。

#### (2) 花粉群集の特徴

- 1) C3地区1046谷第1層（古墳時代後期から飛鳥時代、試料A）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属を主に、クリ、モミ属、スギ、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、マツ属複雑管束亜属、シイ属などが低率に出現する。

- 2) C4地区1042自然流路第4層（弥生時代から古墳時代前期、試料B）

樹木花粉が優占し、コナラ属コナラ亜属が高率に出現する。コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属などが伴われる。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属、ガマ属-ミクリ属、樹木・草本花粉のママ科などが低率に出現する。わずかにササゲ属が出現する。



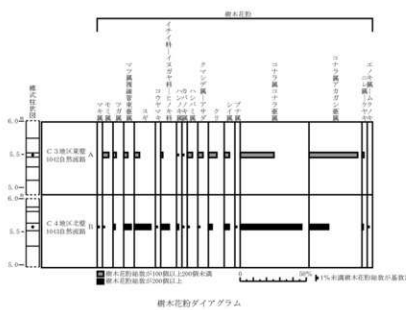
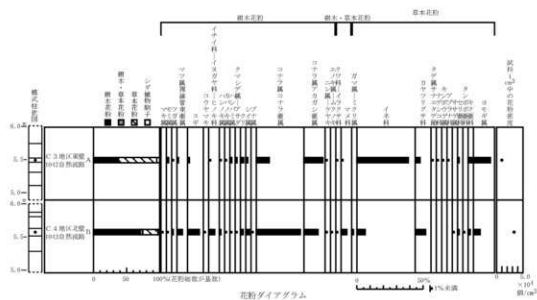
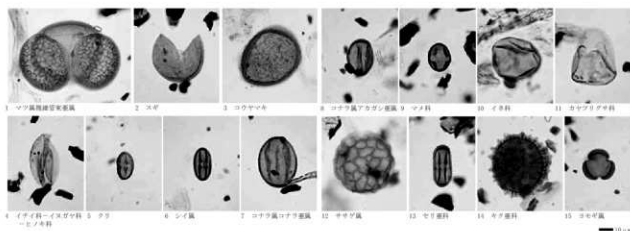


図 64 花粉ダイアグラム

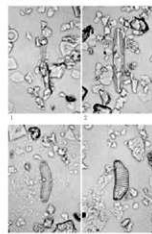
## 花粉分析結果

分類群	学名	和名	C 3 地区(106)谷東壒		C 4 地区(104)自然道路	
			A	B	A	B
Arboreal pollen		樹木花粉				
Podocarpus		ツルギ属		1		
Alder		セリ属	4	1		
Fagus		ブナ属	2	2		
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属短葉亜属	4	18		
Cryptomeria japonica		スギ	5	20		
Sciadopitys verticillata		コウヤマキ	1	1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae Cupressaceae		イチイ科-イチイ科/サトウハチロー科-ヒノキ科	2	20		
Alnus		ハンノキ属	1	5		
Betula		カハノキ属	1	1		
Corylus		ハンノキ属	5	1		
Corylus-Ostrya japonica		クマノシガメ-アザダ	5	1		
Catanpa ornata		ナリ	8	9		
Catanopsis		シイ属	5	12		
Fagus		ブナ属		1		
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	32	144		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アカシハ亜属	46	46		
Ulmus-Zelkova serrata		ユリ属-ウケサキ	2	3		
Citrus subgenus aurantium		ミカン属-ミカン科		2		
Arboreal + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	1		
Urticaceae		イラクサ科	2	12		
Nonarboreal pollen		草本花粉				
Trifolium sparganum		クマノシガメ-ミナモト属		6		
Oxalis		イネ科	126	27		
Cyperaceae		カヤツリグサ科	12	24		
Polygonum ssp. Persicaria		タデ属オキナタデ属	1			
Caryophyllaceae		ナズビ科	1			
Ranunculaceae		キンポウゲ属	1			
Cruciferae		アブラナ科	1			
Faba		ナメタ豆属		1		
Asteraceae		セリ属科	4	5		
Lactucaceae		タンポポ科		1		
Asteraceae		キク科	9	7		
Compositae		キク科	42	22		
Fern spore		シダ植物孢子				
Mollusc type spore		哺乳動物糞	16	10		
Trilete type spore		三葉形孢子	5	1		
Arboreal pollen		樹木花粉	125	369		
Arboreal + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	3	20		
Nonarboreal pollen		草本花粉	197	162		
Fungal pollen		菌類孢子	355	432		
Pollen frequency of 1cm <sup>2</sup>		試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	9.9	2.3		
			$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$		
Unknown pollen		未同定花粉	17	12		
Fern spore		シダ植物孢子	15	11		
Microfossil spore		微生物	(-)	(-)		
Diatom remains		珩孔の遺体	(-)	(-)		
Charcoal fragments		炭素質植物	(-)	(-)		

## 珩孔分析結果

分類群	C 3 地区(106)谷東壒		C 4 地区(104)自然道路	
	A	B	A	B
珩孔性種 (珩孔生種)				
<i>Eosia minor</i>		1		
<i>Eosia pectinella</i>		1		
<i>Eosia praerupta</i>		1		
<i>Eosia</i> spp.		1		
<i>Pinnularia microstauron</i>		1		
<i>Stauroneis</i> sp.		1		
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		1		
合計	0	10		
未同定	0	0		
珩孔	1	10		
試料 1 cm <sup>2</sup> 中の数密度	0.0	2.0		
		$\times 10^{-3}$		
珩孔保存率 (%)	-	-		

## 吹田操車場遺跡の珩孔



1. *Tabellaria fenestrata-flocculosa* 2. *Pinnularia microstauron*  
3. *Eosia minor* 4. *Eosia praerupta*

図 65 花粉分析結果・珩孔分析結果

### (3) 花粉分析から推定される植生と環境

#### 1) C3地区 1046 谷第1層 (古墳時代後期から飛鳥時代、試料A) の時期

草本が多く、イネ科を主にヨモギ属、カヤツリグサ科、キク亜科などが生育していた。イネ科には多くの種類が含まれ、多様な環境に生育する。ヨモギ属とキク亜科は乾燥地を好み、カヤツリグサ科は水湿地植物が多い。これらの生育よりやや多様な環境が推定される。谷地形周辺が一時的に流水の影響を受けたり乾燥したり不安定な環境であったか、これら草本は人為性が高いことから集落等が周辺に分布していたことなどが考えられる。周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属の照葉樹、コナラ属コナラ亜属を主にクリ、ハシバミ属、クマシデ属—アサダの落葉広葉樹が分布し、モミ属、スギ、マツ属複雑管束亜属の針葉樹も分布していた。落葉広葉樹がやや多いが、コナラやクヌギなどの二次林やナラガシワ林が部分的に分布していたと考えられる。

#### 2) C4地区 1042 自然流路第4層 (弥生時代から古墳時代前期、試料B) の時期

森林が多く、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹が優勢で、コナラ属アカガシ亜属やシイ属の照葉樹、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属の針葉樹が分布する。コナラ属コナラ亜属の森林は、平野部から台地・丘陵地の谷沿いの適潤地に生育するナラガシワ林かコナラやクヌギ等の二次林が考えられる。これらは種実遺体や連続データが得られれば、より詳しく復元されよう。草本は、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属、ガマ属—ミクリ属は水生植物であり、谷ないし付近の林縁に分布していたとみられる。マメ科も同様な草本と推定される。ササゲ属が検出され、この時期のマメ栽培が示唆されよう。栽培植物が検出されることから、コナラ属コナラ亜属林が二次林である可能性が高い。

### (4) 小結

下部にあたるC4地区 1042 自然流路第4層 (弥生時代から古墳時代前期) の時期は、森林が多く、ナラガシワ林かコナラやクヌギ等のコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が優勢に分布し照葉樹林も分布していた。草本は谷から林縁に比較的狭く分布していた。ササゲ属が検出され、この時期のマメ栽培が示唆される。C3地区 1046 谷第1層 (古墳時代後期から飛鳥時代) の時期は、イネ科を主にヨモギ属、カヤツリグサ科、キク亜科などの草本域が広く分布し、一方、森林が縮小し、特にコナラ属コナラ亜属が減少する。草本の増加は人為干渉の可能性が高い。

## 4. 珪藻分析結果

### (1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 7分類群である。図65に分析結果を示す。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に表記した分類群を記載する。

[貧塩性種] *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Eunotia* spp., *Pinnularia microstauron*, *Stauroneis* sp., *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

### (2) 珪藻群集の特徴

#### 1) C3地区 1046 谷第1層 (試料A)

珪藻密度が極めて低く、検出されない。

## 2) C 4地区 1042 自然流路第4層 (試料B)

珪藻密度が極めて低い。わずかに検出される珪藻は、底生種の *Pinnularia microstauron*、付着生種で好清水性種の *Eunotia minor*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*、*Eunotia pectinalis*、*Eunotia praerupta* などがわずかに出現する。

## (3) 珪藻分析から推定される堆積環境

## 1) C 3地区 1046 谷第1層

珪藻が検出されず、浮遊生種のみならず底生種や付着生種も検出されない。試料となった細砂混シルトにラミナがあることから、ラミナが形成される流水であるが、安定して常時流れるような環境ではなく、不安定であったと考えられる。

## 2) C 4地区 1042 自然流路第4層

付着生種や底生種がわずかに検出され、好清水性種や止水性種の性格をもつ珪藻もある。珪藻が極めて少ないことから、珪藻の生育しにくい流水と止水および乾燥の環境が短期間に入れ替わる環境が推定される。

## (4) 小結

C 3地区 1046 谷第1層 (試料A) およびC 4地区 1042 自然流路第4層 (試料B) で珪藻分析を行った結果、珪藻が検出されないか極めて少なく、珪藻の生育しにくい不安定な環境および乾燥した環境が推定された。

## 参考・引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42 73-88p  
 伊藤良永他 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 2-45p  
 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本』第10巻 角川書店 248-262p  
 小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第1号 植生史研究会 29-44p  
 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1-20p  
 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p  
 中村 純 1973 『花粉分析』古今書院 82-110p  
 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 187-193p  
 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 21-30p  
 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p  
 渡辺仁治 2005 「群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo」『淡水珪藻生態図鑑』pH耐性内田老鶴園 666p  
 Asai,K.&Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa Diatom 10 35-47p  
 K. Krammer・H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae 1-4

## 第V章 遺構・遺物の検討

### 第1節 C1・C2地区、C3・C4地区、C5・C6地区における土地利用の変遷(図65・66)

ここでは検出した遺構の存続時期について、出土遺物などから検討を加え、整理しておく。

#### 1. C1・C2地区の変遷(図66)

検出遺構について概ね次の4つの時期に集約・整理できる。

1期〈6世紀後半～7世紀前半〉 群集土坑が調査区北側の微高地を中心に掘削を始める。

2期〈7世紀中～8世紀前半〉 群集土坑、掘立柱建物1・2、405土坑が該当する。群集土坑は、この頃より北東～南西方向に爆発的に掘削されるようになる。検出した掘立柱建物は、柱穴の形状と吹田市・豊中市域の7世紀末～8世紀前半頃の建物が南北方向の主軸をとることから、おそらく同時期と考えられる。また群集土坑はその建物と切り合っておらず、避けるような配置をみせることから、一連の施設である可能性が高い。なお、2期と3期の間の9世紀後半(緑釉陶器)、10世紀後半～11世紀(摂津C型羽釜)の段階に至っても、群集土坑の分布範囲の北寄りにわずかに存在する。

以降、3期の近世の耕地開発に至るまで、中世遺構は削平のためか確認できない。

3期〈17世紀後半～18世紀〉 畦畔は確認できなかったが、確実に耕地開発が行われた時期。条里地割に沿った溝、鋤溝を検出。野井戸を併設。

4期〈18世紀～19世紀〉 引き続き、条里地割に沿った鋤溝・溝と野井戸がみられ、耕地が営まれる。

#### 2. C3・C4地区・C5・C6地区の変遷(図67)

検出遺構の所属時期から7期に分けた。

1期〈3世紀～5世紀前半〉 谷の中央付近を自然流路(1042)が一部大きく蛇行しながら、北西～南西方向に流れる。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含み、蛇行部分で大型の布留式土器の一括投棄がみられる。これらの裏は山陰系の器形を呈す。

2期〈6世紀末～9世紀〉 1期の自然流路(1042)が次第に埋没し、東側に流路(1043)を変える。南側は明確な流路状を呈するのではなく、全体として湿地状に広がる。

3期〈12世紀末〉 1・2期の自然流路(1042・1043)は完全に埋没し、その西側に新しく落ち込み(2159)および自然流路(2069)が形成される。

4期〈12世紀末～13世紀中〉 自然流路(2069)北側部分・落ち込み(2159)を埋めて盛土を行い、平坦面をつくりだす。平坦面にはピットと井戸(2158)がみられ、瓦器や砥石などが出土した。周辺にこれらの時期の集落が存在する可能性が高い。

5期〈14世紀末～17世紀後半〉 自然流路(2069)・井戸(2085)・溝などがある。自然流路は流路幅を狭くしながらも長期存続する。流路の両岸には耕作地が広がっており、条里に沿った配置をみせる。

6期〈17世紀後半～18世紀後半〉 この時期になると、自然流路(2069)は一気に流路幅を狭めており、やがて耕作地の取排水の機能がなくなったと考えられる。そこでそれに代わって大型の土坑を次々と掘削し、取排水に充てた可能性がある。2060・2069内土坑は、いわゆる溜池状(貯水状)の施設であっ

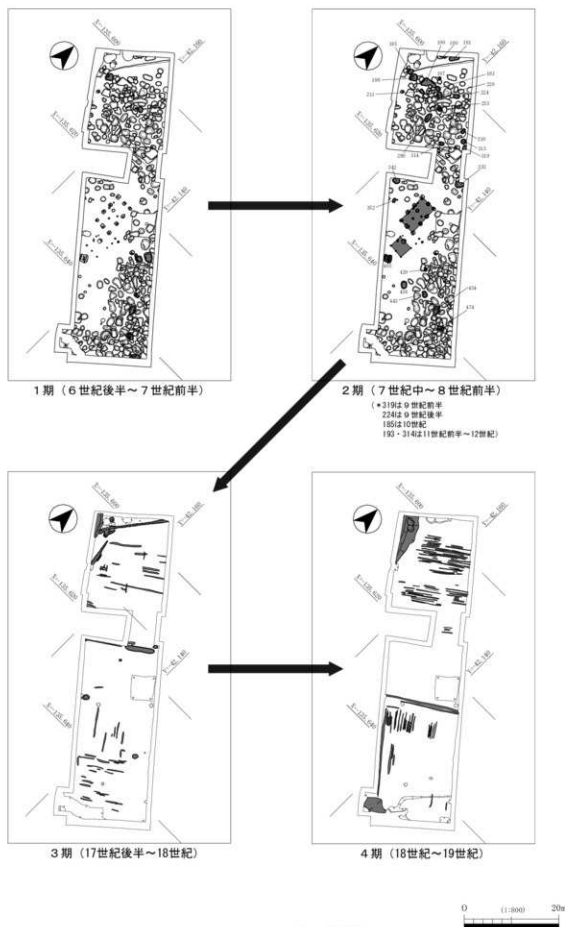


図 66 C1・C2地区遺構変遷図

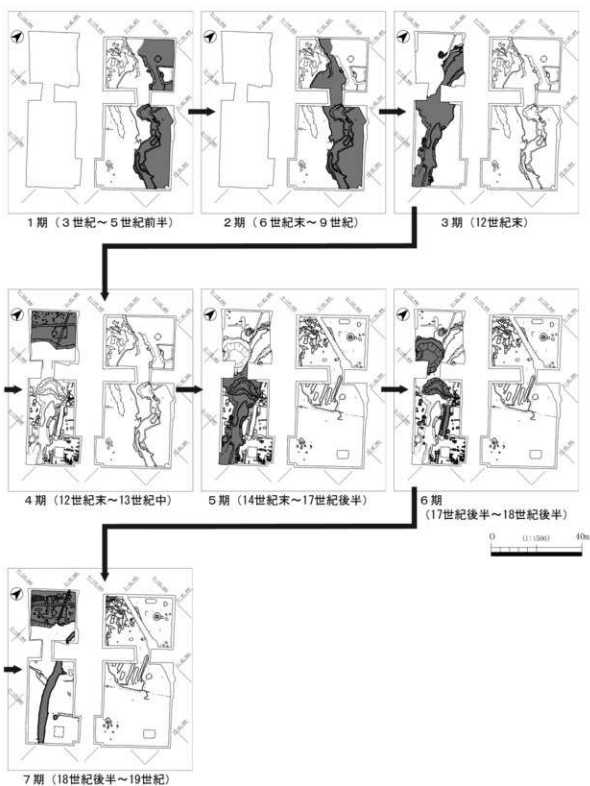


图67 C3·C4地区·C5·C6地区遺構変遷図

たとえられる。また埋桶（2086）や野井戸が元流路の走行していた肩部に多くつくられ、地下水脈上から水を確保する意図があったらしい。この時期、水の確保は耕作開発にとって非常に重要な問題であった。

7期〈18世紀後半～19世紀〉6期以後、埋没した自然流路の中央を再掘削して大溝を掘り直している。調査区北側では4期の造成に引き続き、平坦地をつくる作業が行われた。

## 第2節 C1・C2地区における群集土坑の検討

ここでは近年増加した他事例を中心に若干の検討を加え、群集土坑の性格を整理しておきたい。

### 1. はじめに

数百基以上の土坑が密集して検出される土坑群は、群集土坑の他に土坑群、密集「型」土坑「群」、土壇墓群、粘土探掘坑など様々な呼称で報告されており、土壇墓説あるいは粘土探掘坑説の解釈で意見が分かれている。現段階においても、定着した呼称および性格づけはできていない。

### 2. 研究略史

群集土坑の研究については、各調査担当者が報告書で行ったものを含めても、それほど多くなく、大阪府高槻市にある孤塚古墳群で行った原口正三の見解（1977）が最初となる。このなかで群集する土坑は土壇墓の集合体であり、方墳群の周りに累々とつくられた一般庶民の共同墓地という見解を提示した。その後、福永伸哉が類例を詳細に検討し土壇墓群と位置づけた一連の業績（1989 a・b）を発表すると、奥村清一郎（1989）、竹原一彦（1989）、西口陽一（1990）、市本芳三（1994）らもこの土壇墓説を次々と支持をした。ちょうどこの時期は、高等動物の残存脂肪酸の検出が人体埋葬を示す有力な根拠の一つとなっていた。

一方、全く批判的な見解として、長嶋 覚は長原・城山遺跡の成果（藤永 1986）を中心に検討を行い、粘土を採掘した跡であるという説を示した（1995・2002）。

最近では、墓の根拠となった脂肪酸分析も後世の土壌汚染などにより有効性が疑問視されている。

### 3. 群集土坑の事例

弥生時代から中世までの時期に限定して管見に触れるものを挙ると、表3・4のとおり全国で65例ある。内訳は大阪府28例、京都府7例、滋賀県3例、奈良県4例、兵庫県4例、鳥取県1例、岡山県2例、香川県2例、富山県1例、石川県1例、長野県2例、静岡県1例、東京都3例、埼玉県2例、群馬県4例となる。調査件数の問題はあがるが、全国的にみても大阪府が突出している。報告書に記載された性格ごとに分けると、土壇墓が19例、粘土探掘坑42例、その他4例となっている。以下、第Ⅲ章21pの分類をもとに作成した表3の属性ごとに概観していきたい。

**時期** 長原遺跡の弥生時代中期を起源として、群集土坑は長期間継続して営まれる傾向がある。特に弥生時代中・後期～古墳時代前期（29例）、古墳時代後期～奈良時代（16例）、奈良・平安時代（14例）、中世（5例）という時期に集中している。しかし、古墳時代中期（1例）の時期にはほとんど認められない。



**土坑数** 調査面積や調査回数によるところが多いが、500基以上確認される遺跡としては孤塚古墳群・大庭寺遺跡・長曾根遺跡・成谷寺遺跡・案察使遺跡・三宅遺跡・池田遺跡、100基以上確認される遺跡としては長原遺跡をはじめ29例がある。

**報告書における群集土坑の性格** 各報告書では様々な分析を行い性格付けが試みられている。これまで土壇墓・粘土探掘坑・祭祀土坑・木根痕（風倒木痕）・耕作関連の4つの性格に分けられているが、上述の通り土壇墓、粘土探掘坑の2説が有力である。土壇墓とした理由は、①小群を成す、②人為的な埋め戻しが認められること、③砂礫層を掘り抜くものがある、④高等動物の脂肪酸が遺存、⑤完形に近い土器・木製簀・磨製石剣・滑石製有孔円板・ミニチュア舟形土製品など供献土器の副葬（祭祀土坑）がみられること、を挙げられている。例えば、案察使遺跡では土器棺墓が存在し、土坑の一部には確実に墓として利用した例もある。他に木板で蓋をしたような土坑（孤塚古墳群）、土坑埋土にカルシウム質状の白いラミナがみられる（大庭寺遺跡）などの報告があるが、どれも確証は得ていない。

一方、粘土探掘坑とする理由としては、①骨・歯が出土しない、②砂地を避けた粘土層を掘削基盤層とすること、③袋状断面を呈し、壁面の良好な粘土層を横掘り、底面は平坦であること、④周辺に窯業生産遺跡がある、⑤錐や掘り棒など掘削用具が出土する、などを根拠に挙げる。なかでも坑に降りるための梯子（足掛け具）、粘土を仮置きするための敷き藁や藁束、土を運ぶための籠や曲物、履物である草鞋などが出土した白倉下原・大引向原遺跡、多摩ニュータウン遺跡 No.146・949などは、粘土探掘坑の様子がうかがえる特筆すべき事例である。また探掘坑に付属する施設としては、主に関東を中心に見つかっている。例えば粘土を水籠する施設である円形粘土土坑（武蔵国分寺遺跡、白倉下原・天引向原遺跡）や窯の炭化物を廃棄する坑（割山遺跡）、粘土置場（割山遺跡、吉志部瓦窯跡）、作業道（波志江中宿遺跡）などがある。

また両者どちらとも言えず、祭祀的な意味合いで捉えられているものとして、東安堵遺跡・上中遺跡・長曾根遺跡・葛井寺遺跡などがある。1つの土坑に多量の土器を集積・廃棄した例がみられる。

木根痕（風倒木痕）と考えられたものに宮ノ前遺跡・日置荘遺跡（表3に不掲載）などがある。

**立地、周辺遺跡との関係** 群集土坑の多くは、中位～低位段丘の谷地・荒地など集落に適さない部分に多くみられ、周辺には古墳（12例）や窯跡（30例）が多い。

**同時併存する遺構** 群集土坑と同時期に併存する遺構としては、墳墓（4例）、溝・自然流路（42例）、建物（11例）、窯・灰原など（8例）に整理できる。溝・自然流路と併存するものは、65例中42例と時期を問わずみられ、群集土坑に付属する要素と考えて間違いはない。代表的な事例として、東安堵遺跡・池田遺跡・高江浦石遺跡などがある。逆に、墳墓と併存する例は全体的に少なくなる。また建物と併存する場合は、どれも小規模で建替えがみられないことから恒久的な施設とは考えにくく、群集土坑の一時期に併設される施設（作業場・倉庫など）が想定される。他に粘土の運搬に使用した牛車の轆轤（2条の小溝）が池田遺跡・長曾根遺跡・丈六大池遺跡・夕日ヶ丘遺跡などで検出されている。

**平面形・分布、規模・断面形・埋土** 平面形は弥生時代中後期から奈良時代までは概ね楕円系が主流であるが、それ以降は方形あるいは正円形となり、規格性をもち始める。奈良時代以降、探掘土量の正確な確保が必要であったからであろう。大型で不定形な土坑も存在するが、多くは数基連続して掘削された結果広がったもので、これは窯業生産地に近い遺跡に多くみられる傾向である。また多摩ニュータウン No.146 遺跡では、平安時代の「坑道」を備えた探掘坑もみつかっている。平面規模は1～3m以内のものが多く、深掘り化したものも存在する。断面形態が袋状化である土坑というのは、滞水した際、

壁の崩落などによって断面が一部崩落し、自然と袋状化することも予想できるため、すべて粘土をより多く確保するための横掘りと捉えることできない。

今回の調査では埋土の特徴のなかでも、掘削後埋め戻さずにしばらく放置された土坑の存在について着目した。これまでも皿ヶ池西遺跡・嶋上郡衙跡・大庭寺遺跡・三宅遺跡・案察使遺跡・空港跡地遺跡・夕日ヶ丘北遺跡・筒江浦石遺跡にて指摘がある。

**出土遺物** 弥生時代中・後期から古墳時代前期にかけて出土する土器はほとんど甕である。完形に近い状態で数点出土するだけのものが多い。また甕の体部には煤がつくことも特徴である。古墳時代後期～奈良時代に入っても、須恵器甕が単独で出土する例が多いが、一部の土坑で完形の蓋環・高坏・横瓶・鉢・椀などがまとまって出土する土坑もみられる。製品の多くは不良品であり、生焼けの土器や破損した土器である。土器以外には、鋤・鍬・掘り棒・足掛け具・曲物・盆・編み籠・板状木製品などが出土しており、粘土を採掘するために必要な道具と考えられる。概ね土坑の底や中位に無造作に出土することが多く、土壙墓に供献した状況とは異なり、人為的に廃棄されたものと考えられる。

#### 4. 吹田操車場遺跡の群集土坑

ここでは、今回検出した群集土坑にかかわる事実関係を整理しておきたい。

**分布状況** (図 68) 非常に密集するが、掘立柱建物 2 棟部分を明らかに避ける。調査区外に広がるため詳細は不明であるが、列状・線状を呈しながら建物を避け、環状配置をとる。そのため西南側には空閑地が存在する。掘立柱建物 1 付近を境に大きく 2 群とみることもできる。405 土坑も建物配置と所属時期を考えると群集土坑の 1 つと考えられるが、掘削した用途は他の浅い土坑とは異なる可能性が高い。C 2 地区では第 4 層の踏み込み痕を避けた部分で土坑が検出できた。

**平面形・規模** (図 68・表 2) 平面形は楕円系で占められる。長径 1 m 前後、短径 1 m 以内の規模が多いが、グルーピングも不可で規格性をもつとは言い難い。土坑間の切り合い関係も一部分だけでなく顕著に認められる。長径 2 m 以上の比較的大型も少数存在することが指摘できる。405 土坑のみ 1.6 m と突出した深さをもつ。

**埋土の特徴** (図 20～22) 断面観察により、第三章では混合土 (a)、自然堆積土 (b)、混合土のうち自然堆積土 (c)、自然堆積したのちに混合土 (d) の 4 つの埋土堆積を分類したが、とくに b と d の 2 種が少なからず認められることは重要である。すなわち、坑を掘ってからしばらく放置されたことが明らかになり、本来の目的には埋め戻し作業が伴っていないものがあつたことを示唆する。

今回埋土の自然科学的分析を行い、これについて追証した (第四章)。それによると、土坑が掘削後直ちに埋め戻されることなく、ある程度の期間開いた状態にあり、雨水や地下水による滯水や周囲からの掘削排土などの流れ込みによって埋没が進行、最終的に人為的な埋め戻し行為があつたことが証明された。この分析結果では調査時に混合土 (a) のみの埋土で捉えた土坑 (292・304) についても、短期間自然堆積したのちに混合土の埋め戻しが行われたことが指摘されている。調査時に土坑断面の肉眼による考古学的な層位観察を実施し、全て人為的な混合土で埋め戻されていると判断した a についても、掘削後すぐに埋め戻されたかどうかは検討を要する。掘削後放置されたままのもの、すぐに埋め戻されたもの、しばらく放置されて埋められたものなど様々な状況が考えられる。

群集土坑の検出に際しては、最終的に検出面を約 10cm 掘り下げ、図 68 の通り下層の広がり方が改めて検出できた部分について図化しているが、この部分は掘削後そのまま放置され、ある時期に土坑単体



分類	切取	種類 (表層)	調査期	出土	出土遺物	備考	表層
遺構	△ A-6	1-6-5	a/b/c	粘土土層-土層群-土層	遺-赤土-石炭		1
	○ A-6-C	1-6-6	a/b	粘土土層-土層群	遺-赤土層群-ヤマトの石	底層は白土層群の埋没土層	2
遺構	○ A-6	1-4	a/b/c	粘土土層-土層群	遺-赤土層	遺構不詳	3
	○ A-6	1-2-4	a/b	粘土土層	遺-赤土層	遺構不詳	4
瓦葺	○ A-6	A	a/b/c	粘土土層	遺-赤土層-遺構石-木製釘-漆喰和泥葺瓦葺-漆喰	遺構不詳	5
	○ B-C	B		粘土土層	遺-赤土層		6
瓦葺	○ A-C	1-5	a/b/c/d	粘土土層-土層群-土層群	遺-赤土層	粘土土層群と赤土層群が異なる。赤土層は大層で深い。底層は赤土層のみの層	7
	△ A-2-5	1-2-5	a/b/c/d (埋没遺構)	粘土土層-土層群-赤土層-赤土層	遺-赤土層-赤土層		8
遺構	○ B-C	1-2-5	a/b	粘土土層-土層群-石炭品	遺-赤土層-石炭	遺構は、下層部で小規模な遺構。遺構は遺構の下から遺構の層	9
	○ A-6-C	1-5	a/b	粘土土層	遺-赤土層		10
遺構	○ B-C	1-3-4	a	粘土土層-石炭	遺-赤土層-土層群	遺-赤土層	11
	○ A-6-C	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層-土層群-土層品	遺-赤土層-土層群-土層品-漆喰		12
遺構	△ A-6-C	1-2-3-4	a/b	粘土土層	遺-赤土層		13
	○ A-6	1-3-4-5	a/b/c/d	粘土土層-木製	遺-赤土層-漆喰和泥-漆喰和泥葺瓦葺-漆喰和泥葺瓦葺-土層群	埋没土層の粘土土層群の埋没土層。埋没土層は粘土土層群より厚く、粘土土層群の埋没土層	14
瓦葺	○ C	5/9/10	a/b	粘土土層	遺-赤土層-漆喰和泥		15
	○ A-6-C	1-2-3-4	a/b	粘土土層-土層群-木製	遺-赤土層-漆喰和泥-漆喰和泥葺瓦葺	土層は粘土土層と粘土土層	16
瓦葺	○ B	1-3-4-5	a/b/c	土層群	遺-赤土層		17
	○ A-6-C	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層-土層群	遺-赤土層	遺構は粘土土層群の埋没土層	18
瓦葺	○ A-6-C	1	a/b	土層群	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群	19
	○ B	4-5	a	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	20
瓦葺	△ A-6-C	1-3-4	a/b	土層群-漆喰和泥-木製	遺-赤土層-漆喰和泥-木製	埋没土層群の埋没土層	21
	○ A-6-C	2-4-5	a/b	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	22
瓦葺	○ A-6-C	1	a/b	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	23
	○ B-C	1	a/b	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	24
瓦葺	○ A-6-C	1	a/b	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	25
	○ B-C	1	a/b	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	26
瓦葺	○ A-6	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	27
	○ A-6	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	28
瓦葺	○ A-6	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	29
	○ A-6	1-2-3-4-5	a/b/c	粘土土層	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	30
瓦葺	○ A-6-C	1-2	a	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	31
	○ A-6	2-4-5	a/b	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	32
瓦葺	○ A-6	1-4-5	a/b	漆喰和泥-土層群-漆	遺-赤土層-漆喰和泥-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	33
	○ A-6	2-4-5	a	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	34
瓦葺	○ A-6-C	1	a	土層群-漆喰和泥-石炭	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	35
	△ A-6	1-4	a	土層群-漆喰和泥-瓦葺	遺-赤土層-漆喰和泥-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	36
瓦葺	○ A-6	1-2-5	a/b/c	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	37
	○ A-6	1-4	a/b	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	38
瓦葺	○ A-6	1-5	a/b/c/d	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	39
	○ A-6-C	1-3-4-5-6	a	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	40
瓦葺	○ A-6-C	1-3-4-5-6	a/b/c	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	41
	○ B-C	1-3-4-5-6	a/b/c	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	42
瓦葺	○ B-C	2-3-4-5	a/b/c/d	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	43
	○ A-6	5	埋没土層 a	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	44
瓦葺	○ B-C	1-3-4-5	a/b	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	45
	○ A-6-C	1-2-6	a/b	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	46
瓦葺	○ A-6	1-4	a/b/c	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	47
	△ A-6	5	a	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	48
瓦葺	△ A-6	1-3-4-5	a/b	土層群-木製	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	49
	○ A-6	3-4-5	a/b	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	50
瓦葺	○ A-6	1-2-4-5-6	a/b/c/d	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層-漆喰和泥	埋没土層群の埋没土層	51
	○ B-C	A	a/b	漆喰和泥-土層群-瓦葺	遺-赤土層-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	52
瓦葺	○ A-6-C	1	a/b	漆喰和泥-瓦葺	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	53
	○ A-6	1-3-5	a/b/c	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	54
瓦葺	○ B-C	5	a/b	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	55
	○ C	5	a	漆喰和泥-瓦葺	遺-赤土層-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	56
瓦葺	○ C	5	a	漆喰和泥-瓦葺	遺-赤土層-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	57
	○ C	5/9/10	a	漆喰和泥-瓦葺	遺-赤土層-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	58
瓦葺	○ C	1-5	a	土層群-漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	59
	○ A-6	1-2	a	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	60
瓦葺	○ A	5	a/b	瓦葺-木製	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	61
	○ A-C	1	a/b	漆喰和泥	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	62
瓦葺	○ A-6-C	2-4-5	a	漆喰和泥-土層群-瓦葺	遺-赤土層-瓦葺	埋没土層群の埋没土層	63
	○ A-6	5	a	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	64
瓦葺	○ A-6	5	a	土層群	遺-赤土層	埋没土層群の埋没土層	65

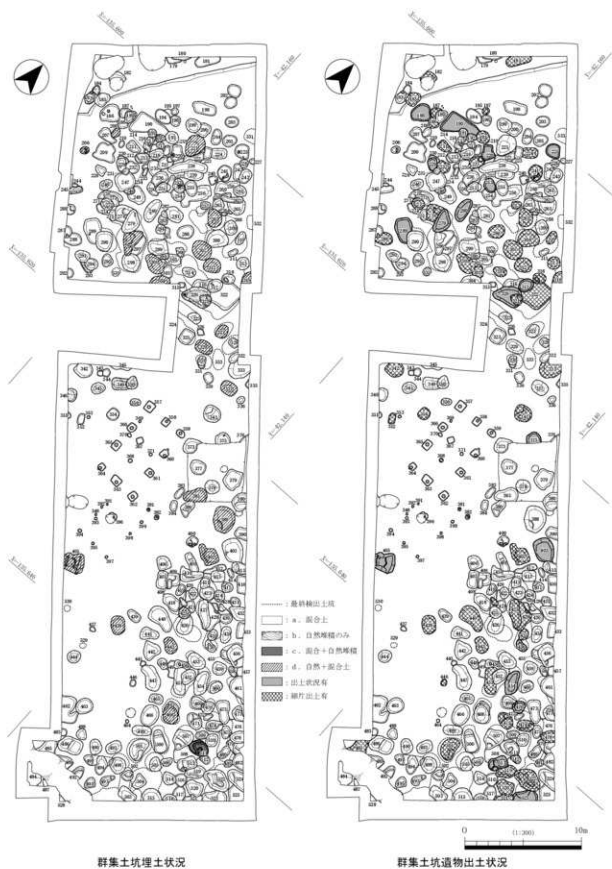


図 68 群集土坑埋土状況・遺物出土状況図

だけ埋め戻すのではなく、面的に埋め

戻された状況を示しているのではないだろうか。つまり、掘削に必要な作業道や作業範囲の確保などのために、整地し直された範囲ではなかったかと考えている。

**土坑断面形** 皿形がもっとも多く、次いで逆台形・袋状・凸状の順で認められる。なお、袋状は粘土採掘坑の根拠とされる断面で、凸状は底面にピット状や不定形の窪みをもつものである。

**掘削深度** (図11・14・15・69、表2)

掘削深度は0.2～0.6mの範囲とそれほど深掘りされるものではない。調査区の標高は南へと低くなる。図69は概ね右下がりの傾向を示し、立地に合わせて掘削底標高がほぼ比例する。これは無作為の掘削ではないといえる。405土坑のみ井戸状に穿たれており、1.34mと突出した深度をもつ。

**周辺遺跡と併存遺構** (図74) 千里丘陵一帯には5世紀後半から7世紀前半にかけて千里古窯跡群があり、奈良時代には聖武朝後期難波宮の造営瓦窯である七尾瓦窯、平安時代には平安宮造営瓦窯である吉志部瓦窯が1km北に分布し、国家規模の窯業生産地帯であった。また、平安時代初期には三国川と淀川を連結する運河開削工事が行われ、水運の拠点の近くでもあった。本遺跡の西南に位置する片山荒池遺跡でも、本遺跡より古い古墳時代後期の群集土坑が見つかる。これら吹田市の群集土坑2例は、千里地区窯と燃料薪の関係から6世紀段階の窯の構築が、丘陵の東南端を東北上しながら次第に谷の深部に移動する説(藤原1993)とうまく合致している。

表4 群集土坑遺物出土一覧表

土坑番号	須置器				土師器				土器器色	陶器胎	瓦器	瓦製品	備考
	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺					
180													8世紀
181								3					土師
182						1							
185	1							4	A1				10世紀か 遺品群(須置器)群から6世紀後半～7世紀初
186	1	1											○
187		1											
188	1							1	10		1		○
190	1							1					群平・吉志部瓦窯
193					鉢1								
197	2	1	1			1							7世紀
211	1				4 壺1・ 不明								○211と群集坑・7世紀
220								1					○211と群集坑・7世紀
224	1	1	2							焼1			鎌倉末葉・平安 台・9世紀後半
225	2												
229	1												
232	1							1					
237	1												
241													
252	2												群集坑・9世紀 後半～7世紀初
257								1					
267	2												
272	1							1					○
276	1												○
279	1												
280		1											吹田S1-9窯併 行・7世紀中～後
286									2				
288						1							
289	1												
301	1												
303	1												
310											1		群九・七尾瓦窯・ 8世紀前半
312						1							
313													
314	1	1	1					4		常滑 1	1		12世紀か
317	3				1	1							○
318	11												
319						2					1		○ 群平・吉志部瓦 窯・9世紀前半
320	1												○
321	1												○
322						1	3		3				○
323						3	1						○
341	1												○
342						1							○ 吹田S1-9窯か・6世紀 後半～7世紀初
352									1				○ 吹田S1-9窯か・6世紀 後半～7世紀初
354									1				
375	1					2							
402	1												
403	1												
405	33	4	17	1	鉢1・ 須置器 1・不明 5	18		78製 造?			2	1	○ 群2-6003型式 群九・七尾瓦窯・ 8世紀前半
420													7世紀
427	1												○
429	1												○
435	1												
436													
438													
440	1												
443	2						2			把手1			
454													
470	1												○
471	2	1											
474	1												○
476	1												○
485										2			
501	1					2							
512	1	1											○
513													
519	1												
520	2												
521	1												
522													
523	1												○ 吹田S1-9窯か・6世紀 後半～7世紀初

今回併存する建物のうち1棟は、方形柱穴を呈し、遺存した柱根材はコウヤマキである。建替えはみられず、倉庫・作業場など短期間の簡易な建物と考えられる。類例としては深田遺跡・丈六大池遺跡・陶器南遺跡・万町北遺跡・神出・田井遺跡・藪田東遺跡・波志江中宿遺跡などがあり、それらは窯から持ち出された土器を集荷選別する集落としての位置づけを与えられているが、こういう施設は集荷選別の拠点に加えて、粘土採掘後の素地づくりをしたり、ねかせたりする仮置き場でもあった可能性が考えられよう。

**群集土坑出土遺物と年代** 遺物が出土した土坑は71基である(表4)。種類としては須恵器・土師器・黒色土器A類・施釉陶器・瓦器・瓦・木製品などがあげられる。数的には須恵器で裏が圧倒的に多く、焼成不良品で破片が目立つ。特徴的なものとして須恵器横瓶・蹄脚硯・製塩土器・施釉陶器、七尾瓦窯と吉志部瓦窯の軒瓦がある。また須恵器は吹田古窯跡群の産と認定されるものも少なからず存在する。出土遺物としては、6世紀後半～7世紀初頭の須恵器裏の一群と7世紀後半～8世紀前半の須恵器・瓦の一群があり、以降12世紀頃までの間の遺物が確認できる。土坑1基当りの出土量は極めて少なく数点に留まるが、土器の残存率のよい(50%以上の)土坑も4基(186・220・253・523)ほどみられる。それに比べて405土坑では7世紀後半から8世紀前半の遺物が167点出土しており、他の土坑とは異なっている。8世紀前半の遺物には、七尾瓦窯産の後期難波宮所用軒丸瓦と未製品の蹄脚硯があり、それぞれ2次選別の際に廃棄された可能性がある。出土した不明木製品(53)は形状や材質(アカガシ亜属)から農具または掘り具とみることできる。その他、土坑間(211・220)で接合関係のある須恵器破片を確認した。

**群集土坑の採掘土量についての試み** 群集土坑の一基あたりどれくらいの土が採掘できるのか、図70に掲載した。土量(容積)の計算は、土坑表面積(m<sup>2</sup>)×平均深さ(m)×1/3=(m<sup>3</sup>)で算出した。不定形な表面積については、縮尺1/100の遺構平面図をもとに測定可能なものを対象にして、面積測定図(タマヤ デジタルプランメーター PLANIX5000)を使用し、測定した。データについては図70の散布図のとおり、0.1m<sup>3</sup>以下にもっとも集中し、0.2～0.3m<sup>3</sup>にも多く存在することが分かる。こうした掘削土量を算出した群集土坑としては、多摩ニュータウン遺跡№146・藪田東遺跡・大庭寺遺跡・夕日ヶ

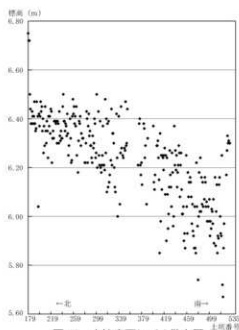


図69 土坑底面レベル散布図

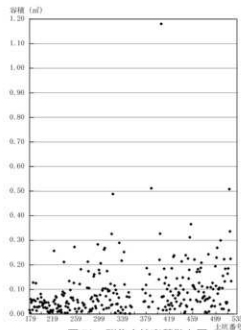


図70 群集土坑容積散布図

丘北遺跡などがあるが、それらと比較しても土量はずっと少ない。時期が判別できた土坑には、6世紀末～7世紀初頭と7世紀末～8世紀初頭の2時期あるが、掘削土量をグラフにすると前者は0.05～0.35㎡とばらつき、後者は0.05～0.15㎡と狭い範囲にまとまりをみせる傾向が読み取れる。これは奈良時代以降、掘削土量が規定されていた可能性を想起させる。また平安時代の吉志部瓦窯では、方形の粘土採掘坑が整然とした配置で15基みつかつており、瓦窯に使用した粘土採掘量を平均3.0㎡と算出している(増田1987)。『延喜式』(平安時代)では掘削土量が1人1日当たり1.5㎡四方約3.4㎡と記述されるように土量計算可能な形状に変化していくと考えられるが、規定がおそらくなかった奈良時代以前は、運搬手段に左右されたのではないだろうか。運搬手段としては、出土例から曲物・籠・土囊などに小分けされて車(牛車)に載せ、保管場所に移したと考えられる。

#### 4. 小結

今回検出した群集土坑は、千里丘陵東南部の低位段丘上に立地し、空地や道状の踏み込み、掘立柱建物を避けて分布していた。平面形や規模にはあまり規則性はないようである。ただ、掘削深度と掘削土量の観点からは、405土坑を除いて標高に比例し、かつ0.4㎡未満の掘削土量を算出できた。

今回の事例では、掘削後そのまま埋め戻されずに放置された土坑が相当数確認できることから、土坑墓などのような埋め戻しが必要な形態を考えることは難しい。付近にある千里古窯跡群の吹田窯が6世紀後半～7世紀初頭にもっとも盛業し、7世紀後半には一時休止、8世紀初頭にST9、2-27号窯(緑瓦窯)、2-19-2号窯、七尾瓦窯が再び操業すること今回の群集土坑の時期(6世紀後半～7世紀前半と7世紀末～8世紀前半の2時期)がちょうど一致すること、土坑埋土の中心付近で焼成不良品・破損品・破片が1・2点単独で廃棄されること、などを考え合わせると今回の群集土坑の性格については、粘土を採掘した痕跡と考えるほうが妥当であろう。

掘削土量が0.4㎡未満という数字は、夕日ヶ丘北遺跡の検討(辻川2006)で明らかにされるように須恵器窯1回分の製品をまかなうことは可能な量である。今回の群集土坑は、簡易な建物と併存し、その周囲で未製品や破損品がみられることから、粘土採掘場所だけでなく、窯で1次選別した後、集荷・移送する段階でみつかった破損品や焼成不良品を2次選別の際に廃棄した拠点と考えたい。

今後の調査では、掘削粘土と土器・瓦胎土の科学的分析や掘削粘土層の確認、同時期集落の検出などが判明していくものと思われる。今後の調査に期待したい。

### 第3節 古式土師器と須恵器の様相

#### 1. 1042 流路出土の土師器(図39・41・71・72、表5)

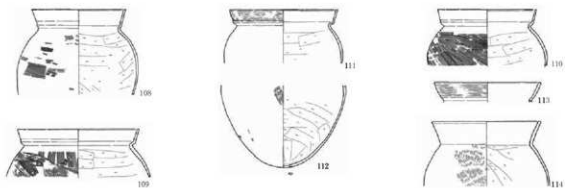
1042流路から、6個体の土師器(108～114)が出土した。細分すると4類に分けられ、①複合口縁部が長く(表5)、頸部のしまりや肩部の張りが弱い108、②ひときわ大型の110、口縁部の工具ナデが明確で、稜の上端には工具の溝がはつきり残る111など、細差はあるが同一形態の109～112、③口縁の内湾が強く屈曲が極めて弱い、どちらかと言えば新しい特徴をもつ113、④単純口縁の114、となる。大枠でみると口縁端部の肥厚

表5 古式土師器計測値

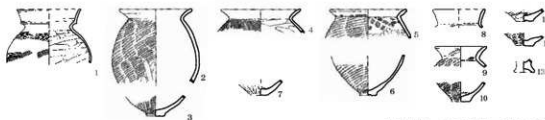
掲載No.	屈曲部長		口径	備考
	上	下		
108	4.9	0.4	24.6	米粒形庄瓶
109	3.4	1.5	(26.0)	
110	3.5	1.4	(31.8)	
111	3.6	1.3	28.4	
112	-	-	-	底部
113	4.3	1.2	(28.0)	内湾
114	5.4	-	(28.4)	単純口縁

\*単位はcm、( )内は復原口径

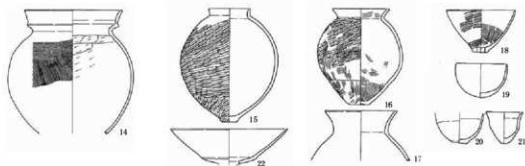




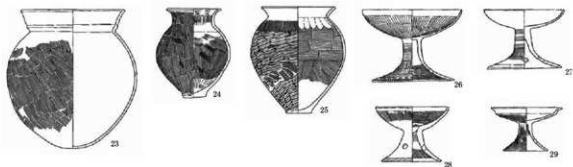
吹田操車場遺跡 1042流路



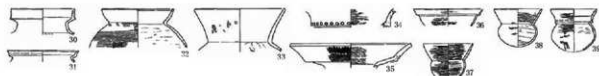
藏人遺跡 第3土器群 (庄内式期II)



芥川遺跡 土壇5 (庄内式期V=布留式期I)



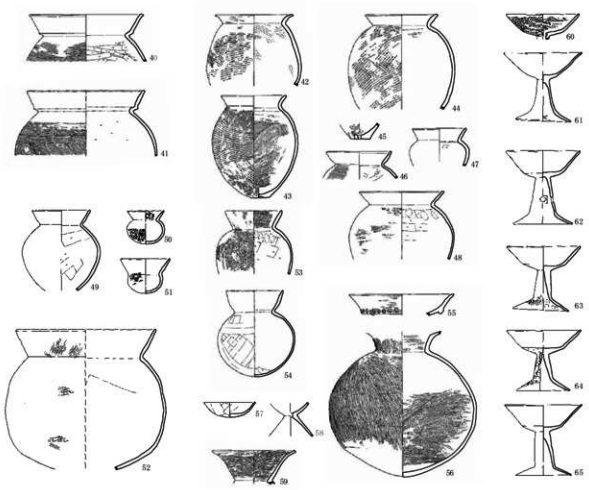
芥川遺跡 南大溝北部 (庄内式期IV~庄内式期V=布留式期I)



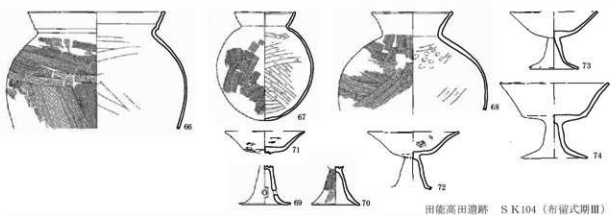
崇禅寺遺跡 SK01 (布留式期I)



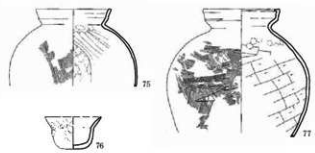
図71 吹田周辺の山陰系甕を含む出土例(1)



田能高田遺跡 第2遺構面直上 (庄内式期V=布留式期I~II)



田能高田遺跡 SK104 (布留式期III)



藏人遺跡 土器群701 (布留式期III~IV)



図72 吹田周辺の山陰系聚を含む出土例(2)

が共通し、うち5点は複合口縁下部のゆるやかな屈曲という類似した特徴をもつ。こうした特徴や胎土の類似性、出土状況(図39)から、同時使用の可能性の高い資料と判断できる。

**地域** 古式土師器のうち、外反する複合口縁は一般的に北陸から山陰地域の特徴とされる。しかし、本資料は、いずれの地域ともやや異なった型的特徴をもつ。北陸地域では、古墳時代前期前葉から在地の土器様式が崩壊し始め、前期中葉には「畿内系・山陰系をはじめとする外来系土器群が在地において土器組成の主体となる」(堀 2006)という。本例のような口縁端部が肥厚する資料は、山陰の系列とされており、加えて肩部の米粒形列点文の存在(108)や、全体的な形態の類似性、畿内における相対的な出土量から、本例を山陰「系」土器として論を進めることとする。

**時期** 山陰地方の弥生時代後期から古墳時代の土器編年は、地域差の指摘される水系・旧国ごとに進んでいる(中川 2006)。仮定的ではあるが、伯耆～出雲東部地域(鳥取県中西部～島根県東部)の資料ではないか、との指摘<sup>1</sup>や対象時期を鑑みて、青木編年(青木遺跡発掘調査団 1978)や南谷大山編年(牧本 1994)、松井編年(松井 1997)などを参考に、その編年の位置を探ることとする。

口縁端部の肥厚、複合口縁部の形態変化や内湾する 113 から、山陰地域で布留式土器の影響がみられ始める青木Ⅶ期(布留式古相)以降で、最古式よりは下った時期に位置づけられる。同Ⅶ期新段階に始まる複合口縁の退化傾向は示唆的である。体下部の特徴(丸底化、胴部上位にある最大径、底部のみ指頭圧痕)によれば、胴部が球形化する青木Ⅷ期(布留式新相)より前の資料となろう。

さらに 108 の米粒形列点文の存在が特徴的である。布留形甕の肩部施文は、畿内において庄内式期Ⅲ～布留式期Ⅲ<sup>2</sup>に一般的で、摂津地域では茨木市東奈良遺跡・豊中市穂積遺跡・島田遺跡・高槻市安満遺跡・上牧遺跡など庄内式期Ⅴ＝布留式期Ⅰ・Ⅱ古段階に多いという<sup>3</sup>(次山 1995)。甕の系列が異なるため、限定はできないものの、一つの判断材料となろう。

以上と地域の変容による幅を考慮して、吹田操車場遺跡出土例は、古墳時代前期前半、庄内式期Ⅴ＝布留式期Ⅰ～Ⅱにその編年の位置を求めておきたい。

**摂津での交流** 畿内の編年基準資料のほか、大阪府吹田市・茨木市・豊中市・高槻市・摂津市の既報告、さらに山陰地域の代表的な遺跡<sup>4</sup>のなかから図 71・72、特に近似例として尼崎市田能高田遺跡例(甲斐 1997)を挙げる。遺跡は本遺跡から西、周辺に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数存在する、猪名川流域にある。山陰系と考えられる複合口縁の甕は第 2 遺構面直上(40・41)と S K 104(66)から出土した。共存土器などによって、40・41 は庄内式期Ⅴ＝布留式期Ⅰ～布留式期Ⅱ、66 は布留式期Ⅲのうちでも次期への移行期とされる。

吹田操車場遺跡例と比較すると、いずれも口縁の外傾度が強く、40・41 は稜がやや突出して若干の鋭さが残っている。時期の下る 66 が端部形態や屈曲部の鈍さ、調整手法など非常に似通っており、あるいは本例も布留式期Ⅲに近い時期となる可能性もあろう。

肉眼観察によって胎土・色調などを比較すると、吹田操車場遺跡例では在地与異なる<sup>5</sup>黄灰色系の土でつくられる。山陰地域の土器は「淡褐色で硬い」特徴(清水 1981)をもつと言い、本例が在産であれば意図的に粘土を選択していた可能性もある<sup>6</sup>。一方で、田能高田遺跡例は他の在産土器と変わらない橙褐色系(40:5YR6/6、41:5YR7/6、66:7.5YR8/3)の色調<sup>7</sup>を呈する。ほか、高槻市芥川遺跡出土例(14・23)も「在地で製作されたもの」とされる(橋本 1995)。搬入か模倣かという問題は背後に想定される人的交流の程度にも関わって重要な課題となるが、田能高田遺跡・芥川遺跡例から示唆される在地製作の可能性は小さなものではない。複合口縁部の変容が、変化の方向性を同じくしな

からも異なる要因、すなわち山陰地域では時期的な要因、畿内においては地域的要因を大きくして起こった可能性も想定できよう。遺跡同士の近接性から、摂津での変容形を設定できるかもしれない。

ところで、山陰でも畿内でも、「この土器ではない」と言われる土器をもつ主体は、いったいどういう立場にあったのだろうか。桜井市城島遺跡外山下田地区では、凹地に大型甕を含む東海・近江・山陰・河内といった各地域の甕と、鎌や鍬といった木製品が多量に出土した状況を捉えて、各地から集められた古墳造営集団の存在が想定されている（清水 1991）。本例には、外来系の大型甕ばかりが一括出土したという状況と、土器に付着した煤の痕跡から炊飯行為という共通性が認められて興味深い、個体数の少なさや、土木用具の不出土、造営対象の不在などから、大規模な労働形態を示すものではない。

猪名川を境界とした東摂地域は、河内産庄内甕や布留形甕の受容や模倣に積極的な地域である。特に大阪市崇禪寺遺跡、吹田市垂水南遺跡・蔵人遺跡・五反島遺跡は外来系土器の多さから「淀川水系を媒介とした交流の起点とも終点とも言える位置」にある一連の遺跡群として、「瀬戸内海と河内湖、さらに大和川を基幹として中河内・大和地域と他地域を結ぶ」交流拠点や港湾的な性格をもつと評価される（田中 2005、森岡・竹村 2006、森岡 1999 など）。各報告によると、こうした遺跡での外来系土器搬入量のピークは、おおよそ弥生時代後期後半から布留式期Ⅰ新段階に求められる。やや内陸、東よりに位置する吹田操車場遺跡は、立地や土器の時期にずれがあるものの、相対的にものや人が活発に往来する地域であったと考えられる。田能高田遺跡との関連を高く評価すれば、猪名川を経由した山陰地方との交流形態を示す可能性が指摘できよう。

こうした状況や、本来とは異なるセットで用いられる「山陰系土器」に似て非なる土器（中川 1997）や「山陰型」（市村 1999）の畿内での存在は、土器の受容や模倣に関して、庄内式土器から続く非常に複雑な背景を物語っている。周辺地域や山陰地域での類例確認が課題だが、交流拠点とされる遺跡群からややはずれて出土する点が興味深く、交流拠点周辺での土器の変化を示す事例となろう。資料が充実してきた摂津地域（竹村 2003、森岡 1999、森岡・竹村 2006、森岡・中井・濱野 1996 など）における編年を進めるうえでの一資料であるとともに、交流地点をもつ摂津の地域性を現すものと考えられる。

以上をまとめると、以下の通りとなる。

- 1) 1042 流路から出土した土師器は、山陰「系」土器である。
- 2) 型式差をはらむが、古墳時代前期（庄内Ⅴ＝布留式期Ⅰ新段階～布留式期Ⅱ）に位置づける。
- 3) 田能高田遺跡例に類似し、摂津での変容形である可能性も指摘できる。
- 4) 垂水南遺跡、五反島遺跡、崇禪寺遺跡といった摂津の交流拠点との関連が考えられる。

## 2. 須恵器

**出土の様相と時期的分布** 須恵器は遺物量全体のうち約 17% を占め、地区ごとには、C1・C2 地区：3250/6670 片（48.7%）、C3・C4 地区：133/712 片（18.7%）、C5・C6 地区：94/1820 片（0.06%）と、C1・C2 地区での出土量が突出して多く、主要な遺構である群集土坑が営まれた時期との関連が考えられる。出土時期は 6 世紀後半から 9 世紀まで幅があり、C1・C2 地区の群集土坑で 6 世紀末～7 世紀前半と 7 世紀末～8 世紀前半、C3・C4 地区の自然流路上層で 7 世紀前半を中心に出土する。

**供給窯** 供給窯を何処に求めるかは、1：窯との距離的接近性、2：特徴的なへら記号（134：ST 39 出土の捉瓶と壺頸部）や特異な形態・文様の壺（24・48）、坯内面にみられる静止ナデ<sup>8</sup>といった特徴、3：砂粒を多く含み灰色から灰白色を呈するものが多い<sup>9</sup>といった点から、在地窯である千里窯跡群、

そのうちでも吹田窯からの供給物である蓋然性が高い。ただし、2については蓋坏類内面にみられる特殊な当て具痕や口縁端面外面の刻目目状調整、高坏の端面形態などこれまで指摘されている特徴（秋山2006、綱2007、藤原2002など）すべてを満たすものではない。なぜならば、これらは主に6世紀代の資料に対しての特徴とされるからである。該期の出土数の少なさにも関わらず、複数の属性が示す千里窯跡群出土資料との高い関連性は着目できるものとする。

7世紀中葉、高丘窯跡群など播磨地域で操業が拡大する一方で、吹田窯跡群では集中的な操業体制に終わりを告げる（藤原1996）。こうした盛衰を考慮すれば、特に7世紀中頃以降に下る資料のうちに他地域の資料が含まれている可能性は大いにあり、前回調査の出土須恵器に播磨産と考えられる資料が多いとの報告（福島2001）とも整合しよう。ただし、胎土や焼き上がりには差異があることは確かであるが、これが窯業地の違いによるかどうかは慎重であるべきである。また、焼成不良品が目立つことから選別行為を示唆する向きもある。しかし豊中市新免遺跡のような大量廃棄は認められないことや、吹田窯跡群の衰退期を考えると、例えそうした行為があったとしても小規模であったと推測される。

いずれにせよ、出土時期の中心が須恵器生産の変革期とされる6世紀末～7世紀前半と、国府が整備され始める7世紀末～8世紀にあたることは興味深い。群集土坑の性格と合わせて、摂津における窯業生産体制の推移との関連を考えていくべきであろう。

出土須恵器についてまとめると以下の通りである。

- 1) C1・C2地区での出土量が多く、群集土坑の存続期間との関連が考えられる。
- 2) 6世紀後半～7世紀前半・7世紀末～8世紀前半を中心に6世紀後半から9世紀の須恵器が出土。
- 3) 千里古窯跡群が供給窯である可能性が高い。
- 4) 千里古窯跡群が衰退する7世紀中葉以降は、他地域の窯からの搬入品のある可能性がある。

## 第4節 瓦と施釉陶器

瓦（図75） 出土瓦のうち主体を占める平瓦は、12トレンチ～58トレンチ間で合計124点出土した。これらは、須恵質焼成で凸面の一部に格子叩きを有するものと、瓦質焼成で凸面に縄叩きを有するものの二者があり、前者は七尾2号窯産（28点）、後者は吉志部瓦窯産（96点）という<sup>10</sup>。

通常、寺院あるいは官衙などといった瓦葺建物を想定する場合、地名・地割・交通路・伝承などととも、礎石建物の存在や瓦の出土といった考古資料の存在が不可欠となる。当遺跡の北西数百mには奈良時代前期創設の三嶋路があったが（足利1990）、今回の調査地付近に寺を想起させる字名はなく、操車場建設による地形改変のため、旧地形・地割は極めてわかりにくくなっている。調査の結果、寺院あるいは官衙などの基壇痕跡はなく、C1・C2地区には粘土採掘に伴う群集土坑が展開し、C3～C6地区では自然地形をとどめていた。出土した瓦の焼成はいずれも堅緻で磨耗もなかったが、瓦溜りなどはなく出土状態は極めて散漫であった。つまり現状では、調査区周辺に瓦葺建物があったとは言い難く、むしろそれ以外の要因、例えば当地が製品の2次選別の場であった可能性も考えられよう。

施釉陶器（図32・73、写真図版19） 9世紀前半、量産型施釉陶器は碗皿類を中心として出現する。当初土器全体における構成比率は低かったが、時期が下るとともにその比率は上昇する。当時緑釉陶器の生産地は洛北と猿投で、淡緑灰色もしくは灰白色を呈した良質な製品が多く、器種も豊富であった。ただ、京内における当該期の猿投産の出土は限られていた。9世紀後半、平安京内の施釉陶器の出土量

はピークを迎える。京都産の緑釉陶器は、ヘラミガキの粗雑化や釉層の薄いもの、底部外面の施釉の省略、高台成形の粗雑化がみられ、産地は洛北から洛西、篠へ移動する。猿投産は良品が多いが、灰釉陶器は重ね焼きに伴い、三日月高台へと変化する。10世紀代の施釉陶器は粗雑化の一途を辿り、篠や猿投の生産は終息し、替わって東濃や近江で生産を開始する。11世紀前半～中頃には国産施釉陶器は平安京から消滅し、中国製陶磁器が登場する（平尾 1994）。

北摂地域では、茨木市新庄遺跡にて9世紀前半～中頃の洛北産・猿投産を含む施釉陶器が出土（松岡 1996）。9世紀後半の洛北もしくは洛西産は、島本町広瀬遺跡（野口 1991）、高槻市郡家今城遺跡（森田 1988）・嶋上郡衙跡（橋本 1980）・安満遺跡（橋本 1989）、吹田市五反島遺跡（増田 2003）、能勢町大里遺跡（重金 1999）・田能遺跡（奥 2003）、豊中市蛍池北遺跡（宇野 2005）などでみつかると。これに対して10世紀代の近江産は、高槻市大蔵司遺跡（橋本 1985）、能勢町大里遺跡（重金 1986）で出土例がある。つまり9世紀前半に一部の遺跡から出土した施釉陶器が、9世紀後半に全域に拡散、10世紀代に減少・終息するという傾向がうかがえる。

吹田操車場遺跡では、1998・2000年及び今回の調査で緑釉陶器16点（今次調査出土は6点）・灰釉陶器18点（同3点）が出土した。そのうち猿投産緑釉陶器は、C1・C2地区から出土した釉層の厚い図32-91・92のみである。これに対しC1・C2地区出土図32-93～99や、試掘調査でC1・C2地区周辺から出土した写真図版19-262などは、上記の9世紀後半の特徴を兼ね備える。このほか試掘調査では、C1・C2地区近隣以外にC5・C6地区の東方、26・28・30・32トレンチからもまとまって出土した。緑釉陶器は、写真図版19-261・263・267・268のように、10世紀前半～中頃の非常に緻密な胎土で硬質焼成の篠産が、灰釉陶器は写真図版19-278～280のような9世紀～10世紀前半の製品が目立つ<sup>11</sup>。図73に示した緑釉・灰釉陶器は、C1・C2地区周辺では9世紀中頃～後半の、C5・C6地区東方では10世紀前半を中心とした時期の分布のまとまりがある。

## 註

- 1 森岡秀人氏教示。さらに在地（吹田）で製作された土器である可能性も指摘された。
- 2 次山（1995）では寺沢編年を用いているが、森岡・西村（2006）に拠って米田編年を記した。
- 3 ただし、吹田周辺で出土例のなかった布留式期Ⅱ新段階以降にも、五反島遺跡河道1下層（布留式期Ⅲ含む土器群）、島田遺跡4次調査SK-7（MT 15段階の須恵器共伴）で確認できる。
- 4 編年で参考にした遺跡のほか、岩吉遺跡、長瀬高浜遺跡、妻木晩田遺跡、南講草田遺跡など。
- 5 藤原 学氏教示。
- 6 森岡氏によると段丘面に露頭した1次堆積粘土を用いると褐色、沖積地などに2次的に堆積した粘土を用いると灰色の焼き上がりになるという。
- 7 実見による。
- 8 藤原（2002）は、坏蓋内面の調整における「千里窯の癖」として、「環中央部に現れる粘土成形痕の凹凸を消去するために、轆轤回転を止めた後に改めて静止ナデを施す」と指摘する。
- 9 藤原氏教示。色調・胎土については「全体に須恵器が灰色でも茶色系の暗色調を呈しており、砂粒の混入が目立つのが「千里窯の風土」としている（藤原 2002）が、本遺跡出土品は焼成不良で灰白色に近いものも多い。
- 10 藤原 学氏教示。
- 11 平尾政幸氏教示。

## 第VI章 総括

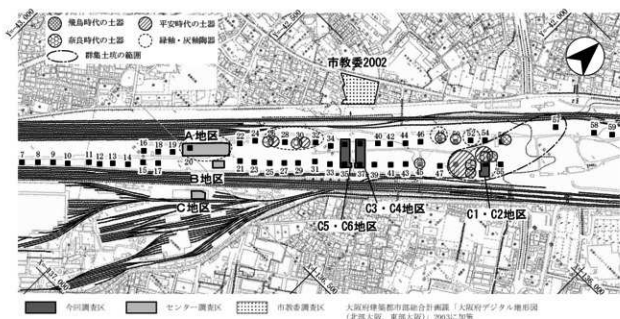
今回の調査で得た成果は、弥生時代から近代までみられるが、成果の中心は古墳時代から平安時代と言いつけてよいだろう。主要な遺構・遺物としては、古式土師器、千里古窯跡群の須恵器、群集土坑、七尾瓦窯・吉志部瓦窯の瓦、墨書土器、施軸陶器などが挙げられる。以下に簡単にまとめておきたい。

### 1. 古墳時代前期の成果

#### 古式土師器

C3・C4地区で検出された自然流路や谷は、新編大阪地盤図などによると吹田操車場遺跡の背後に位置する千里丘陵から、舌状にのびる低位段丘面の開析谷に含まれると推察される。2000（平成12）年度調査区のA～C区の谷からアカホヤ火山灰が検出されており、谷の基盤層は6300年前以前に堆積したことが判明している。この谷は比較的規模が大きく中心部より近いと考えると、2002（平成14）年の吹田市調査区とC3・C4地区は低位段丘面との境目、C1・C2地区は低位段丘面上に位置する可能性が高い。また、花粉・珪藻分析の結果、古墳時代前期頃までは落葉照葉樹林が多く分布したが、古墳時代後期から飛鳥時代に入るとイネ科を中心とした草木類の増加傾向がみられ、人による地形変化がうかがわれたことが分かる。

C3・C4地区1042自然流路で出土した土師器は、考察の結果、口縁端部の肥厚、複合口縁下部のゆるやかな屈曲という形態は山陰「系」の特徴とされ、古墳時代前期（布留式期I新段階～布留式期II）に位置づけられる。こういった土師器は兵庫県田能高田遺跡例に類似し、山陰地域の土師器が摂津地域で変容してつくりだされた形態とらえるならば、垂水南遺跡・五反島遺跡・崇禅寺遺跡のような摂津の交差点に関わる資料の一つと考えることができよう。



## 2. 古墳時代後期～平安時代の成果

## 千里古窯跡群の須恵器

今回出土した須恵器は、6世紀後半から9世紀前半のものであるが、中心は6世紀後半～7世紀前半、7世紀末～8世紀前半である。形態や諸特徴から在地の吹田窯から供給された可能性が高い。ただし、吹田窯が衰退する7世紀中葉以降は播磨産など他地域の窯から搬入されたことも大いに考えられ、周辺の集落との比較や使用する編年の取り扱いなど今後の調査や検討に期待したい。

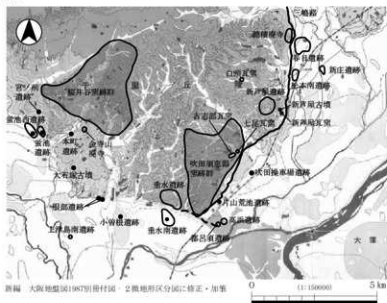


図74 北摂地域の群集土坑・窯跡・古代寺院・主要遺跡  
(●は群集土坑を示す)

## 群集土坑

群集土坑の性格については、周辺事例と埋土の観察などから粘土採掘坑の可能性が高いと判断した。今回検出した土坑は、科学的分析結果によると、粘土掘削後そのまましばらく放置された例が多くみられ、ただちに埋め戻されることはなかったという。最終的に土坑の多くは人為的に埋め戻されている。土坑内の遺物には、焼成不良の須恵器、煤がついた土師器のほかに木製品があり、その出土状況などから埋め戻しの過程で廃棄されたものと考えられた。出土遺物の時期は、古墳時代後期から鎌倉時代頃まで幅があり、長期存続したようにみえるが、今回時期決定できた遺物を見る限り概ね6世紀後半～7世紀前半と7世紀後半～8世紀前半の2群(表4)に分かれ、それを土坑掘削のピークととらえると非常に興味深い。この傾向は千里古窯跡群と七尾瓦窯の操業期間に一致し、検出した群集土坑は少なくとも2時期以上にわたって須恵器や瓦をつくるための粘土(素地)を採掘していたと考えられることができる。燃料薪と須恵器窯の操業を検討した藤原 学は、「ひとつの窯の操業が周囲の燃料薪を伐採して維持される以上、窯はいつまでも長期にわたって操業されるものでなく、一端閉鎖された窯が、同一地点(あるいはその周辺)で操業を再開できるのは40～60年後であろう」と述べており、粘土採掘からでもそういった間隔が読み取れるのではないだろうか。

では次に吹田操車場遺跡の群集土坑はどんな広がりを見せるのか、みてみよう。1998(平成10)年の試掘調査ではNo.49・51・53・56・57トレンチで群集土坑の一部が検出されており、C1・C2地区を中心にした範囲(図73)に大きく広がるようである。北摂地域では群集土坑は千里丘陵の縁辺部に位置し、吹田須恵器窯跡群と桜井谷窯跡群それぞれに面して確認できる。このことは千里丘陵下に広がる低位段丘先端部の粘土を採掘した結果と思われる。南西に位置する片山荒池遺跡は6世紀後半が中心の粘土採掘坑が検出されていることから、粘土採掘の初期は西側が中心であり、順次東側の吹田操車場遺跡へ移動していったことが想定できる。藤原によれば、古墳時代の土器生産においては粘土採掘の場所は集落のすぐ近くにあったと言い、窯とそれ以外の施設が別にあった形態は奈良時代に入っても七尾瓦窯まで引き継がれるが、平安時代になると吉志部瓦窯のように粘土採掘から窯まで同一場所で一環とした工房をもつようになると指摘する(藤原1998・高橋2004)。



つまり千里古窯跡群と七尾瓦窯の生産動向とうまく合致しており、今回の群集土坑は須恵器・瓦の粘土を中心に採掘したものと考えたい。群集土坑は窯跡の操業・規模・移動に大きく影響された結果、変遷するという見方も必要であろう。

なお、吉志部瓦窯の瓦など平安～鎌倉時代の遺物が土坑からごく少量出土する現象は、吉志部瓦窯の粘土採掘は窯のすぐ近くで粘土を採取したことが判明しており、今回出土の緑軸陶器が京都産であることなどから現段階では別用途の粘土採掘が流れ込み、後世の埋め戻しなどが原因と考えたいが、はっきりしていない。石器が出土した土坑については、明らかに周辺の流れ込みや後世の巻上げが原因と考えられる。今後、群集土坑周辺に古墳時代後期以降～奈良時代の集落が検出される可能性がある。

## 墨書土器

吹田市内には奈良時代から平安時代初頭の墨書土器が、吉志部瓦窯・吹田操車場遺跡・五反鳥遺跡・垂水南遺跡で出土している。これらは河道や包含層からのものである。奈良時代の墨書土器は、吹田操車場遺跡C1・C2地区と吉志部瓦窯で出土しており、8世紀後半頃の時期と考えられる。「万」「福」「土」は比較的良く使われる文字であるが、出土した「万」(卍)の字体は類例がなく、中国周の則天武后が690年に制定した「則天文字」の1つではないかという指摘もある(永野正好)。しかし大阪において則天文字が書かれた土器の出土例はまだなく、元来仏典にみえる古字(異形文字)を参照して書いた呪術的な文字(東野1994)と考えたい。平安時代初期には垂水南遺跡で東寺領垂水庄の成立と関係が深い「垂庄」や難波津の歌を記した墨書土器が出土している。これら出土分布をみる限り、時期が下ると東から西へ推移するようである。

## 七尾瓦窯・吉志部瓦窯の瓦

出土した平瓦には、須恵質焼成で凸面の一部に格子甲きを有する七尾瓦窯の2号窯、瓦質焼成で凸面に縄甲きを有する吉志部瓦窯の2種類があることが判明した。特に後者の方の出土量が多く広範囲に出土する。旧地名・瓦溜・基壇跡がみられないことから、寺院・官衙といった瓦葺建物の存在は想定しに

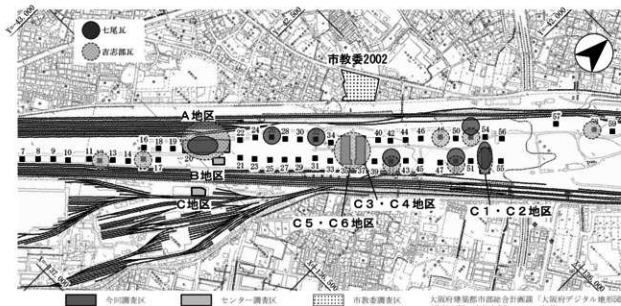


図75 七尾瓦窯・吉志部瓦窯産の瓦出土分布

くく、群集土坑が広がる状況からみて当地が瓦の2次選別のもであった可能性が考えられる。

### 施釉陶器

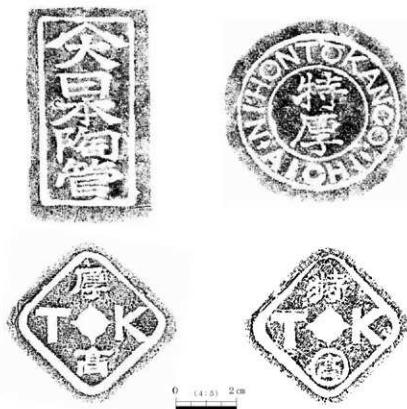
北摂地域における施釉陶器の出土傾向は、9世紀前半に茨木市新庄遺跡など特定の遺跡で出土し、9世紀後半に周辺へ拡散、10世紀に終息を迎え、平安京の出土傾向と一致することが判明した。

また、出土分布からC1・C2地区周辺で9世紀中頃～後半、C5・C6地区東方では10世紀前半に中心時期がみられ、墨書土器と同じく東から西への移動を想定した。

特に当地域において猿投産の出土例は、茨木市新庄遺跡（9世紀前半～中頃）と吹田操車場遺跡（9世紀中頃）に限られていることが判明した。

### 3. 鎌倉時代から江戸時代の成果

最後に、中近世の遺構・遺物について触れておきたい。中世の遺構はC5・C6地区で検出した自然流路・井戸・溝・ピットがある。C6地区のピットと井戸は13世紀後半～14世紀前半、その他は15・16世紀頃と2時期みられ、遺構の継続したつながりは認められない。明確な耕作面を検出できなかったが、これらは条里に影響された耕作地の一部であろうと判断した。遺物によれば、瓦質土器は和泉型がほとんどを占め、中国製輸入陶磁器もみられる。また近世になると、井戸や大型の池状土坑を次々に構築し、より灌漑水利施設の拡充が図られていく様子がうかがわれた。C6地区では多量の瓦片が出土しており、また「庵ノ下」という字名がみられることから周辺に瓦葺建物の存在が想定される。



本図は、C6地区跡土坑遺構調査中に出土した土管（長：70.5cm、内径：30.8cm、厚：4.4cm）に施された印である。

図76 旧吹田操車場埋設土管刻印（拓影）

## 参考・引用文献

- 青木遺跡発掘調査団 1976・1978 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅲ』 鳥取県教育委員会
- 秋山浩三 2006 「古墳副葬須恵器の産地推定一例」『陶磁器の社会史 吉岡康暢先生古希記念論集』 桂書房
- 足利健亮 1990 「摂津古道の地形」『西国・丹波街道』 大阪府教育委員会
- 網 伸也 2007 『上私部遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター
- 荒木幸治 2002 「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号  
兵庫県教育委員会
- 市村慎太郎 1999 「久宝寺遺跡出土鼓形器台の意義」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 市本芳三 1994 「大庭寺遺跡検出の『密集型土壙群』について」『大阪文化財研究』第6号 (財)大阪文化財センター
- 宇野隆夫 2005 「蛭池北(宮の前)遺跡」『新修 豊中市史』第4巻 豊中市
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
- 奥 和之 2003 『田能遺跡群発掘調査概要・Ⅳ』 大阪府教育委員会
- 大川 清 1996 『日本土器事典』 雄山閣
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 奥村清一郎 1989 「集落遺跡に伴う不整形土坑群」『京都府埋蔵文化財情報』33号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 尾上 実 1983 「南河内の瓦器概観」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 甲斐昭光 1997 『尼崎市田能高田遺跡』 兵庫県教育委員会
- 木下 亘 1982 「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2・17窯跡』 小路窯跡遺跡調査団
- 木下 亘 2005 『窯跡群成立の意義』『新修 豊中市史』第4巻 考古 豊中市
- 京嶋 覚 1995 『群集土壙の再評価』『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 京嶋 覚 2002 「長原遺跡の粘土採掘坑と土器生産」『田辺昭三先生古稀記念論文集』 田辺昭三先生古稀記念の会
- 栗原文彦 1998 「粘土及び用土の採掘」『考古学叢考 中巻』 齊藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
- 佐藤 隆 1996 「摂津東部」『古代の土器4』煮沸具(近畿編) 古代の土器研究会
- 佐藤 隆 1998 「摂津東部」『古代の土器5-2』7世紀の土器(近畿西部編) 古代の土器研究会
- 佐藤 隆 2003 「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館 研究紀要』第2号 (財)大阪府文化財協会
- 佐藤 隆 2004 「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係」『大阪歴史博物館 研究紀要』第3号 (財)大阪府文化財協会
- 佐藤 隆 2007 「7・8世紀陶器編年の再構築と都城出土資料の様相」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005年度共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター
- 清水真一 1981 「長瀬高浜遺跡出土の土器編年について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(財)鳥取県教育文化財団
- 阪田育功 2001 「吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点」(財)大阪府文化財調査研究センター
- 重金 誠 1986 『大里遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会
- 重金 誠 1999 『大里遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 能勢町教育委員会
- 清水真一 1991 『桜井市城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書』 桜井市教育委員会
- 吹田市史編さん委員会 1981 「第二節 須恵器窯跡」『吹田市史』第8巻 吹田市役所
- 菅原正明 1983 「機内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

- 杉本厚典 1999 「崇禪寺遺跡出土土器の特徴と編年」『大阪市東淀川区崇禪寺遺跡発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪市文化財協会
- 杉本源道 2007 「群集土壙塚について」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』（有）真陽社
- 穂山 洋 1999 「大坂の土師質土器」『関西近世考古学研究Ⅶ』 関西近世考古学研究会
- 高橋真希 2004 「千里丘陵の須恵器—古代ハイテク工場」 吹田市立博物館
- 竹原一彦 1989 「第2節 三宅遺跡の土壙群について」『京都府遺跡発掘調査報告書』第18冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 竹村忠洋 2003 「摂津地域における古墳出現期前後の土器様相」『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター
- 田中元浩 2005 「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
- 中世土器研究会 1995 『概説中世の土器・陶磁器』（有）真陽社
- 次山 淳 1995 「波状文と列点文」『文化財論叢Ⅱ 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集』 同朋社
- 東野治之 1994 『書の古代史』 岩波書店
- 中川 寧 1997 「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会
- 中川 寧 2006 「山陰地域—出雲」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 鍋島敏也・藤原 学 1974 「千里古窯跡群」
- 西 弘海 1976 「考察 土器」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 奈良国立文化財研究所
- 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所
- 西口陽一 1990 「畿内の群集土壙塚」『考古学研究』第37巻第1号 考古学研究会
- 西口陽一 1999 『吹田操車場遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 西本安秀・藤原 学 1990 「吹田53号須恵器窯跡の調査」『平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 吹田市教育委員会
- 野口尚志 1991 「広瀬遺跡」『島本町埋蔵文化財調査報告書』第1集 島本町教育委員会
- 橋本久和 1980 『嶋上部衝跡発掘調査概要・4』 高槻市教育委員会
- 橋本久和 1989 「安満遺跡の調査（1）」『嶋上部衝跡他関連遺跡発掘調査概要・13』 高槻市教育委員会
- 橋本久和 1985 「大蔵司遺跡の調査」『嶋上部衝跡他発掘調査概要・9』 高槻市教育委員会
- 長谷川 真 1988 「丹波系擂鉢について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』 日本中世土器研究会
- 原口正三 1977 「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻 高槻市
- 平尾政幸 1994 「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究』 古代の土器研究会
- 福永伸哉 1989 「古墳時代の共同墓地」『待兼山論叢』第23号 大阪大学
- 福永伸哉 1989 「共同墓地」『古代史復元』第6巻 講談社
- 福島正和 2001 「出土遺物からみた吹田操車場遺跡」『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 藤原 学 1991 「須恵器の編年 近畿」『古墳時代の研究6』 雄山閣
- 藤原 学 1996 「近畿地方における須恵器生産の動向」『須恵器集成図録』第2巻近畿編Ⅱ 雄山閣
- 藤原 学 2002 「群集墳と群集窯」『八十塚古墳群の研究』 関西大学文学部考古学研究室
- 堀 大介 2006 「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 牧本哲雄 1994 「土器編年について」『南谷大山遺跡Ⅱ 南谷29号墳』（財）鳥取県教育文化財団
- 増田真木 2003 『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 遺物編』 吹田市教育委員会
- 松井 潔 1997 「東の土器、南の土器」『古代古備』第19集 古代古備研究会

- 松岡良憲 1996 『新庄遺跡』 大阪府教育委員会
- 森岡秀人 1991 「土師器の移動 1. 西日本」『古墳時代の研究6』 雄山閣
- 森岡秀人 1996 「3. 阪神地区」『庄内式土器研究』Ⅻ 庄内式土器研究会
- 森岡秀人 1999 「摂津における土器交流拠点の性格」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006 「摂津地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996 『庄内式土器研究』Ⅻ 庄内式土器研究会
- 森岡秀人・西村 歩 2006 『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
- 森田克行 1988 「郡家今城遺跡の調査（2）」『船上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・12』 高槻市教育委員会
- 森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社
- 米田敏幸 1991 「土師器の編年1、近畿」『古墳時代の研究6』 雄山閣
- 米田文孝 1983 「搬入された古式土師器」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』 関西大学

### 群集土坑検出遺跡の報告書

- 1 京嶋 覚 1991 「群集土坑の性格と意義」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』（財）大阪市文化財協会
- 2 藤永正明 1986 『城山（その3）』（財）大阪文化財センター
- 3 伊藤 武 1997 『蛭池遺跡（その3-2）発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 4 三宮昌弘 1997 『宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡 1993 - 1996 年度発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 5 田代 弘 1986 「第2章 各遺跡の調査」『京都府遺跡調査概法』第17冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 6 奥村清一郎 1988 『寺岡遺跡』 野田川町教育委員会
- 7 山崎敏昭 2002 『天神土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の記録Ⅰ 天神遺跡第11次調査一』 三田市教育委員会
- 8 西川 徹 1992 『福岡遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
- 9 中野雅美 1997 『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』 岡山県古代古備文化財センター
- 10 服部聡志 1991 「本町遺跡第15次」『豊中市埋蔵文化財年報 VOL. 2（1991・1992年度版）』 豊中市教育委員会
- 11 宮崎康雄 1995 「船上郡衙跡（11 C・D・G・H・K・L地区の調査）『船上遺跡群 19』 高槻市教育委員会
- 12 酒井泰子 1993 『西大井遺跡発掘調査概要 1991年度』 大阪府教育委員会  
今村道雄 1994 『西大井遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会  
大野 薫 1995 『西大井遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 13 進藤 武 2001 「第6章 小籙原遺跡」『2001年埋蔵文化財調査年報』 野洲市教育委員会
- 14 福島孝行 2003 「案察使遺跡第4次」『京都府遺跡調査概報』第108冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 15 佐藤晃一 1996 「福江遺跡第3次」『加悦町遺跡発掘調査概報 1995年度』 加悦町教育委員会
- 16 泉 武 1983 『東安堵遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- 17 服部伊久男 1990 『若槻遺跡カナヤケ地区発掘調査概要報告書』 大和郡山市教育委員会
- 18 蔵本晋司 1993 『空港跡地遺跡発掘調査概報平成4年度』（財）香川県埋蔵文化財センター
- 19 嶋谷和彦 1986 『堺市文化財調査報告第27集 長曾根遺跡発掘調査報告』 堺市教育委員会
- 20 小山田宏一 1987 『三田遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会
- 21 増田孝彦 1986 「7. 上中遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報』第20冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 22 近藤 広 2001 『2000年度年報 栗東町埋蔵文化財調査報告』 栗東市教育委員会・栗東市文化体育振興財団
- 23 竹原一彦 1989 「（2）三宅遺跡」『京都府遺跡調査概報』第36冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 24 藤田 淳 2007 『簡江浦石遺跡』 兵庫県教育委員会

- 25 藤井利章 1983 「池田遺跡発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報 1981年度（第一分冊） 奈良県立橿原考古学研究所
- 26 熊谷 健 2001 『波志江中宿遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 27 鶴田典昭 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 13』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 28 木村弘之 1991 『御殿・二之宮遺跡』 磐田市教育委員会
- 29 浅倉秀昭 1993 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6』 岡山県教育委員会
- 30 原口正三 1977 『考古学からみた原始古代の高槻』『高槻市史』第1巻 高槻市
- 31 服部聡志 1998 『大阪府豊中市蛭池西遺跡』 蛭池西遺跡調査団
- 32 市本芳三 2002 『麻田藩陣屋跡—近世陣屋跡・古墳時代—古代集落の調査』（財）大阪府文化財センター
- 33 山元 建 2005 『片山荒池遺跡』（財）大阪府文化財センター
- 34 西口陽一 1989 『讃良郡糸里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 35 今村道雄 1980 『新家遺跡発掘調査概要・Ⅱ』 大阪府教育委員会
- 36 森村健一 1981 『大和川・今池遺跡Ⅲ』 大和川・今池遺跡調査会  
後川恵太郎 2000 『大和川今池遺跡密集土坑の事例分析』『大和川今池遺跡（その1・その2）』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 37 芝野圭之助 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）大阪文化財センター
- 38 芝野圭之助 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）大阪文化財センター
- 39 白神典之 1990 『丈六大池遺跡（JRO-1）発掘調査概要報告書』 堺市教育委員会
- 40 市本芳三 1998 『大庭寺・伏尾遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 41 森下 衛 1987 『千代川遺跡第12次発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』第26冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 42 吉川和則 1982 『昭和57年度三堂・野々宮遺跡他発掘調査概要報告書』 野洲町教育委員会  
辻川哲朗 2006 『M・N地区の密集土坑群について』『夕日ヶ丘北遺跡・大塚原西遺跡』 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会
- 43 藤巻幸男 1997 『白倉・天引向原遺跡Ⅳ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 44 宇佐美義春 1998 『多摩ニュータウン遺跡先行調査報告書9』 東京都埋蔵文化財センター
- 45 今泉泰之 1981 『割山遺跡』 深谷市割山遺跡調査会
- 46 上野 章 1983 『小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- 47 上田 睦 1987 『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅱ』 藤井寺市教育委員会
- 48 山川 均 2005 『下三橋遺跡第1次発掘調査現地説明会資料』 大和郡山形市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
- 49 石塚久剛 2003 『光仙房遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 50 渡辺 一 1985 『船山窯跡群発掘調査概報』 船山窯跡群遺跡調査会・船山町教育委員会
- 51 鶴田典昭 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 13』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 52 増田真木 1987 『吉志部瓦窯跡』 大阪府教育委員会・吹田市教育委員会
- 53 尾上 実 1978 『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 54 一瀬和夫 1988 『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会  
天野未喜 1988 『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅲ』 藤井寺市教育委員会
- 55 尾上 実 1978 『挟山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 56 原 雅信 1982 『藪田東遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 57 中山真治・松田隆夫 1998 『府中市武蔵台発見の古代の粘土採掘坑』『東京考古 16』 東京考古談話会
- 58 加藤 修 1982 『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—』 東京都埋蔵文化財センター

- 59 谷内明央 2007 『ニツ梨グミノキバラ遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 60 沢井静芳 1980 『西村遺跡』 香川県教育委員会
- 61 清水 篤 1998 「小曾根遺跡第18次」『豊中市埋蔵文化財年報 VOL. 5（1995年度版）』 豊中市教育委員会
- 62 神崎 勝 1989 『神出1986 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』 妙見山麓遺跡調査会
- 63 菅本宏明 1989 「2. 神出・田井遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 64 橋田正徳 1995 「服部遺跡第3次」『豊中市埋蔵文化財年報 VOL. 3（1993年度版）』 豊中市教育委員会
- 65 安里 進 1985 『成合寺』 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 表に掲載できなかったが、兵庫県英賀保駅周辺遺跡第4地点（姫路市）、津万遺跡群（西脇市）でもそれぞれ弥生時代後期、古墳時代前期の粘土採掘坑が検出されている。
- また中世以降では、大阪府泉佐野市湊遺跡・森山遺跡・安松田遺跡でも類例がある。

図71・72 引用文献（掲載図を一部改変）

- 1～13：藤原 学 1979 『藏人遺跡』 吹田市教育委員会・吹田市下水道部
- 14～29：橋本久和 1995 『芥川遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 より一部抜粋
- 30～39：前掲 杉本 1999 40～74：前掲 甲斐 1997
- 60～62：買納章雄 2007 『藏人遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 吹田市教育委員会

図版19 下段所載施軸陶器の新旧遺物番号新旧対照表

本書	旧番号	本書	旧番号	本書	旧番号
259	図版71-d	260	図版69-a-10	261	図版53-a-3
262	図版61-b-5	263	図版53-b-1	264	図版53-b-2
265	図版61-b-6	266	図版66-a-1	267	図版51-e-3
268	図版53-a-2	269	図39-94	270	図38-63
271	図版66-a-2	272	図版69-a-7	273	図39-103
274	図版69-a-8	275	図版69-a-9	276	図版61-a-2
277	図版61-a-1	278	図版51-e-5	279	図版51-e-6
280	図版51-e-4	281	図版66-a-5	282	図版66-a-4
283	図版66-a-3				

※ 旧番号が図版のもの：1999 『吹田操車場遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター

旧番号が図のもの：2001 『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』（財）大阪府文化財調査研究センター

# 図 版







図版1 C1・C2地区第1面全景

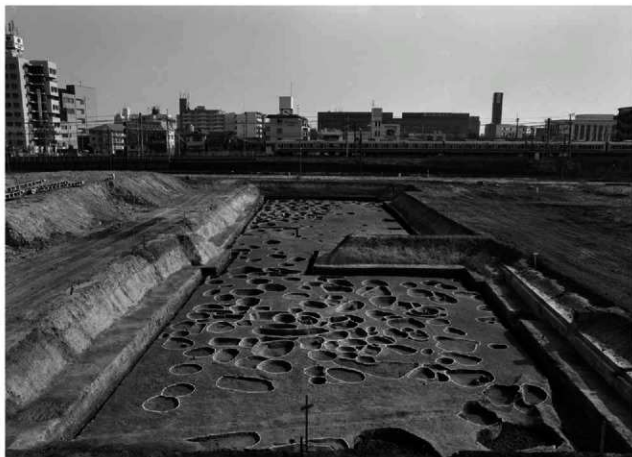


(西から)



(南から)

図版2 C1・C2地区第3面全景



(北西から)



(南東から)

図版3 C1・C2地区第3面掘立柱建物



掘立柱建物1・2（北から）



掘立柱建物1 363柱穴



368柱穴



掘立柱建物1 364柱穴

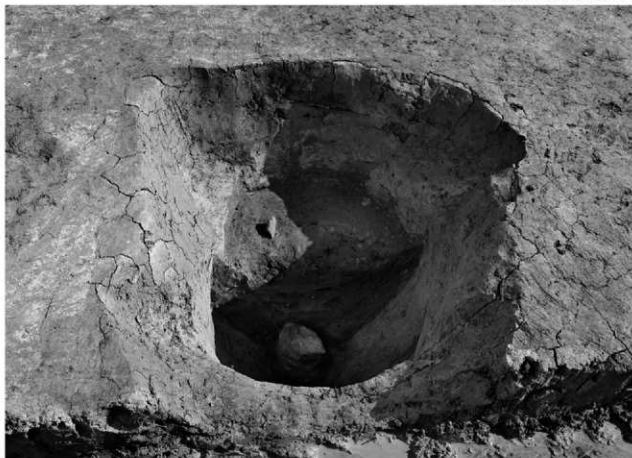


353柱穴

図版4 C1・C2地区第3面405土坑

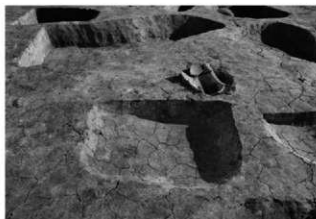


遺物出土状況(南東から)



下層遺物出土状況(南西から)

图版5 C1·C2地区第3面群集土坑(1)



220 土坑 土层断面



423 土坑 土层断面



279 土坑 土层断面



426 土坑 土层断面



403 土坑 土层断面



438 土坑 土层断面



410 土坑 土层断面



388 土坑 土层断面

図版6 C1・C2地区第3面群集土坑(2)



186 土坑 遺物出土状況



423 土坑 完掘



220 土坑 遺物出土状況



436 土坑 遺物出土状況



272 土坑 遺物出土状況



459 土坑 完掘



317・320 土坑遺物出土状況



468 土坑 完掘



C4地区全景(東から)



1007井戸 井戸枠



1007井戸 井戸枠支えの記号



1007井戸 井戸枠支え



1007井戸 井戸枠支えの記号



図版8 C3・C4地区第2面



全景（北西から）



全景（南東から）



1043 自然流路 須恵器出土状況



北壁断面（南から）



1042 自然流路 土師器出土状況

図版9 C5・C6地区第1面全景



(北西から)



(南東から)

図版10 C6地区第2面



C6地区全景(南から)



2059 柱穴



2026・2027 柱穴



2048 柱穴



2020 柱穴



全景（南東から）



全景（北西から）



C6地区南壁断面（北西から）



C6地区東壁断面（南から）

図版12 吹田操車場全景



国土地理院「米軍撮影航空写真」(M27-2) 1948年3月19日撮影

図版13 吹田操車場跡



吹田操車場跡全景（北東から）



上りハンプ跡（南西から）



第6信号扱所（南東から）



殉職碑（南東から）



第2職員地下通路出入口（北西から）



吹田操車場駅本屋（北から）

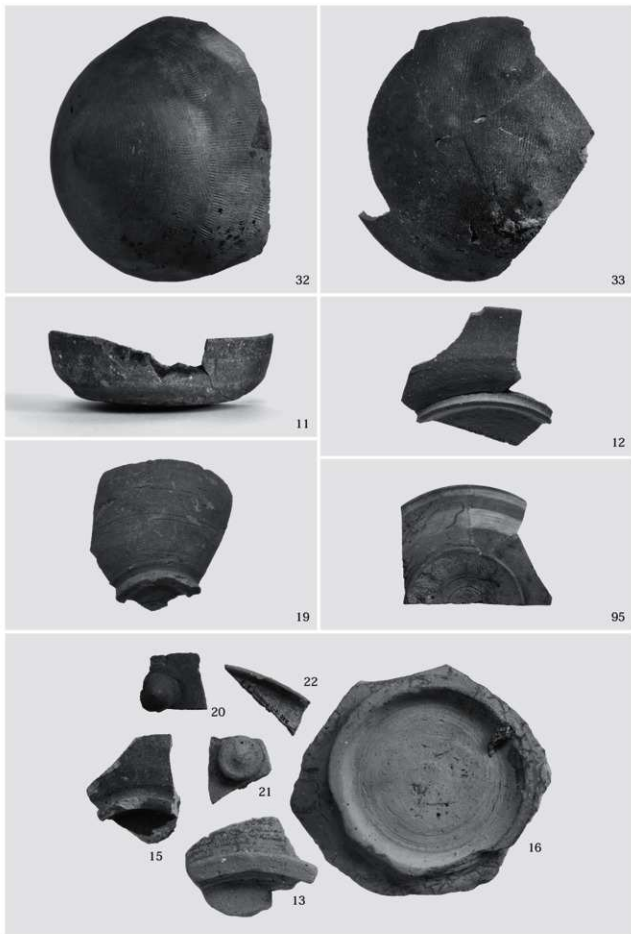


待機中の列車（右）と休憩所（左）（北東から）

図版14 C1・C2地区群集土坑出土遺物(1)

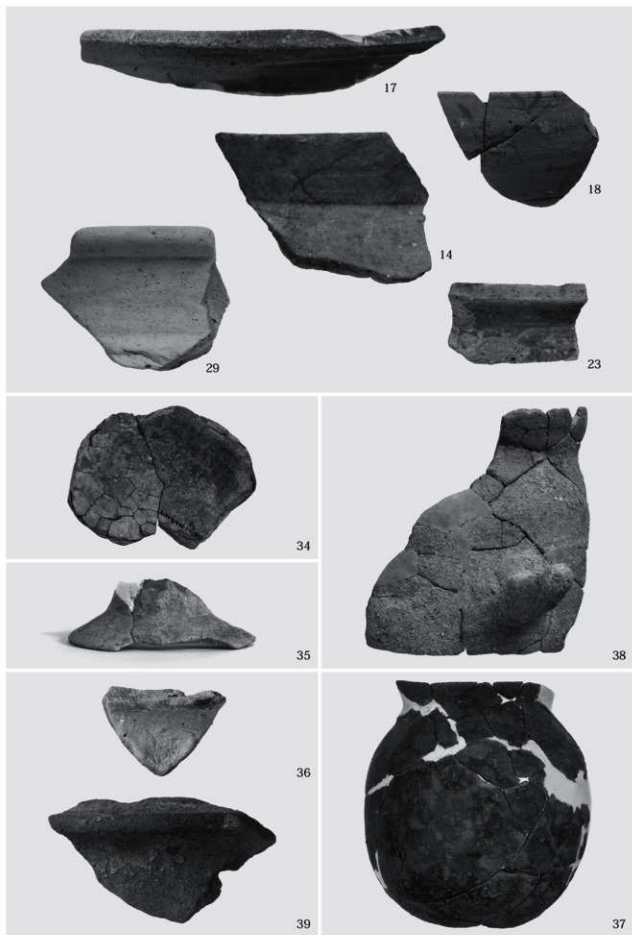


图版15 C1·C2地区群集土坑出土遗物(2)





図版16 C1・C2地区群集土坑出土遺物(3)

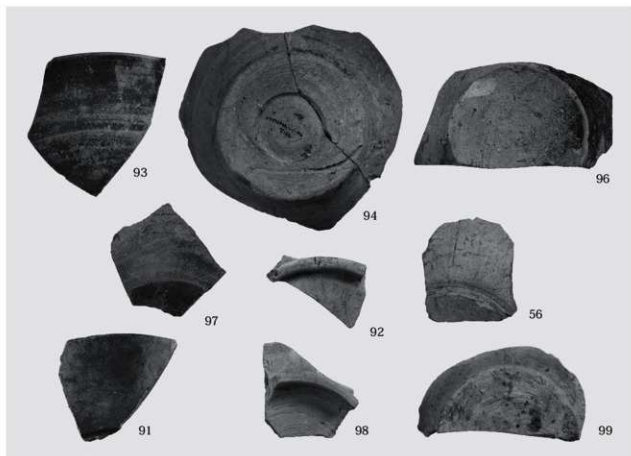


图版17 C 1·C 2地区405土坑出土遗物(1)

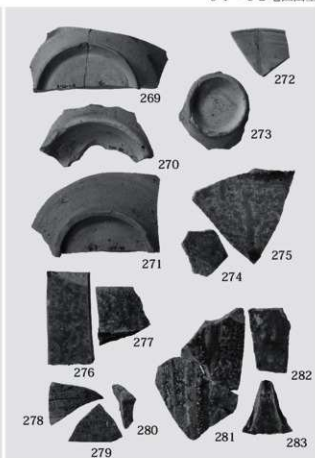
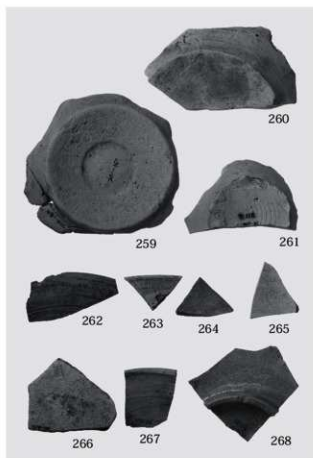


図版18 C 1・C 2地区405土坑出土遺物(2)



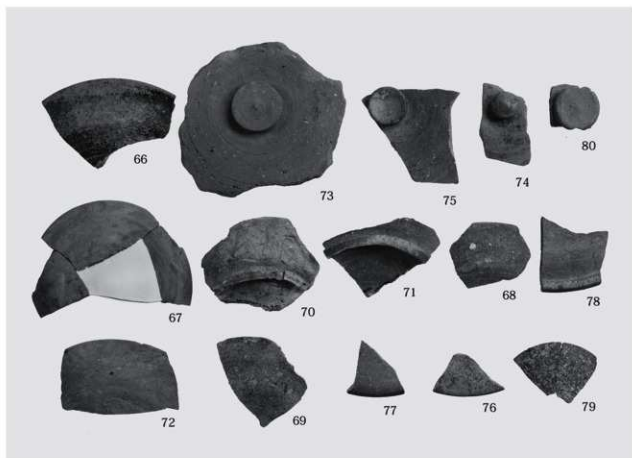
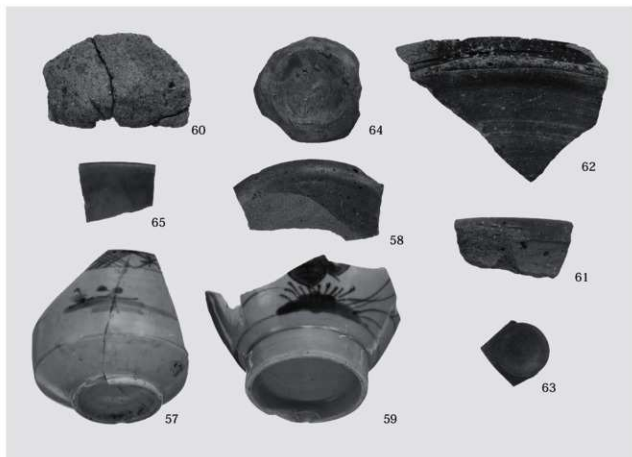


C1・C2地区出土

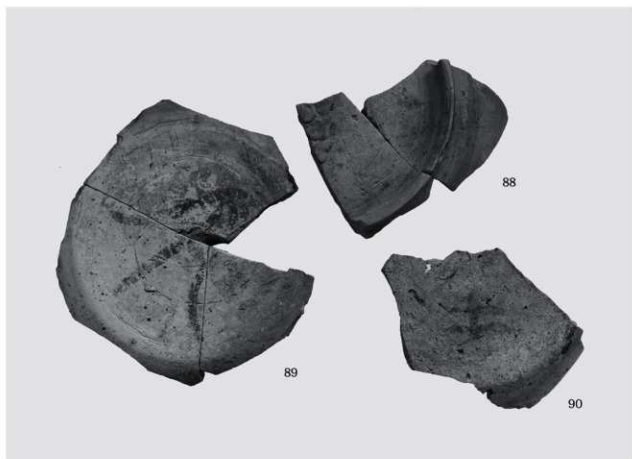
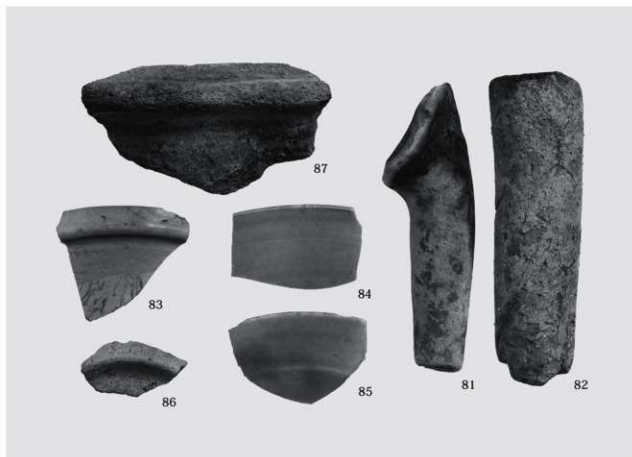


当センター既往調査出土

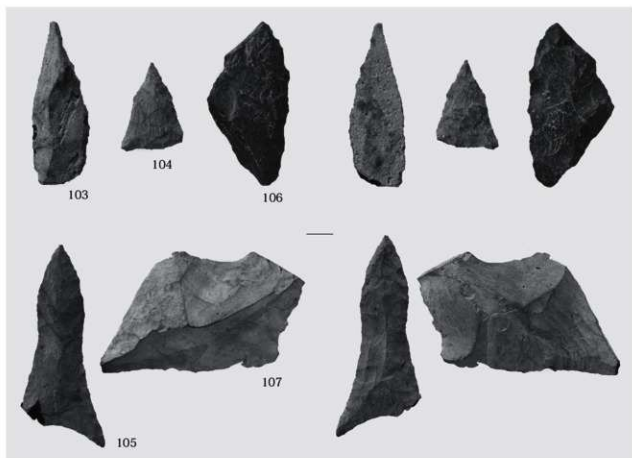
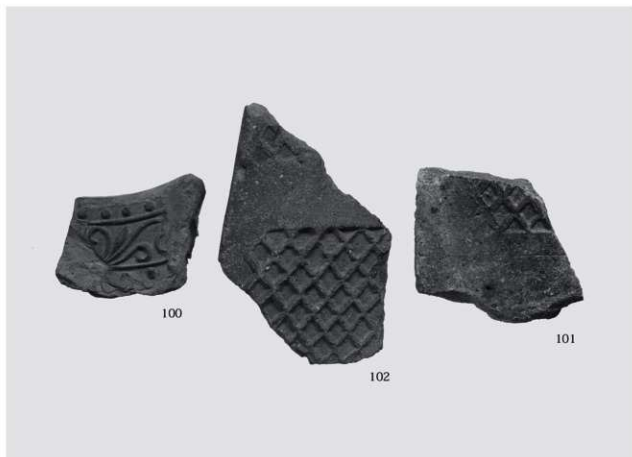
図版20 C1・C2地区包含層出土遺物(1)

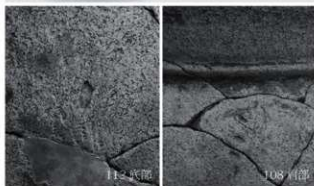


图版21 C1·C2地区包含层出土遗物(2)



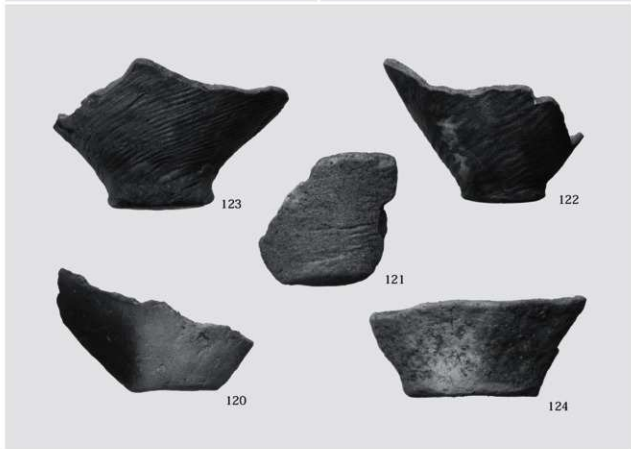
图版22 C1·C2地区群集土坑·包含层出土遗物



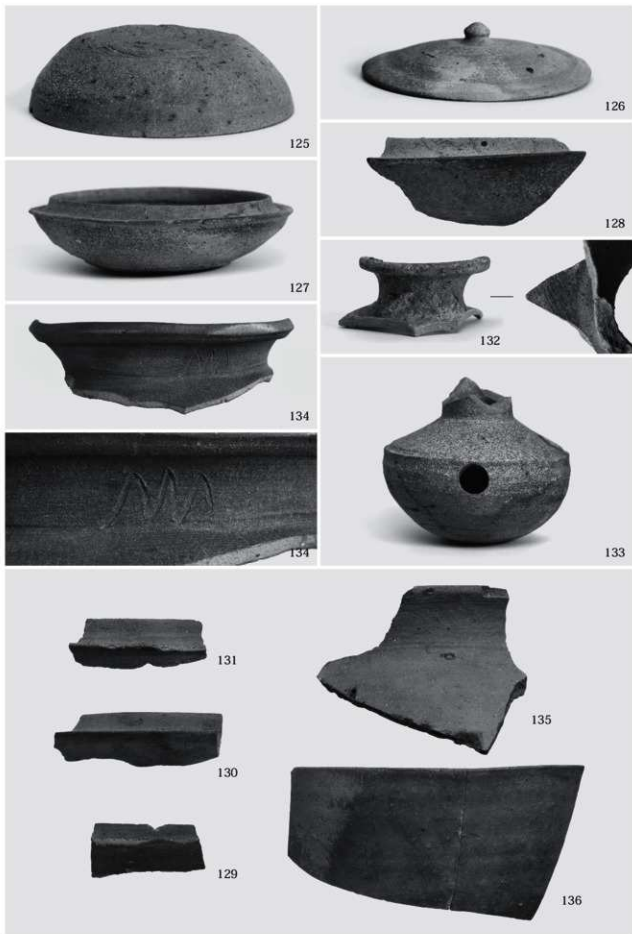




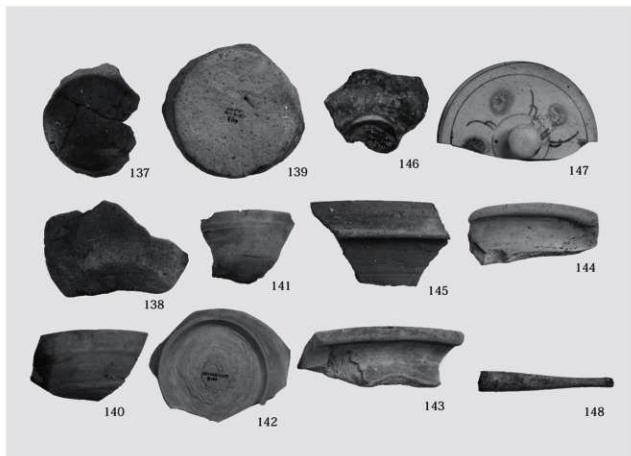
図版24 C3・C4地区自然流路出土遺物(2)



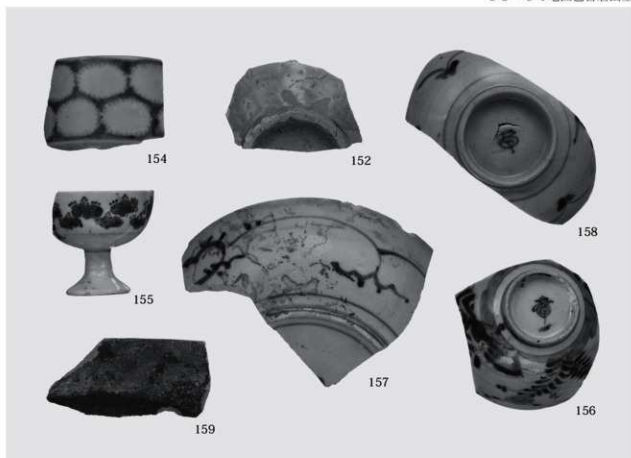
图版25 C3·C4地区自然流路出土遗物(3)



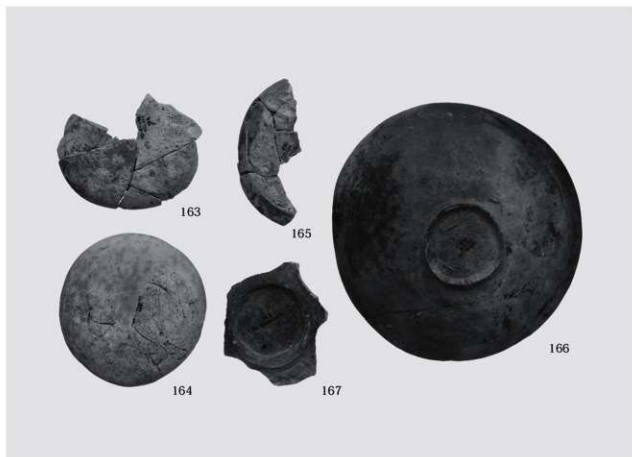
图版26 C3·C4地区·C5·C6地区出土遗物



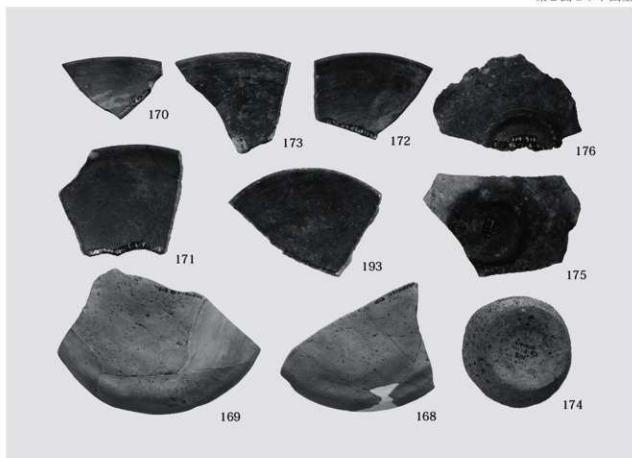
C3·C4地区包含層出土



C5·C6地区第1面2005井戸出土

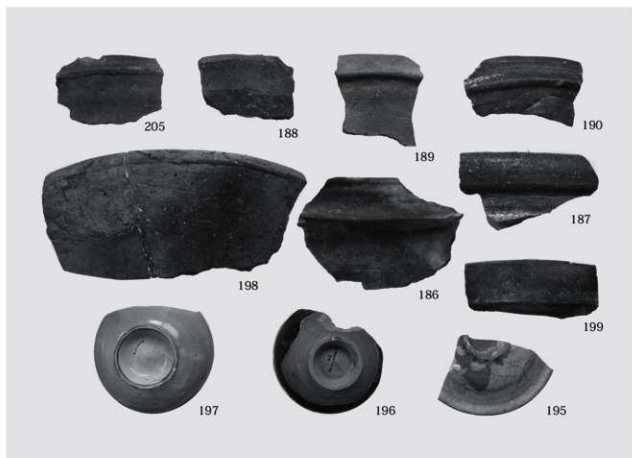
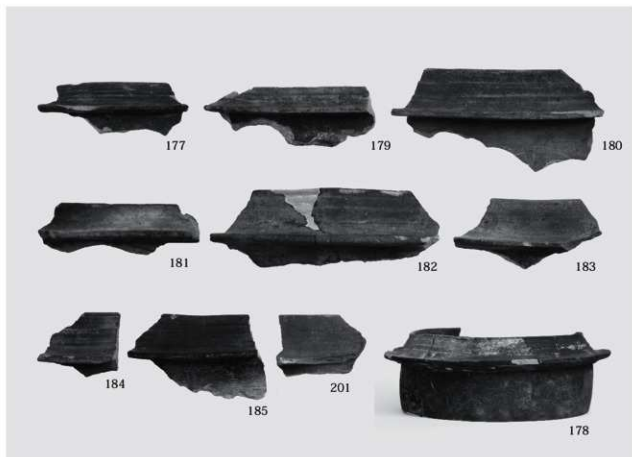


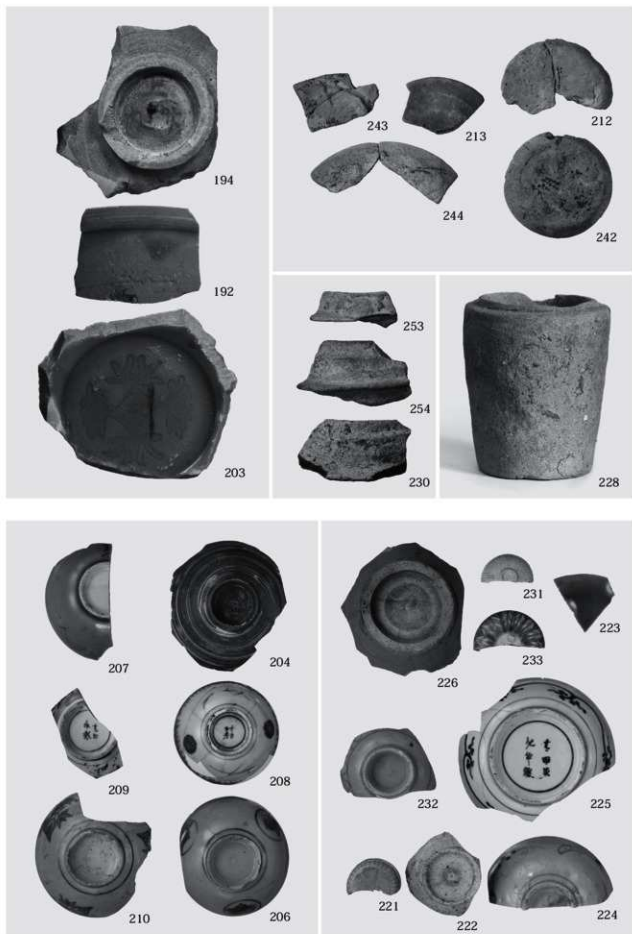
第2面ビット出土



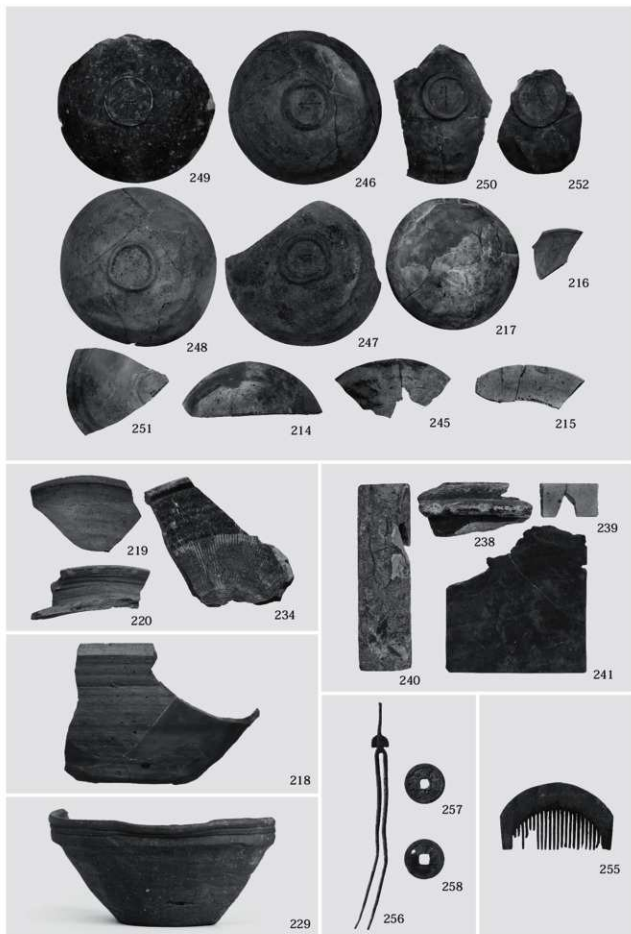
第3面遺構出土

図版28 C5・C6地区第3面遺構出土遺物





図版30 C5・C6地区第1面遺構・第3面盛土・包含層出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	すいたそしやじょう いせき さん						
書名	吹田操車場遺跡III						
副書名	吹田信号場駅基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第180集						
編著者名	中岡 勝・駒井正明・向井 妙・長嶺 睦						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 ℡072-299-8791						
発行年月日	2008年7月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
すいたそしやじょう いせき 吹田操車場遺跡	おおさかふ すいたし 大阪府吹田市  しばたちょうほかにない 芝田町他地内	27205	73	北緯 42° 14' ~ 42° 39'  東経 135° 60' ~ 135° 87'	2006. 8. 8  ~2007. 6. 29	4283㎡	吹田信号場駅基盤 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
吹田操車場遺跡	集落	弥生時代～ 古墳時代前期  古墳時代後期 ～平安時代	自然流路・谷  群集土坑 掘立柱建物	弥生土器・土師器  須恵器・土師器・墨書土器・ 緑輪陶器・灰輪陶器・瓦 木製品	外束系古式土師器  粘土探堀坑 後期難波宮所用瓦(6303・6664型)		
	耕作地跡	鎌倉時代～ 江戸時代	ピット・井戸・土坑・溝 ・自然流路	土師器・瓦器・輸入陶磁器 土師質土器・瓦質土器・瓦 陶磁器・石製品			
要約	C1・C2地区では群集土坑約300基とそれに付属する建物を検出した。群集土坑は古墳時代後期～奈良時代にかけてのもので、分析および検討より粘土探堀坑の性格を想定した。土坑および包含層から緑輪陶器・灰輪陶器・後期難波宮所用瓦が出土している。またC3・C4地区では自然流路より一括放棄された外束系の古式土師器がみつまっている。C5・C6地区では、鎌倉時代以降、自然地形を利用した耕作地の変遷がうかがわれた。						



(国) 大阪府文化財センター調査報告書 第180集

## 吹田操車場遺跡Ⅲ

吹田信号場駅基盤整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2008年7月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所